

地主ノ變更ハ土地ノ所有權ニ關スルモノニシテ是等ノ變更ハ其ノ都
度地稅臺帳ニ登記シ以テ之ヲ訂正ス

土地ノ變更即之ヲ細言セハ其ノ收穫高ノ増減ハ各個ノ土地ニ關スル
モノト一地方ノ土地一般ニ關スルモノトアリ

各個ノ土地收穫高ハ生産物ヲ重ニ賣出スル土地ノ變更又ハ生産費ノ
多少等ニ因リテ増減アルヘシ又荒蕪ノ地ヲ開墾シテ農用地トナス
トアルヘク之ニ反シテ天然ノ現像ニ因リ從來ノ農用地變シテ無用ノ
地トナルコトアリ凡不公平ノ判然スルモノアレハ直チニ之ヲ調査シ
テ公平ニ歸セシムルハ徵稅事務ノ職分ナリトス

例ヘハ穀物ノ生産ニ就キ外國ト不利ノ競争ヲナスカ如キ連年農業收
穫ノ全部若ハ一部分ヲ着シク減少スルノ原因トナル出來事アリ其ノ
一時ニ止マレモノハ國日更之ヲ不問ニ付シテ可ナリト雖若連年其ノ

收穫ヲ低減スルカ如キコトアラハ收稅應ニ於テハ其ノ徵收スヘキ租
稅ヲモ亦低減スルコト極メテ緊要ナリ若否ヲサルトキハ地稅ヲ納ム
ル者ト他ノ收穫稅ヲ收ムル者トノ間ニ課稅ノ公平ヲ失スルニ至ラン

第九十五章

抑地稅臺帳設置法ノ完美ナルハ一時何人モ疑ヲ容レサル所ナリシカ
今日ニ至リテハ往々之ヲ間然スル者アリ而シテ其ノ之ヲ不可トスル
者ノ言ニ曰ハク地稅臺帳ハ如何ニ精密ト注意トヲ以テ之ヲ調製スル
モ到底公平均一ノ課稅ヲ保スヘカラス第一ニ之ヲ設置スルニハ幾多
ノ年月ヲ要スルカ故ニ最初ニ測量評定ヲナシタル地方及其ノ土地ト
最後ニ之ヲナシタルモノトハ其ノ稅額ノ比例ヲ均一ニスルコト難シ
第二ニ土地ノ價格ヲ評定スルニ就キ決シテ專恣モナク亦錯誤モナシ
トハ斷言シ得ヘカラス第三ニ地主ハ後ニ土性ヲ改良シテ竊カニ其ノ

收穫ヲ増スコトアラハ之ニ不正ノ利ヲ與フルノ理ナリ斯ノ如キ弊害
 ハ屢其ノ検査ヲ實行スルモ素ト此ノ検査タル僅々一二ノ土地ニ就キ
 之ヲ行フニ過キササルモノナレハ悉ク其ノ諸弊ヲ豫防スルヲ得サルヘ
 シト且此ノ地稅臺帳ヲ設置スルニ要スル時ト費用ノ莫大ナル其ノ待
 ル所ノ利益ハ決シテ之ヲ償フニ足ラストハ從來世人ノ稱道スル所ナ
 リキ故ニ此ノ法ヲ不可トスル者ハ曰ハク地主ノ收穫申立ヲ基トシ總
 代ヲシテ其ノ申立ヲ監督セシムルノ法ヲ設ケ以テ地稅臺帳ノ法ニ代
 フヘシト蓋此ノ申立法ハ之ヲ行フニ速カニシテ其ノ費用モ亦少ナリ
 且既ニ他ノ租稅ニ於テ世人ノ實驗スル所況ヤ其ノ純然タル推測ニ出
 テタル收穫平均額ニアラスシテ單ニ所得ノ實額ニ課稅スルヲ以テ公
 平ヲ得タリト云フヘシト然レトモ若此ノ論ヲシテ實際ニ行ハレシム
 ルトキハ地稅ハ變シテ所得稅トナルヘキニ似タリ

故ニ收穫申立法ニ反對ノ論ヲナス者モ亦尠ナシトセス其ノ反對論者
 ハ曰ハク人皆納稅額ヲ小ナラシムルヲ以テ己レノ利益トナシ且農者
 殊ニ小農者ハ概テ必需ノ智識ヲ具ヘス秩序アル會計ノ法ヲ用ヒス甚
 シキニ至リテハ全ク己レノ所得ヲ確知セサルカ如キモノアリ故ニ其
 ノ申立ハ虚偽ニ近カラサレハ則想像上ノ少額ナルヘシ是ヲ以テ此ノ
 法ヲ實施シタル結果ハ大ヒヨ其ノ充分ナラサルヲ恐ル之ニ由リ之ヲ
 觀レハ其ノ地稅臺帳ノ法ヲ維持スルニ如クハ莫シ蓋此ノ法タル未ダ
 完全ヲ得タリト云フヘカラサルモ各個人ヲシテ專恣ヲ逞クセザムル
 コト少ナク且其ノ調製ノ標準ニマテ及ホスヘキ臨時ノ検査改正ヲ執
 行セハ其ノ錯誤ヲ防クニ足ラン而シテ之カ爲ニ生スル許多ノ費用ハ
 獨リ課稅術ノ上ニ於ケルノミナラス他ノ事項ノ爲ニ生スル所ノ利益
 ヲ以テ之ヲ償フニ足ルノ利アルヲ以テナリト

夫地稅臺帳ヲ間然スルノ論モ亦一理ナキニアラサルヲ以テ全ク之ヲ
 排止スヘカラスト雖今日慣用セル收穫稅法ノ實効之レアル間ハ此ノ
 臺帳ヲ廢シ以テ他ノ方法ニ據リテ徵收スル所ノ地稅又ハ所得稅ヲ以
 テ之ニ代フルノ必要アリトモ思ハレス蓋地稅臺帳ノ法ハ第一ニ確實
 ニシテ且毎年大概同額ナル稅金ヲ國庫ニ納メ第二ニ此ノ稅ハ抵當
 性質ヲ帶フルカ故ニ今之レヲ廢スルトキハ管ニ一回ノ納稅額ノミト
 ラス資本中ニ見積リアル稅金額ヲ目下ノ現所有者ニ贈與スルノ實アリ
 第三ニ地稅臺帳ニ於テ一旦評定セシ收穫高ハ之ヲ變更シ得ヘカラ
 ト云フニアラス不斷之ヲ檢查改正シテ多少ハ其ノ實況ヲ追フコトヲ
 得ルモノナリ且地稅ハ各別ノ納稅主ヨリ直接ニ之ヲ徵收セス則政治
 的團體殊ニ町村ヨリ一括ニシテ之ヲ徵收シ而シテ地稅臺帳ヲ基トシ
 以テ其ノ收穫ノ多寡ニ影響アルヘキ點ヲノ原素ヲ斟酌シ其ノ額ヲ各
 個ノ納稅主ニ賦課スルコトヲ以テ團體ニ委任スルトキハ猶更實際ニ
 適スルノ利益多シトス

三 家屋稅

第九十六章

家屋稅ハ家屋ノ收穫ニ課シテ其ノ所有者ヨリ徵收スル稅ナリ國有家
 屋並ニ教會學校及慈惠院ノ家屋ハ皆免稅トシ新築ノ家屋モ亦落成後
 一時租稅ヲ免レシムルコト徃々之レアリ然レトモ其ノ期限ハ短縮ナ
 ルモノナリ

此ノ稅ハ家屋ノ常時收穫ヲ以テ其ノ經濟上ノ泉源トシ其ノ始メテ世
 ニ行ハル、ニ至リシハ今ヲ距ルコト頗ル遠遠ナリ抑家屋ノ收穫高ヲ
 確定セントスレハ先ツ其ノ使用ノ目的如何ヲ察セサルヘカラスト今其
 ノ目的ニ據リ之ヲ類別スレハ則左ノ三種トナスヘシ

- 第一 農[○]業[○]用[○]家[○]屋[○]即農者ノ住居、獸舎、農產物貯蓄等ニ供用スル家屋
 - 第二 營[○]業[○]用[○]家[○]屋[○]即營業及起業ニ要スル家屋
 - 第三 市民ノ住家即専ラ貸家トナスヲ目的トスル家屋
- 右使用ノ目的ニ據リ之ヲ考フルトキハ家屋ヲ以テ收益ノ資本トナス時即借家ヲ築造シテ之ヲ貸貸スルヲ營利ノ業トナス時ニアラサレハ元來家屋ノ收穫稅ヲ課スヘカラサルコト明瞭ナラン蓋家屋ヲ以テ他ノ營業ニ使用スルモノニ就キ嚴正ニ之ヲ論スレハ則其ノ家屋ヨリ特ニ收穫ヲ生スルコトナキニ非スヤ故ニ營業用ノ家屋ハ其ノ營業ニ加ヘ又農業用ノ家屋ハ農業上ノ起業若ハ地稅ニ加ヘ以テ課稅セサルヲ得サルノ理ナリ然レトモ收穫中營業用及農業用ノ家屋ヨリ生スル部分ヲ算定スルコトハ非常ニ困難ナルヲ以テ其ノ營利業ノ目的ニ使用スル家屋ト雖仍營業ニ加ヘテ之ニ課稅セス而シテ其ノ使用ノ目的ヲ

問ハス總テノ家屋ニ關スル收穫稅ヲ課スルノ主義ヲ執ルコト常ナリ夫此ノ主義タル之ヲ實行スルノ上ニ於テ別ニ其ノ弊害アルヲ見ス否他ノ收穫稅殊ニ地稅及營業稅ヲ斟酌シ且家屋使用ノ目的ニ據リテ差等ヲ立ツル以上ハ其ノ課稅術ノ必要ヨリ之ヲ勸奨セント欲スルナリ但此ノ目的ニ據リテ差等ヲ立ツルモノハ各國ノ實例ニシテ其ノ營業用ノ家屋ニ於テハ一般ニ行ハレサルモ農業用ノ家屋ニ於テハ殊ニ差等アルコト多シトス

第九十七章

家屋ニ生スル收穫ハ左ノ二原素ヨリ成ル

- 第一 家屋敷地ニ生スル收穫
 - 第二 家屋其ノ物ニ生スル收穫即家屋ニ用ヒタル資本ノ利子
- 農業用ノ家屋ニ於テハ收穫全部ノ内土地ノ收穫ニ歸スヘキ部分ハ之

ヲ都市ノ家屋ニ比スレハ遙カニ大ナルコト疑ヲ容ルヘカラス是ヲ以テ今代ノ法律ハ農業用家屋ハ重ニ其ノ敷地ノ面積ヲ以テ税額評定ノ基礎トナシ都市ノ貸家ハ貸家賃ノ額ヲ以テ其ノ基礎トスルコト常ニリ二三ノ法律ニ在リテハ單ニ都市ノ家屋ト田舎ノ家屋トヲ區別スルヲ以テ足レリトス若斯ノ如クスルトキハ法律上都市ト田舎トノ定義ヲ明瞭ニシテ之ヲ混亂スルノ弊ナカラシムルヲ要スルハ固ヨリ論ノシ

是ヲ以テ家屋ノ都市ニ在ルト田舎ニ在ルト(農業用家屋ナルト)ニ隨ヒ其ノ税額ヲ評定スルノ法ヲ異ニスト雖家屋臺帳ト稱スル帳簿ヲ設ケ恰モ地税ニ於ケルカ如ク家屋ノ課税ニ關スル總テノ條項ヲ擧ケ盡ク之ニ登記スルノ点ニ至リテハ何レノ法モ皆同一轍ナリ

第九十八章

第一 都市家屋ノ税額評定

室及暖室爐ノ數、戸及窓ノ數等ノ如キ種々ナル外見ノ徵候ニ據リテ税額ヲ評定スルコトアリト雖都市ノ家屋ニ在リテハ次第ニ此ノ法ヲ用ユルコトヲ減セリ右等ノ如キ徵候ハ決シテ家屋ノ收益ニ對シ動スルカラサルノ關係アルモノニアラサレハ此ノ法ヲ廢スルヲ以テ至當ト謂ハサルヲ得ス

都市ニ於ケルカ如ク賃貸ノ家宅多キ地ニ於テハ家毎ニ其ノ收穫ヲ直接ニ調査シ即借料ノ實額ニ據リテ其ノ税額ヲ評定スルヲ最正當ナトシ且之ヲ實行スル敢テ難カラサルナリ夫所有主ヲシテ其ノ收益ノ年額ヲ届出ツルノ義務ヲ負ハシメ而シテ借家人ニ就キテ其ノ確否ノ監督スルコトハ固ヨリ容易ナルヲ以テ其ノ届出ヲシテ益適實ナラシムルヲ得ルナリ然レトモ其ノ法タルヤ毎年ノ實收額ニ據ラズ數年間

ノ平均額ニ原準シテ其ノ税ヲ課スルコト常ナリ又官廳ニ於テ其ノ額ヲ評定スルハ家屋ニ住居人ナキカ又ハ所有主自ラ其ノ内ニ住居スル時ニ限レリ蓋所有主ハ其ノ自ラ住居スル部分ニ對スルモ納税スヘキハ疑ナシ故ニ此ノ際ニ於ケル收獲ハ所謂潛匿ノ狀ヲナスノ別アルノミニシテ所有主ハ等シク其ノ利益ヲ收ムルニ相違ナケレハナリ家屋税ハ修繕費、保険料及資本償却等ヲ收獲中ヨリ減除シテ其ノ純收額ニ據リ之ヲ課スルヲ得ヘシト雖是等ノ費用ハ建築ノ材料、位地、氣候等ニ因リテ頗ル異ナルカ故ニ之ヲ算定スルコト極メテ難シ是ヲ以テ現今多クハ其ノ總收額ニ據リテ税ヲ課スルノ簡易法ヲ執ルニ至レリ家屋税ノ外其ノ敷地例ヘハ最高等ノ地稅額ニ準シテ各別税ヲ課スルコトアリ然レトモ斯ノ如キ數稅兼課ノ法ハ便宜ニ適スルヤ否之ヲ斷言スヘカラサレナリ

第九十九章

第二 田舎家屋ノ稅額評定

純然タル田舎又ハ田舎ノ小市ニ在ル所ノ家屋即專ラ農業ニ用ユル家屋ニ對シ課税スルニ單ニ其ノ建物ノ面積ニ準シテ稅額ヲ定ムルハ最簡單ノ方法ナルヘシ蓋此ノ法タル簡ハ即簡ナリト雖却リテ專恣ノ弊アルヲ免レス何トナレハ其ノ面積ノ大小ハ收獲ノ原準トナラサルノ點ハ姑ク之ヲ不問ニ附スルモ此ノ面積稅ト借家料稅ノ比例其ノ當ヲ得セシムルコト甚タ難ケレハナリ
右專恣ノ弊ハ家屋稅ニ等級ヲ定ムルノ法ニ據リ最能ク之ヲ避クルヲ得ヘシ田舎及小市ニ在リテハ家屋ヲ賃貸スルコト極メテ稀ナルニ因リ家毎ニ其ノ收獲ヲ評定スルヲ得ス故ニ家屋稅等級ヲ定メ恰モ地稅ニ於ケルカ如ク家毎ニ其ノ相當ノ等級ヲ指定シ之ニ據リ其ノ稅ヲ評

スルナリ勿論其ノ等級ヲ指定スルニモ收穫ヲ標準トスヘキモノニシテ其ノ收穫ハ則確知スルヲ得ヘキ買價又ハ借家料ヲ基礎トシテ之ヲ調査スルモノトス然レトモ敷地ノ大小之ニ属スル其ノ他ノ農用地ノ大小層數室ノ大小及其ノ數等ノ如キ外見ノ徵候ヲ基礎トスルヲ優レリトス斯ノ如クシテ定メタル等級ハ時々検査シテ之ヲ改正スルヲ要スルハ猶地稅ニ於ケルカ如シ

四 金利息

第百章

金利息(資本金)子稅又ハ貸金利息稅ト云フハ最近代ニ至リテ始マリタル租稅ノ一ニシテ資本(狹義)ヲ以テ云フニ生スル收穫即資本ノ利子ニ課シテ其ノ資本家ヨリ徵スル所ノ稅ナリ
資本ノ利子ニ課稅スルノ法ニ對シ異論ヲ唱フルモノ少ナシトセス其

ノ異論ノ要概ハ左ノ如シ曰ハク抵當義務ヲ負ヒタル家屋又ハ土地ノリ而シテ今其ノ抵當ニ生スル收穫ニモ亦課稅スルトキハ實際二重ノ稅ヲ課スルノ不公平ヲ生スル場合尠ナラスト又曰ハク此ノ稅ハ債主ヨリ負債主ニ移轉セラル、コト容易ナルヲ恐ルト又曰ハク資本ノ性質其ノ種類極メテ多々ナルカ故ニ多少其ノ實ヲ見出スヘカラサルノ弊アルト利金變動常ナキヲ以テ其ノ徵收法ハ到底之ニ應スルヲ付サルトニ因生スル不公平ハ終ニ免ルヘカラサルナリト
其ノ異論右ノ如シ然レトモ抑此ノ稅タル其ノ評定徵收殊ニ困難ナルコトハ爭フヘカラサルノ事實トスルモ他ノ收穫ハ皆既ニ課稅セラル若資本ニ生スル收穫ニ限り無稅トスルトキハ其ノ公平ノ大義ニ悖ルヲ如何セン又二重稅ヲ課シ又ハ納稅ヲ移轉スルニ至ルヲ恐ル、モ其ノ實斯ノ如キ外觀アルト又其ノ推測ニ出ツルトニ過キササルノミ豈ニ

是等ノ故ヲ以テ敢テ公平ノ大義ヲ棄ツ可ケンヤ又資本ノ蓄積ヲ困難ナラシムルヲ恐ル、コトハ賦課其ノ宜キヲ得ス税額法外ニ多キ時一當タリテハ或ハ其ノ謂レナキニアラサルモ動産的資本ノ増殖迅速ナルヲ得ルト其ノ經濟上ノ効力著大ナルノ今日ニ在リテハ毫モ之ヲ愛フルニ足ラス良シ又其ノ害ナシトセサルモ些少ノ利金ハ其ノ税ヲ免シ以テ之ヲ防シコトヲ得ルノ道アリ故ニ實際ニ生スル困難ト雖決シテ之ニ打勝ツヘカラストナス程ノモノニモアラス否要スルニ他ノ租税ヨリモ其ノ困難却リテ大ナラスト信スルナリ是ヲ以テ若良法ヲ建テ以テ資本家ノ申立ヲ憑信スルヲ得ルトキハ此ノ税法ノ困難ハ他ノ税法ニ比シテ大ヒニ少ナカルヘキナリ

第百一章

抑金利ナルモノハ其ノ全體ノ性質ヨリ之ヲ論スルトキハ純然タル利

子ノ外尙保險料ヲ包含スルコトアリ然レトモ純然タル利子ヲ計算スルニハ一モ確乎タル標準アルニアラス唯一國ニ慣用セル利子ニ據ルカ如キ一法アルノミ此等ノ事體ニヨリ之ヲ見ルモ其ノ保險料ニ屬スル分ヲ免稅スルハ既ニ必要ナラサルヲ信ス

利子ハ其ノ金額ニ課稅スヘキカ如ク凡利子ヲ生スル資本ハ抵當權及質取權又ハ無抵當貸金トシテ存シ或ハ公私ノ流通券ヲ以テ存スルモ又其ノ収益ハ利子ト稱スルモ年金ト云フモ其ノ名義ノ何タルコト論ナク一切悉ク税額評定ノ數ニ加フヘシ其ノ他納稅主ニ就キテ論スルモ凡内國ニ於テ金利ヲ收ムル資本家ハ既ニ他ノ地ニ於テ同一ノ税ヲ納ムル時ノ外ハ悉ク之ニ納稅ノ義務ヲ負ハシメテ可ナリ獨リ株券又ハ之ニ類スル流通券ニ在リテハ他ノ税例ヘハ所得稅ヲ課スルノ故ヲ以テ其ノ收獲ヲ規外トスルコト稀ナラス

右公ケノ流通券殊ニ國債証券ニ稅ヲ課スルノ當否ハ今尙世人ノ爭論
 スル所ナリ之ヲ否トスル論者ハ曰ハク國債ノ利子ニ稅ヲ課スルトキ
 ハ債債主ハ國債契約ノ規約トシタル利子中ノ一部分ヲ債主ヨリ取戻
 シ又ハ利子札稅ニ在リテハ其ノ一部分ヲ差引シ去ルヲ以テ深ク其ノ
 實ヲ察スルトキハ其ノ行爲ハ債債主カ巧ニ一部分ノ仕拂不能ヲ隱蔽
 スルモノナリト然リト雖國家カ利子ノ免稅タルコトヲ明約シタル場
 合ノ外ハ債主ニ稅ヲ課スルモ彼ノ國家カ官吏ニ俸給ヲ給シ而シテ之
 ニ稅ヲ課スルト同シク毫モ其ノ權利ヲ毀損スルコトナシ何トナレハ
 利子ヲ仕拂フノ法律上ノ名義ト租稅ヲ徵收スルノ法律上ノ名義トハ
 全ク其ノ起原ヲ異ニスレハナリ

第百二一章

金利種ノ評定及徵收ヲ論スルニ方リテハ先ツ之ヲ間接直接ノ二法ニ

分タサルヘカラス
 其ノ一 債債主ニ就キテノ間接評定
 債債主ヲシテ債債ノ利子ヲ届出テ且其ノ利子ニ課スル稅ヲ仕拂フノ
 義務ヲ負ハシメ而シテ其ノ債債主ハ利子ノ内ヨリ稅額ヲ引去リテ之
 ヲ債主ヨリ償ハシムルト否トハ一ニ之ヲ債債主ノ意ニ任カスヘキ法
 ナリ蓋此ノ法タル公ケノ流通券ニ關スル所謂利子札稅ニ在リテハ之
 ヲ用ヒテ好果アルヘシ何トナレハ債主ハ利子仕拂ノ時其ノ稅ヲ引去
 ラル、モ之ヲ避クルニ道ナケレハナリ然レトモ此ノ法ハ唯公ケノ流
 通券就中内國ノ流通券ニ於テノミ之ヲ行フヲ得ルニ過キス且些少ノ
 金利ヲ免稅シ又ハ繁雜ナル回復法ヲ施スニアラサレハ累退的ノ課稅
 ヲナスヘカラサルカ故ニ何レノ場合ヲ問ハス之ヲ勸奨スルコトハ固
 ヲリ爲シ得ヘカラス若此ノ法ヲ實行セハ國家ニ對スル債主ハ他ノ債

主ヨリモ嚴正ニ其ノ税ヲ課セラレ隨ヒテ國債ノ利子ヲ貴クシ自ラ國家ノ爲不利トナルコトナキヲ保スヘカラス

私ノ貸借ニ係ル利子ノ課税ニ在リテハ負債主ハ債主ヨリ其ノ仕拂ヒタル税額ノ賠償ヲ受クルコト能ハサルヤノ恐レアルノ點ヨリ考フルモ既ニ此ノ間接法ヲ用ユルコト難シ而シテ租税ノ利子ニ對スル割合大ナルニ隨ヒ負債主ハ其ノ賠償ヲ受クルコト愈々難カルヘシ若負債主其ノ賠償ヲ受クルコト能ハサルトキハ負債主ハ已レノ利益上利子額ヲ偽リ以テ竊カニ納税ノ義務ヲ免レント謀ルコトナキヲ保セス果シテ然ラハ抵當等ノ如キ公ケノ登記ヲ經タル私ノ貸借ニアラサレハ僅カニ税ヲ課スルヲ得ス而シテ其ノ登記ヲ經タルモノハ敢テ此ノ間接法ヲ用ヒサルモ直接法ヲ以テ等シク確カニ其ノ税ヲ課スルヲ得ヘキナリ且未登記ヲ經タル貸借ニ對シ間接法ヲ以テ其ノ税ヲ課スルトキ

ハ利子札税ニ於ケルカ如ク法外ノ不公平ヲ生スルノ恐レアリ加之ス負債主ハ已レノ一身又ハ業務ニ係ル利益上負債ノ有無ヲ秘スルノ要アルコト稀ナラス故ニ間接法ハ之ヲ實行シテ到底其ノ利アルヲ見サルナリ

第二 債主ニ就キテノ直接評定

金利ニ税ヲ課スルニ最簡單ナル法ハ債主ヲシテ其ノ収獲高ヲ届出ツルノ義務ヲ負ハシムルニアリ然レトモ此ノ法ニ於テ納税義務者悪意ヲ構フルトキハ借ニ利金ノ額ヲ偽ルニ容易ナルノミナラス其ノ利金ヲ収ムルノ事實ヲ全ク隠蔽スルヲ得ヘキヲ以テ納税義務者カ其ノ義務ヲ完クスルノ良心ニ富ミ且利金ヲ隱匿スルニ難キ時ニアラサレハ之ヲ用ヒテ効果ヲ収ムヘカラス此ノ法ノ未タ以テ完全無缺ト云フヲ得ヘカラサル右ノ如クナルニモ拘ラス其ノ著シキ不公平ハ法律ヲ以

テ之ヲ阻遮スルヲ得ヘシ細少ノ資本家ハ之ヲ免稅シテ保護スルヲ得ヘシ又納稅ノ轉移ハ之ヲ防シテ得サルモ少ナシモ之ヲ誘引スルノ弊ナキヲ以テ最良ノ法ト謂ハサルヲ得ス勿論此ノ法ヲ用ヒントスルトキハ通稅者ヲ嚴罰ニ處シ又自選ノ總代ヲシテ届出ノ當否ヲ検査セシメ相續ノ時ニ監督ヲナシ事宜ニヨリテハ其ノ負債主ニ就キテ調査ヲ遂ケ或ハ納稅名簿ヲ公ケニシ以テ資本家ノ良心ヲ維持スルコトヲ務メスンハアルヘカラス若夫強テ届出ノ精密ヲ要スルカ爲取稅廳ニ届出テタル負債ニアラサレハ其ノ法庭ニ訴フルノ効ナシトスルノ法ヲ定メントスルカ如キハ則權利保安ノ利害ヨリ之ヲ考フルニ決シテ勸獎スヘキコトニアラサルナリ

稅額ハ毎年ノ届出額ニ據リテ之ヲ算定スルヲ得ヘク或ハ家屋稅ニ於ケルカ如ク二年若ハ數年ノ平均額ニ據リテスルヲ得ヘシ又等級ヲ定

メテ稅額評定ノ基礎トナスヲ得ヘシト雖届出額ノ百分數ヲ以テ之ヲ評定スルチ良シトス

終リニ臨ミ尙一言スヘキコトアリ即資本ニ稅ヲ課スル金利稅ノ外財產移轉ノ稅ヲ徵スルコト是ナリ此ノ稅ハ適宜ニ之ヲ課スルトキハツノ補足トナルモノニシテ容易ニ脫稅ノ恐レアル一定ノ資本ニモ亦稅ヲ課シ以テ公平ヲ得ルノ方策トナルナリ尙次節ニ於テ之ヲ詳論スヘシ

五 營業稅

第三百三章

營業稅ハ營業ニ生スル収益ニ課シ以テ其ノ營業者ヨリ徵收スル所ノ稅ナリ

手職業、小製造業、大製造業、問屋商業、小賣商業、運輸業、保險業等凡獨立シ

タル營業ハ其ノ種別形狀ニ論ナシ皆納税ノ義務アル營業ナリトス獨
リ一定ノ廣大ナル營業殊ニ株式會社ノ如キ一會社ノ營業ニ限り實際
上ノ利便ヨリシテ別ニ其ノ税ヲ課シ或ハ他種ノ収獲税ヲ課スルナリ
而シテ營業税ハ各國通シテ一般ニ論スルトキハ最新ナル租税ノ一タ
リ且之ヲ納ムルノ義務アル人ノ種屬ニ限リアリ故ニ他種ノ収獲税ト
之ヲ類別セサルヲ得サルナリ

抑營業税ハ地稅家屋稅及金利稅ヲ補足スルニ必要ナルカ故ニ其ノ収
獲税ノ制ヲ固持スル間ハ之ヲ徵收スルノ道理アルコトハ毫モ疑ヲ容
ルヘカラス蓋其ノ徵收ハ困難ナリ製造家ノ起業心ヲ挫クノ恐レアリ、
納税ヲ消費者ニ移轉スルコト頻々ナリ又収獲額ハ始終一定ナシ此ノ
如ク種々ノ説ヲ以テ此ノ税ヲ非難スルモノアリト雖要スルニ是皆杞
憂ニテアラスレハ區々タル儲蓄ニ出テタルノ言ナリ苟今日ノ狀態ニ在

リテ此ノ營業税ナキトキハ則収獲税ノ制ニ於テ著シキ缺典ヲ生セン
コト掩フヘカラスナルノ事實ナルコトヲ知テハ豈復之ヲ非トスルノ理
アルコトヲ信スルモノアラシヤ

第四百章

此ノ税ハ可及的營業ノ總収獲中ヨリ機械及道具ノ步削減資本償却資
本ノ利子又ハ職工雇錢等ニ係ル一切ノ費用ヲ減除シテ得ル所ノ純収
獲ニ課スルヲ要ス然レトモ其ノ費用ヲ要スル原素殊ニ技術及交通法
ノ變更常ナキ今日ニ於テ生産費ヲ精密ニ計算スルコト至難ナルカ故
ニ多クノ法律ハ一定ノ徵候ヲ求メテ純収獲ヲ概量シ之ニ據リテ其ノ
税ヲ課スルヲ以テ満足スルモノ、如シ

試ミニ營業ニ生スル純収獲ヲ分析スルトキハ其ノ収獲ハ合同シテ相
共ニ課税スヘキ數種ノ成分即勞力ニ生スル収獲資本ノ利子及起業者

ノ利潤ノ混合ヨリ成ルコトヲ知ルヘシ勿論營業ノ性質ニヨリ右三種
ノ中何レカ其ノ一成分其ノ大部分ヲ占ムルコトアルヘシ然レトモ何
レノ法律ニ於テモ其ノ大部分ヲ占ムル成分ノ異ナルヨリ生スル各營
業収獲ノ多寡ヲ巨細ニ斟酌スル能ハサルハ比々皆然リ

第一百五五章

營業稅ヲ評定スルニ毎年収獲ノ實額ヲ調査シテ之ニ課稅スルト収獲
ノ平均額ヲ調査シテ之ニ課稅スルトノ二法アリ
第一 直接ニ調査シタル純収獲ニ據リテスル評定

此ノ評定法ハ之ヲ實行シ得ヘケレハ最良ノ結果アルコト固ヨリ論ナ
シ然レトモ之ヲ實行スルニ臨ミテハ實ニ打勝ツヘカラサルノ困難ニ
遭遇スヘシ其ノ困難ノ重モナルモノハ則納稅主ノ良心ニ乏シキノ弊
アリ是ナリ苟モ直接ニ収獲ノ實額ニ依リテ稅額ヲ評定セント欲セハ

營業者自身ノ届出ヲ基根トセサルヲ得サルカ故ニ深ク之カ監督ヲ施
スニアラサレハ其ノ満足スヘキ結果ヲ望ムヘカラス而シテ此ノ監督
タル各營業者ニ就キ其ノ營業ニ關スル簿冊ヲ閱覽スルニアラサレハ
實際ノ効果ヲ得ヘカラスト雖此ノ簿冊ヲ閱覽スルノ事タル營業者ニ
於テ最嫌忌スル所ナリ且其ノ營業者ヲシテ簿記ヲナスノ義務ヲ負ハ
シメサルヘカラス此ノ如キハ實際至難ノ事ナリト雖若シ之ヲ施行セ
サルトキハ則全ク之カ監督ヲ行フニ由ナカルヘシ然リ而シテ法律上
収支ノ計算ヲ公ケナラシムルノ義務ヲ負ハシメタル株式會社及之ニ
類スル營業會社ニ在リテハ或ハ直接ノ評定法ヲ用ユルヲ得ヘント雖
尙總収獲ニ反對ナル純収獲ヲ算定スルニ適實ナル標準ヲ得ルコト及
収獲ノ實額ニ據リテ課スルト平均額ニ據リテ課スルトニ由リ其ノ稅
額ノ比例ヲ公平ナラシムルコトノ困難ナルハ決シテ免カル、ヲ得サ

ル所ナリ

第二 収獲ノ平均額ニ據リテスル評定

此ノ法ニ於テハ營業ノ利潤ノ多寡ニ關スル概況ヲ示スヘキ一定ノ徵候ヲ根據トシテ評定スルモノナリ蓋營業ノ千種萬様ニシテ殆究極ナキヤ各國ニ於テ其ノ法律ノ規定ニ往々大差アルハ實ニ其ノ理ナキニ非サルナリ

多クノ法律ニ於テ實行スルカ如ク先ツ同類ノ營業ヲ類別シ而シテ一類毎ニ其ノ平均ノ収獲ニ相當スル最下限ノ稅率ヲ基礎トシ其ノ一類以内ニ於テ各別ナル營業ノ景況ヲ斟酌シ一定ノ徵候ニヨリ利潤多シトスルモノニ隨ヒ其ノ最下限ノ稅率ニ幾分ツ、ヲ加フルノ法ヲ以テセハ稍満足スヘキ比例ヲ以テ課稅スルヲ得ヘシ
備テ其ノ徵候ヲ定ムルニ及リテハ全ク一局所ニ限リ又ハ重モニ一局

所ヲ限ルモノヲ分ツ即得意先ニ限リアル營業ト又得意先ニ限リナキ營業トヲ區別セサルヲ得サルモノトス

(甲) 局所營業ニ在リテハ其ノ得意先ノ局所タル地方廣キトキハ其ノ賣口自ラ大ヒニシテ収獲モ亦多キノ理ナリトノ推測上ヨリ世人ハ其ノ地方ノ廣狹ヲ以テ収獲ノ多少ヲトスルノ徵候トナスヘシト信セリ然レトモ此ノ推測タルヤ固ヨリ其ノ適當ヲ得ルコトモ往々之レアルハ勿論ナルヘシト雖之ニ相反スルコトモ亦屢之レナキニ非サルヘシ唯肉眼上之レヲ分別スルヲ得サルヲ以テ姑ク此ノ如キ事實ノ存スルモノト看做シ營業ノ各類中ニ於テ其ノ地方廣大ナルモノニ對シテハ其ノ稅額ヲ増スヲ法トナスヘシ(地方評定)而シテ又同一ノ地方ニ在ル所ノ營業ハ其ノ事業ノ大小ニ據リ更ニ之ヲ區分スヘシ其ノ大小ヲ判斷スルニハ各其ノ類ノ自性ニ準シテ定ムヘキ他ノ徵候ヲ求メサルヲ

得ス是地方ニ原據シテ營業ヲ區分スルノ外尙各類中ニ於テ各別ナル營業ノ範圍ニ據リテ之ヲ區分スヘキ所以ナリ(事業評定)蓋其ノ營業範圍ノ廣狹ヲトスルノ徵候ハ不動資本ノ多寡例ヘハ機械及營業裝置ノ數及力機械場倉庫等ノ數及大小ノ如シ及移動資本ノ多寡例ヘハ職工ノ數粗製品及製產品ノ量ノ如キモノニ由リ之ヲ定ムルモノナリ是ヲ以テ若同一ノ種類ニ屬スル二個ノ營業アリトセシカ其ノ事業ノ範圍同一ナラト雖其ノ廣狹ヲ異ニスル土地ニ在ルトキハ則其ノ土地ノ大小ニ隨ヒ納稅額ヲ異ニスヘク又同一ノ土地ニ在リト雖事業ノ範圍ノ異ニセハ其ノ範圍ノ大小ニ隨ヒ亦納稅額ヲ異ニスヘシ故ニ土地ニ據リテ評定シタル類ト事業ノ範圍ニ據テリ評定シタルモノヲ合併シ始メテ各營業者ノ納稅額ヲ算定シ得ヘキナリ

乙) 營業者ノ納稅額ヲ算定シ得ヘキナリ

乙) 營業者ノ納稅額ヲ算定シ得ヘキナリ

依準シテ評定スルノ法ヲ用ユヘカラス單ニ事業ノ範圍ニ據リ通常最初ヨリ少シク多額ニ評定スルノ法ヲ用ヒテ課稅セサルヲ得サルナリ

第六百六章

前條述フル所ノ課稅法ハ多少其ノ發達ノ度ヲ異ニストハ雖殆ト各國ニ行ハル、モノナリ尙二三ノ國ニ於テハ營業稅ヲ類別スルコト極メテ細密ニシテ而シテ其ノ種類ヲ分チ地方ノ等級ヲ定メ適宜ニ其ノ徵候ヲ求ムルニ非常ノ勞ヲ費セリ此ノ非常ノ勞ヲ費ヤセシニモ拘ラス未タ以テ満足スルヲ得ヘキ課稅法ト云フニ至ラス何トナレハ其ノ徵候ハ縱令最良ナルニモセヨ概テ其ノ總收獲ノ概況ヲ示スニ過キヌシテ而シテ未タ全ク其ノ純收獲ヲ知ルノ原準トナスニ足ラサルヲ以テナリ例ヘハ各營業者ニ就キ粗製品又ハ製產品ノ量ヲ調査スルカ如キ其ノ徵候ハ之ヲ得ルニ最困難ナルコト多ク又地方ノ等級ヲ定メ之ニ

據リテ平均収獲額ヲ推測スルハ其ノ確然タル憑據ニ乏シク事實ニ適セサルコト屢之レアリ又縱令能ク此ノ徵候ヲ得ルトスルモ各類ノ納稅力ヲ相互ニ比較スルコトハ殆トナシ得ヘカラサルカ如シ且又此ノ法ニ尙一ノ缺點アリ即會社ノ大起業并ニ銀行、代理店、仲買商等ノ如キ一定ノ營業ヲ以テ全ク局外ニ置ク如キ傾向アルコト是ナリ斯ノ如キ會社等ノ營業ニ在リテハ全ク其ノ徵候ニ據ラス營業稅臺帳ヲ設備スルノ任アル官衙ニ與フルニ殊更公然知ルヲ得ヘキ財產ニ注目シテ其ノ收獲ヲ秤量スルノ權利ヲ以テシ是ニ由リテ此ノ法ヲ補綴修正スルヲ必要トス

營業稅ヲ改正スルニハ地稅ニ於ケルカ如ク營業稅臺帳ヲ以テ一類毎ニ一地方ヨリ徵收スヘキ稅額ヲ定メ其ノ一類毎ニ納稅者一統若ハ其ノ總代ニ委任スルニ各個納稅者ニ賦課スルコトヲ以テスルトキハ最

能ク其ノ目的ヲ達スルコトヲ得ヘシ

第七百七章

夫農者ニ對シテハ地稅ノ外尙農事ノ營業稅ヲ賦課スヘキヤ否ハ既ニ前ニモ一言シタルカ如ク常ニ世人ノ痛ク爭論セシ所ナリ抑此ノ問題ハ先ツ地稅ノ性質如何ヲ究メ而シテ其ノ地稅中ニハ既ニ農事ノ營業收獲ニ對スル稅額ノ包含スルヤ否ヲ知ルニアラサレハ之ヲ解答スヘカラサルモノニシテ固ヨリ絶對的ニ之ヲ論スヘキコトニアラサルナリ然レトモ其ノ小作者ニ於テハ別ニ納稅ノ義務ヲ負ハシメテ可ナリ蓋其ノ之ニ營業稅ヲ課スルト又農業ト他ノ營業トヲ比較スルノ難キカ故ニ之ニ代ユルニ多クノ國ニ於テ實行スルカ如ク所得稅若ハ勞銀稅ヲ課スルコトヲ以テスルハ敢テ問フ所ニアラサルナリ

鐵山稅モ亦等シク世人ノ爭論スル所ナリ此ノ種ノ稅ニ在リテハ各國

概テ確乎タル課税法ヲ設ケス古代ノ法律上ノ名義ニ基キ鑛山十分一
 税、借區税、監督税ノ名稱ヲ附シテ或ハ採鑛場ノ大小ニ據リ或ハ所
 得税ノ方法ニ據リ之ヲ課スルノ例ナリ蓋鑛山事業ハ一種固有ノ性質
 アルモノナルカ爲直チニ本來ナル營業税ヲ以テ之ニ適用スルコト難
 ケレハナリ

六 勞銀税

第一百八章

勞銀税トハ勞力ニ依リテ生スル人ノ收得ニ課シテ職工及官吏等ヨリ
 徵收スル税ナリ故ニ亦之ヲ稱シテ雇賃税、俸給税又ハ本來ノ所得税ト
 モ云フ

人ノ收得トハ機械、道具等ノ補助ヲ籍ラス單ニ勞力ノミニ依リテ生ス
 ル收得ヲ謂フ故ニ職工ノ雇賃、官吏ノ俸給、役員ノ給料及醫師、著述家、美

術家、代言人、公證人等ノ如キ所謂自由職業者ノ報酬ハ皆此ノ類ノ收得
 ナリ

右ノ説明ニ由リテ此ノ税ノ範圍モ亦其ノ大概ヲ知ルニ足テシ此ノ税
 ノ範圍ハ他種ノ收獲税ハ何邊マテ及フヤノ問題ニ關係スルモノナレ
 ハ固ヨリ之カ定限ヲ指示スヘカラス而シテ其ノ廣狹ハ專ラ此ノ税ヲ
 自由職業ニ課スルト否トニ依ル此ノ種ノ職業ニ課スヘキ税ハ種々ナ
 ル理由ノ在ルアリテ他ノ營業税ニ併セ之ヲ徵收スルヲ得策トス然レ
 トモ若其ノ併收ノ法ナキトキハ別ニ其ノ税ヲ課セサルヲ得サルコト
 勿論ナリ

此ノ税ヲ課スルノ道理アルコトハ他ノ收獲税ヲ正當ト認ムル以上ハ
 決シテ疑ヲ容ルヘカラス蓋此ノ税ハ租税ノ制ヲ公平ナラシムル爲ニ
 多少ノ効ヲ有スルモノナリ

夫右ノ如クナルニモ拘ハラス尙之ヲ是非スル者アリ其ノ官吏俸給及恩給ニ税ヲ課スルヲ非トシテ曰ハク俸給ノ如キハ其ノ任命書ニ約束シタル仕拂額ニ對シ不條理ニ之ヲ減少スルノ結果ヲ來スモノナリト然レトモ是實ニ皮相ノ論ノミ乃チ彼ノ利子札税ニ於ケルカ如ク今其ノ課税ト俸給ノ仕拂トハ全ク法律上其ノ名義ヲ異ニスルニアラスヤ論者尙或ハ曰ハン若強テ此ノ税ヲ要ストセハ則官吏ニハ最初ヨリ其ノ俸給中ヨリ税額ニ相當スル所ノ金額ヲ減少シタルモノヲ給スヘシ然ルトキハ則其ノ出納決算ノ勞ヲ除クヲ得ルノ利益アルニ如カスト然レトモ是決シテ爲スヘカラサルノ事タリ何トナレハ若斯ノ如クスルトキハ獨官吏ニ免税ノ特權ヲ與フルカ如キ外觀ヲ呈スルノ嫌アルノミナラス歳入出ノ關係ヲシテ尙幾分カ不明瞭ナラシムルノ恐アルヲ免レサルヲ以テナリ

夫ノ不同不確實ニシテ而カモ些少ノ所得タル雇賃ニ税ヲ課スルヲ非トスル者モ亦尠ナシトセス然レトモ其ノ職工等ノ收獲ト雖國家ノ需費ヲ分擔スルハ條理ノ然ラシムル所タルハ固ヨリ疑ヲ容レサル所ナリ勿論之ヲ分擔セシムルニ於テ其ノ額ノ些少ト其ノ所得ノ不確實ナルコトハ適宜ニ之ヲ斟酌セシムルハアルヘカラス是ヲ以テ此ノ雇賃税ハ他ノ收獲税ヨリモ輕カラシメ且一定ノ最下限ヲ設ケ其ノ以下ヲ以テ截然之レヲ免税ノ部分ニ入ルヘキナリ蓋此ノ税ヲ課スルニ就キテハ各其ノ國ニ於テ深ク消費税ノ賦課如何ニ反顧注意セサル可カラス若其ノ消費税ヲ以テ既ニ重モニ職工輩カ消費スル所ノ物品ニ課セラレ、コトアラハ尙此ニ加フルニ直接ノ雇賃税ヲ課スヘカラス否ラザレハ職工輩ヲシテ法外ニ其ノ負擔ヲ重カラシムルノ恐レアルヲ以テナリ苟モ此ノ事情ノアルコトヲ知り且其ノ雇賃ハ其ノ税率ノ低薄ニ

シテ加フルニ免除多キカ爲ニ其ノ額ノ大ナラサルコト及納期ヲ過ラ
 ス之ヲ仕拂ハシムルニハ其ノ納稅義務者ニ對シテ屢訴訟ヲ起スニ至
 ルノ弊アルコト又此ノ如キ多數細少ノ金額ヲ徵收スルニハ其ノ勞力
 費用ヲ要スル最多キコトヲ知ラハ其ノ公平及便宜ノ上ニ於テ特ニ雇
 賃稅ナルモノヲ設クルノ理ハ果シテ那邊ニアルヤノ問題ノ發生シタ
 ル所以ヲ察スヘキナリ

第百九章

凡此ノ稅ヲ評定スルニ際シテハ前ニ述ヘタル如ク納稅義務者ヲ三類
 ニ分ツコト常ナリ其ノ官吏ニ係ルモノハ其ノ所管廳ヨリ通知セシメ
 又ハ該廳ニ就キ調査ヲナシ以テ其ノ俸額ヲ確知スルヲ得ルカ故ニ極
 メテ容易ナリ私務ニ雇ハル、役員ニ至リテハ稍既ニ困難ナリ然レト
 モ當情ニ役員者ハ雇主ニ其ノ届出ノ義務ヲ負ハシメ且之ヲ監督スル

ノ方法ヲ設クルトキハ満足スルヲ得ヘキ結果ヲ致スヘシ唯法律中法
 律ノ意義ニ於テ役員トハ何者ヲ指スヤヲ明瞭ニ規定セサルヲ得サル
 ノミ而シテ之ヲ規定スルニハ一定ノ高サニ達スヘキ俸給ノ額及雇契
 約有効期限ノ稍長キモノヲ以テ之レカ原準トナスヲ常例トス
 職工雇賃及自由職業者ノ報酬ニ至リテハ其ノ評定最困難ナリ是ニ於
 テモ亦届出ノ義務ヲ負ハシメ以テ其ノ收獲ノ多寡ヲ調査シ得ルハ勿
 論ナレトモ其ノ届出果シテ正實ナルヤ否殆之ヲ検査監督スルニ由テ
 シ唯僅ニ嚴罰ヲ實行シテ其ノ詐僞ヲ防キ以テ幾分ノ目的ヲ達スルヲ
 得セシムルノミ

抑本人ノ届出額ハ遙カニ其ノ實額ニ及ハサルハ一般ニ人ノ是認スル
 ノ事實ナルカ故ニ營業稅ニ於ケルカ如ク一定ノ徵候ニ據リテ稅額ヲ
 評定スヘシトノ論ヲ唱ヘシ者アリシト雖復如何ナル徵候ヲ以テ之レ

カ原據トスヘキカ或ハ醫師、代言人、著述家等ノ仕事ノ多寡ヲ以テ其ノ徵候トナスヘシト云フ者アラシカ其ノ多寡ヲ確知スルノ道ナキヲ如何セン或ハ住宅ヲ以テ其ノ徵候ノ一ナリト云フ者アラシカ住宅ノ廣狹ハ家族ノ衆寡衛生ノ模様其ノ他職業外ノ所得等毫モ職業上ノ收穫ニ相伴ハサル事項ニ關スルコト極メテ多シ若住宅ニ據リテ此ノ稅ヲ評定シ以テ其ノ臺帳ヲ調製セントセハ右ノ諸項ハ皆參酌セサルヲ得ナルハ勿論交通ノ中心ニ對スル住宅ノ位地其ノ層數、華美及便利ノ程度等モ亦同シク其ノ參酌中ニ加ヘサル可カラズ斯ノ如キ繁雜不了ノ徵候ニ據リテ課稅スルノ法ニ比スレハ寧ロ届出ニ基キテ課稅スルノ法ヲ是トスヘキハ復爭疑ヲ須ヒサルナリ

納稅義務者自ラ總代ヲ選舉シテ各個ノ稅額ヲ自分ニ秤量セシムルノ法ヲ實施スル者アリテ現ニ之ヲ實行セシ國アリ其ノ効未タ驗著ナラスト雖概スルニ此ノ法ハ現ニ是レマテ實行セラレタル種々ナル法中ニ就テ最好果ヲ收ムルノ望アルモノニシテ夫ノ監督ヲナスニ至難ナル届出法ニ比スレハ尙一層ノ美果ヲ期スルヲ得ヘキハ言ヲ俟タサル所ナリ

第一百十章

夫此ノ稅ノ必要ト其ノ範圍トハ租稅制度一般ノ組織如何ニ關係スヘキハ尙此ニ再言セサルヲ得ス本篇普通ノ所得稅ヲ論スルノ條ニ示スカ如ク收穫稅ヲ地稅、家屋稅、金利稅及營業稅ノ四種トシ人ノ收得ハ皆之ヲ普通ノ所得稅トシテ課稅スルノ制モ亦之レナシトセス

七 收穫稅ノ得失

第一百十一章

苟モ收穫稅ノ得失ヲ論セント欲セハ先ツ此ノ稅ハ租稅ノ最緊要トス

ル所ノ原則ニ適當スルモノナルヤ又何等ノ程度マテ之ニ適當スルモノナルヤヲ講究セサルヘカラス而シテ此ノ税モ亦各其ノ國ニ行ハル、所ノ他ノ租税如何ニ注意シ以テ其ノ得失ヲ論スルニアラサレハ其ノ効力ナカルヘシ然レトモ此ノ收獲税タル之ヲ他種ノ税ニ比シ既ニ特異ノ缺点アリ之ニ反シテ却リテ其ノ長所モ亦之レアリ故ニ其ノ得失ハ別ニ茲ニ之ヲ細論スルヲ以テ適當トスルノミナラス復之ヲ別論スルノ理由アルモノナリ

吾人ハ茲ニ先ツ其ノ缺点ヲ摘示セン此ノ税ニ於テ缺点トスル所ノモノハ皆收獲税ノ爲故サラニ經濟ヲナス人ノ力ヲ顧ミス專ラ其ノ物ニ課税スルノ法ヲ實行スルニ至リシノ結果ナルカ如シ蓋是人カハ其ノ收獲ノ多寡ニ對シ大ヒナル關係ヲ有スルニモ拘ラス其ノ收獲ヲ生スル力ハ一ニ物ニ在リト云ヘル意ヲ以テ根據トセルニ出ツルモノナ

抑金利税ハ其ノ經濟ヲナス所ノ人ノ力ニ關スルコトナク又雇賃及俸給税ハ或ハ物税トナスモ或ハ人税トナスモ敢テ異ナル所ナキナリ故ニ此ノ二種ノ税ニ在リテハ其ノ思想ノ善チ及ホス未タ甚シキカ如クナラサレトモ他ノ地稅及營業稅ノ二種ニ在リテハ其ノ人力ノ收獲ニ對シ影響ヲ與フルコト極メテ大ヒナリ故ニ其ノ害モ亦最甚シカラサルヲ得ス夫毫モ人力ヲ顧ミサルトキハ收獲税ニ於テ通常實行スルカ如ク平均數又ハ一定ノ徵候ニ據リテ其ノ稅額ヲ評定スルノ外他道ナキモノニシテ斯ノ如クスルトキハ收獲中實際人力ノ効ニ歸スヘキ部分多キニ隨ヒ其ノ課税ハ益不公平トナルノ恐レ愈大ヒナルヘキナリ論者或ハ曰ハシ經濟ヲナス者ニ對シテハ何人ト雖其ノ具備スヘキ平均中等ノ勉強力ト能力トヲ基礎トスヘシ蓋此ノ如クスルトキハ則決シテ其ノ公平ヲ失スルノ恐ナカルヘシト今一步ヲ譲リ仮リニ論者ノ

言ノ如キ實アリトスルモ其ノ多クノ收穫殊ニ營業ノ收穫ハ其ノ多寡
 往々各人必ス具有スト云フヘカラス隨ヒテ之ヲ普通ノ性格ニ數フヘ
 カラナル特種ノ性質ニ關係アルコトナシトセス焉ツ其ノ公平ヲ失ス
 ルノ恐ナシトスルヲ得ンヤ
 其レ然リ然レトモ前末段所説ノ不公平ハ元來些少ナルニハアラスト
 雖其ノ收穫ヲ以テ辨價スヘキ負債ノ有無ヲ顧ミサルニ起因スル不公
 平ノ大ナルニ比スレハ尙以テ小ナリト云フヘシ抑物税ノ主義ヲ履行
 セハ毫モ負債ノ有無ヲ問ハサルヲ法トス故ニ其ノ農者家主、營業者ハ
 負債ノ有無ニ關セス通シテ皆同一ノ税ヲ課セラル、ノ結果ヲ來スモ
 ノナリ又負債主ニ就キテ金利税ヲ納メシムルハ素ト物税ノ主義ニ背
 離シ且他ノ納稅義務者ニ比シテ新ニ一層ノ不公平ヲ招クノ弊アリ故
 ニ立法者ハ負債主其ノ利子ヲ債主ニ仕拂フ時利子中該税額ヲ控除シ

テ償ヲ求ムルノ權利ヲ負債主ニ與ヘ以テ之ヲ保護スルノ道アリト云
 フ者アリ此ノ説果シテ行ハルレハ固ヨリ之ヲ勸奨スヘシト雖唯恐ル
 斯ノ如キ煩雜ノ法ヲ以テ企望ノ目的ヲ達スルコトハ固ヨリ容易ニア
 ラナルコトヲ

且夫收穫税臺帳ヲ調製スルノ容易ナラサルカ爲此ノ税ヲシテ技術交
 通及市價等ノ變動ニ相伴ハシムルヲ得ズ良シヤ多少之ニ相伴ハシム
 ルヲ得ルモ亦極メテ難事ナルヘシ是ヲ以テ臺帳登記ノ事項ト事實ト
 ノ差異ハ殊ニ不變ノ臺帳ニ在リテ其ノ調製ノ後歲月ヲ經ルニ隨ヒ益
 大ナルニ至ルコト常ナリ

第百十一章

前章述フル所ノ短所ハ收穫税其ノ物ノ自然ニ存スルモノト云フヘシ
 然ルニ各國現行ノ收穫税法ハ其ノ他ニ尙缺點ヲ存シ若ハ各種ノ税相

互ノ間ニ於テ税率ノ比例其ノ當ヲ失スルノ短所アルヲ免レス蓋前數
 章說述シタル収獲稅ハ最多クノ國ニ行ハル、モノニシテ其ノ法ハ可
 及的課稅公正ヲ要スルノ主意ヨリシテ總テノ収獲ノ泉源ヲ漏サス即
 國民經濟ノ収獲全般ニ課稅スルコトヲ務ムルモノナリ故ニ偶々免稅
 スルモノアルモ皆其ノ正當ノ理由アルヲ以テ其ノ多少公正ノ點ヲ得
 ルハ國ヨリ掩フヘカラサルノ事實ナリ然レトモ右ノ如ク熱心ニ其ノ
 公正ヲ求ムルニモ拘ハラヌ此ノ法ハ到底各納稅者相互ノ間ニ對シ決
 シテ正當ノ比例ヲ得セシムルコト能ハス是終ニ救フ可カラサル短所
 ナリ但其ノ理由ハ各種ノ稅ニ關シテ既ニ舉示シタル所アリト雖之ヲ
 要スルニ左ノ二項ニ外ナラサルナリ

(第七) 稅額評定ノ法殊ニ其ノ税率ヲ定ムルニ各種ノ収獲皆同一ノ步
 爲シ能ハサルカ如シ何トナレハ一ツノ稅ニ在リテハ土地ノ廣狹善惡

爲シ能ハサルカ如シ何トナレハ一ツノ稅ニ在リテハ土地ノ廣狹善惡
 ニ據リテ税率ヲ定ム他ノ稅ニ在リテハ利子額ニ據リ尙他ノ稅ニ在リ
 テハ得意先トスル地方ノ大小職工ノ多寡若ハ其ノ他ノ徵候ニ據リテ
 之ヲ定メサル可カラス而シテ此ノ土地ノ廣狹善惡ト云ヒ利子額ノ多
 寡ト云フカ如キハ到底皆同一ノ標準ヲ以テ之ヲ秤量シ得ヘキモノニ
 アラサレハナリ一種ノ納稅義務者相互間ニ於テ幸ニ正當ノ比例ヲナ
 スニ足ルカ如ク其ノ税率ヲ定ムルモ未タ之ヲ以テ各種ノ課稅果シテ
 平等ナルヤヲ比較スルノ標準トナスヘカラス且其ノ平等ヲ主トスル
 トキハ則資本ヲ具フル収獲ハ之ヲ具ヘサルモノニ比スレハ通常稍重
 稅ヲ課スヘキヤノ問題ヲ起スコトヲ得ス若之ヲ起シテ稍重稅ヲ課ス
 ヘシトスルトキハ更ニ不測ノ困難ヲ生セン

(第二) 課稅ノ不同ナル第二ノ原因ハ課稅物ヲ調査シ得ル程度ノ異ナ

ルニ在リ例ヘハ土地、家屋、官吏俸給ハ如何ナル事情アルモ決シテ課税ヲ免カル、ヲ得サレトモ金利及自由職業ノ報酬ハ之ヲ免カル、ヲ符ルコト極メテ易シ是一定ノ階級ニ居ル者ニシテ他ヨリモ重キ税ヲ課セラル、結果ヲ生スルノ理ナルニアラスヤ
 加之夫ノ生産費ヲ参酌スルト否ニヨリ生スル困難アルコトヲ顧念ヒハ此ノ課税ハ未タ以テ萬全ノ法ト爲スニ遠キハ何人モ之ヲ疑ハサルナラン

第一百二十三章

夫前述ノ短所ハ財政ノ上ニモ亦恐ルヘキ結果ヲ來スモノニシテ殊ニ歳出豫算額ノ年々増加スルノ今日ニ在リテハ輕々之ヲ觀過スヘカフス何ヲカ其ノ恐ルヘキ結果ト謂フヤ曰ハク収獲税ヲ加ヘテ歳入ヲ増シ以テ其ノ増加スル所ノ歳出ニ應セシムヘカラサルコト是ナリ蓋課

税物ノ數ヲ増加スルハ極メテ遲々ナルコト其ノ常ナリ故ニ租税ノ收入ヲ増加セントスルニハ各種ノ税率ヲ増大スルノ外復他ニ其ノ策ノ施スヘキモノナシ然ルニ之ヲ増大スルニ隨ヒ業ニ既ニ不完全ナル税ヲシテ益、不完全ナラシムルノ弊アルハ敢テ喋々ヲ要セス現ニ國税ノ外ニ自治團體カ常通徴収スル所ノ歩合税即之ニ因リテ生シタル収獲税ノ増加ハ世人ヲシテ現行法ノ不公平ナルニ注目セシムルノ主因タリシモノナリ

第一百十四章

此ノ短所ニ對シ反リテ特ニ収獲税ノ長所トスヘキモノアリ今其ノ土要ナルモノヲ擧クレハ左ノ二種トス

(第一) 収獲税ハ物税ナルニ依リ所得税ニ於テハ容易ニ脱税スルノ恐レアル數種ノ収獲ニ課税スルヲ得即外國人ノ爲内國ヨリ吸收セラル

、所ノ収獲ハ殊ニ此ノ類ナリ

(第二) 収獲税ハ國家ノ爲如何ナル事情アルモ稍確實ニシテ移動少ク且偶然ノ出來事ニ關係ナキ収入ヲ與ヘ縱令年々増加スル所ノ財政上ノ需要ニ適スルコト容易ナラサルモ其ノ一部分ハ殆萬全ノ確實ヲ以テ之ヲ満足セシムルモノナリ

第百十五章

右二個ノ長所ハ既ニ現行シ來リタル[○]收獲税[○]ヲ維持スヘキ理由トナハニ餘リアリ収獲税殊ニ地稅及家屋稅ハ一種ノ現物稅ニ類スルコトナカラサルニ至リシモノニシ土地家屋ヲ買ハントスル者ハ先ツ其ノ稅ニ注目スルコト常ナルノ點ヨリ論スルモ之ヲ廢スルノ說ヲ贊成ヘカラス若之ヲ廢センカ當ニ一回ノ納稅額ノミナラス其ノ資本ニ見據ルアル稅額ノ金ヲ目下ノ所有者ニ贈與スルノ實ヲ顯ハスヘキ結果

ヲ生センコト既ニ前ニモ說述セルカ如シ

然レトモ其ノ短所ニ就キテ之ヲ考察スルトキハ則將來ノ要件二種アルヲ知ルヘシ第一ニ現行收獲税ノ率ハ其ノ最初ノ率ニ比シテ餘リ増加スヘカ[○]ラサルコト第二ニ收獲税ハ人力ヲ毫モ斟酌セサルカ故ニ可及的人力ヲ斟酌シテ課稅スヘキ所得ニ合算シ以テ其ノ稅ヲ課スルトヲ務ムルコト是ナリ

而シテ此ノ目的ヲ達スルニ二法アリ一ハ各收獲税ニ於テ人力ノ如何ヲ斟酌シ之ヲ變シテ特種ノ所得稅トナスノ法トシ一ハ收獲税ヲ其ノ儘ニ存置シ別ニ所得稅ヲ設クルノ法トス但其ノ所得稅ハ財產稅ト合併スルモ亦可ナリ

第一法ハ收稅ノ實地ニ於テ之ヲ行フコト難シ蓋納稅義務者ノ負債、有無ニ關スル事項ヲ察セハ則此ノ一事ノミニシテ既ニ其ノ餘ニ難

キヲ知ルヘシ況ヤ總體ノ稅ヲ數種ノ特立ナル部分ニ區分スルハ常ニ
不公平ノ原因タラサルハナシトノ點ヨリスルモ亦之ヲ勸奨スヘカラ
ス

第二法ハ既ニ之ヲ實行シ往々其ノ効ヲ奏セシモノニシテ收穫稅ノ苛
酷ナルヲ寬宥ニシ財政ノ要件ヲ完クシ且本來ナル所得稅ニ移ルノ階
梯トナスニ適スルカ如シ其ノ詳細ハ第節款ニ至リテ之ヲ論セン

第二節 財産移轉稅

一 定義及類別

第一百十六章

財産移轉稅ハ法律上權利義務ノ交通及經濟上ノ交通ニ於テ其ノ原主
トナルヘキ一定ノ財産、財産ノ一部、財産ノ價值及財産上ノ權利ニ課
ル稅ナリ

其ノ稅源ノ一部ハ財産ノ交換ニ由リテ生シタル收入及利潤トシ他ノ
一部ハ相互ニ財産ノ交通ヲナス者ノ所有スル其ノ他ノ財産トス
其ノ課稅物ハ移轉ヲナス財産若ハ移轉ヲナス證書トシ其ノ稅納主ハ
財産受領人タルコト最多シトスレトモ往々又財産所有者又ハ其ノ移
轉ニ於テ利益アル者ナルコトアリ此ノ稅ハ物稅ニシテ納稅義務者、
人方如何ヲ斟酌スルコトナシ

本來ナル財産稅ト此ノ財産交通稅ト相異ナル所以ハ彼ハ一人ノ手
離止スル財産ノ全部若ハ一部ニ課稅シ此ハ一人ノ手ヨリ他人ノ手ニ
移轉スル財産ニノミ課稅スルニ在リ

財産移轉稅ハ其ノ外觀ニ於テ大ニ手数料殊ニ司法手数料ニ類スル所
アリ蓋此ノ稅ハ一ハ法律上權利義務ノ移轉ニ係ル行爲アルト同時ニ
之ヲ徵收シ一ハ手数料ニ於テ用ユル印紙ニ據リテ之ヲ徵收スルヲ以

ヲナリ然レトモ其ノ實手数料ト大ニ異ナルセノアリ其ノ條項左ノ如シ

第一 原主ハ手数料ニ於テハ官廳ノ行爲ニシテ此ノ税ニ於テハ移轉ニ屬スル財産ナリ

第二 財政上ノ目的ハ手数料ニ於テハ國家ノ爲ニ生シタル費用ヲ償フニ在リ此ノ税ニ於テハ本來ノ收入ヲ得ントスルニ在リ

第三 納額ハ手数料ニ於テハ現ニ生シタル費用ノ多寡ヲ標準トシ此ノ税ニ於テハ財産ノ價值ヲ標準トス

夫彼此ノ別タル理論上ニ於テ明瞭ナルコト斯ノ如ク實際ニ於テモ亦多分ハ其ノ差別明カナリト雖其ノ何レニ屬スルヤ之ヲ識別スルコト難キモノモ間マ之レナシトセス

財産移轉税ハ通常其ノ負擔者ニ於テ之ヲ納ムルカ故ニ概テ直税ニ屬

シ其ノ徵收ハ收税廳又ハ財産ノ移轉ヲ助成シタル官廳ニ於テ之ヲ直接ニ或ハ納税義務者ヲシテ種々ナル印紙ヲ使用セシメテ之ヲ間接ニス其ノ詳細ノ如キニ至テハ手数料ニ關シ詳論セシ所ニ準スルヲ以テ足レリトス

抑此ノ税ヲ徵收スルノ法ヲ制定スルニ至ラシメタル理由ハ重モニ則政上ニ起レリ故ニ次序整然之ヲ類別スルコト極メテ難シ其ノ多シハ別ニ順序ヲ定メス唯多額ノ收入ヲ生スルノ望ミアリ且租税ニ關スル他ノ主義ニ矛盾スルノ甚シカラサルモノヲ擇ヒテ此ノ税ヲ課シタルモノ、如シ今之ヲ詳論セントスルニ當リ其ノ便ヲ計リ之ヲ左ノ三種ニ大別ス

第一 生存者相互間ノ財産移轉税就中其ノ著シキモノ三種アリ

甲 不動産移轉税

乙 動産移轉税

丙 契約税

第二 死亡ノ爲ニスル財産移轉税

第三 移轉不能財産ノ税

以下先ツ此ノ三種ノ税ヲ詳論シテ而シテ後其ノ得失ヲ論セントス

一 生存者相互間ノ財産移轉税

第一百十七章

第一 不動産移轉税(所有者更迭税トモ云フ)

此ノ税ハ所有權又ハ此ノ權利ト同一ニ看做スヘキ權利ニ變更アル毎ニ徵收ス故ニ賣買及交易ノ時并ニ公用徵收及裁判宣告ニ基キタル權利ニ據リ又ハ結婚契約生存者間ノ相続契約及其ノ贈與等ニ據リ變更アル時ニ之ヲ徵收スヘキモノナリ

始テ此ノ税ヲ設ケタルハ今ヲ去ルコト遠シテ其ノ額ハ大概價值ノ歩合ヲ以テ之ヲ評定シ收税廳又ハ之ヲ徵收スルノ任アル官廳ニ於テ直接ニ之ヲ徵收ス

抑從來此ノ税ノ是非得失ヲ論スルヤ各其ノ説ヲ異ニシテ一定スル所ナカリシカ今日ニ至リ漸ク其ノ歸着ヲ得タルモノ、如シ

其ノ之ヲ非トスル者ハ曰ハク第一此ノ税ハ不動産及其ノ中ニ於テ、殊ニ都市ニ在ルモノ、ミノ負擔ニ屬シ收税ノ爲業ニ既ニ成スル所ノ苛酷ヲシテ一層甚カラシムルモノナリ第二ニ斯ル所有權ノ變更ハ旺盛ヨリモ寧ロ衰頹ノ徵候トナスニ近キモノナリ第三ニ此ノ税ハ、モ其ノ收獲ノ多寡及所得者ノ一身ニ關スル事項殊ニ其ノ負債ノ有無ヲ問ハス單ニ其ノ賣買價值ニ課スルモノナリ第四ニ經濟上ノ有力者ハ納税義務ヲ其ノ無力者ニ移轉スルノ恐レアリ故ニ此ノ税ハ公正ニ

アラサルナリト

其ノ之ヲ是トスル者ハ曰ハク財政上ノ需用年ヲ追ヒテ増加シ已ムノ
 シシテ新タニ税源ヲ求メサルヲ得ス蓋不動産ニノミ偏シテ稍重税ヲ
 課スルノ實アルモ素ト其ノ價值及收穫ヲシテ近來遽カニ増殖セシメ
 タルノ實アル大概所有者ノ自力ニ依リシモノニアラスシテ一ニ時機
 ノ僥倖ニ依リテ然ルモノナリ而シテ彼ノ收穫税ニ於テハ其ノ増殖一
 伴ヒテ進ムヲ得ス故ニ之ヲ不條理ト云フヘカラス又所有權ノ變更ハ
 旺盛ヨリモ寧ロ衰頽ノ徵候トナスヘシトハ固ヨリ爭フヘカラサルノ
 事實ナリ然レトモ之カ爲ニ此ノ税ヲ廢スルノ謂ハレナシ唯之ヲ所得
 者ニ課シテ放遺者ニ課セサルヲ要スルノミ但此ノ税ハ固ヨリ餘リ重
 カラサルヲ要ス否ラサレハ實際反對者カ恐ル、カ如キ弊ヲ生スヘキ
 事以テナリ且此ノ税額ハ其ノ原主トナス所ノ價值ヲ以テ標準トナス

ヘシ面シテ最近ノ親屬間殊ニ尊族ヨリ卑族ニ所有權ヲ移ストキハ總
 ノ額ヲ輕カラシムヘシ其ノ他動産ノ移轉ニモ亦適宜ニ課税スヘシト

第百十八章

第二 動産移轉税

此ノ種ノ税ニシテ實際ニ行ハル、モノ八種アリ

(一)受領證及勘定書税(受領印紙)(二)取引證書荷物運送積荷證書倉庫頂
 リ證書等ノ税(三)爲替税(爲替印紙)(四)結約票税(所謂相場會所税)(五)賣買
 契約供給契約競買ノ税(六)株券持部證書及内外國公債券ノ税(七)保險契
 約ノ税(八)富講掛金及當籤ノ税即是ナリ但以上列舉スルモノヲ以テ其
 ナノ動産移轉税ヲ網羅スルモノトスヘカラス唯其ノ要ヲ摘ミ之ヲ掲
 ケタルニキサルノミ

抑此ノ諸税ハ單ニ財政上ノ理由及不動産ト同シク動産ノ移轉ニモ亦

税ヲ課セントスルノ主意ヨリ之ヲ論スルニアラサレハ之ヲ至當ト認ムヘカラサルモノ最其ノ多キニ居レリ其ノ取引狀荷物送狀等ノ税買契約及供給契約ノ税并ニ勘定書及受領證ノ税ニ在リテ殊ニ然リトス而シテ其ノ中ニ於テ之ヲ課スルノ是非ニ關シ尙疑義ヲ免レサルモノナシトセス例ヘハ受領證ノ税ノ如キ是ナリ此ノ税ハ公購ニ向ヒノ物品又ハ勞力ノ供給ニ關スル受領證ノ如キ容易ニ脱税スヘカラサルモノニ之ヲ課センカ則其ノ税額ヲ其ノ代價ニ加ヘ以テ其ノ國庫ノ負擔ニ歸スルコアラサレハ却リテ一定ノ供給者ノミニ偏シテ課税スルノ弊アリ然ラハ則總テノ受領證ニ向ヒテ之ヲ課センカ其ノ監督ヲ實行スルコト極メテ難ク且納税ヲ避クルカ爲ニ成規ノ様式手續ヲ用ヒスシテ權利義務上紛亂ヲ來スノ種子トナリ加之最現金取引ノ法ノミヲ是好ムノ弊ヲ發生スルニ至ラン

爲替税ハ其ノ率ヲ低クスルトキハ負擔ニ苦ム程ノモノトナラス而シテ此ノ税ハ取引ニ熟練シ多クハ特ニ納税力ニ富メル階級ヨリ之ヲ徵收シ且爲替交通上ニ得タル利潤ヲ以テ其ノ幾分ヲ償フヲ得ヘシトハ此ノ税ヲ稱揚スル者ノ言フ所ナリ
此ノ移轉税中結約票税(相場會所税)并ニ富講掛金及當籤税ハ其ノ之ヲ徵收スルノ道理ヲ求ムルニ最易シトス
相場會所税ハ爲替流通券外國銀行紙幣等各種ノ賣買及供給取引ノ結約又ハ其ノ延期結約ニ關スル結約票ニ課スルモノニシテ概テ大商業ニ屬スル特種ノ取引ヲ課税物トシ以テ其ノ能力ニ正當ノ比例ヲナス所ノ收獲税ヲ課スルニ難キ階級殊ニ資本家及銀行主ニノミ負擔セシムルカ故ニ其ノ道理ヲ求ムルコト固ヨリ易シ又流通券ヲ以テ投機ヲ計ル者ニ對シテハ總テノ他ノ税種ヲ免カル、ヲ常トスル相場會所ノ

利潤ニ課税シ恰モ富講掛金ニ課スル所ノ税ト同一ノ性質ヲ有ス故ニ亦之ヲ課スルヲ非理トセザルナリ

此ノ税モ亦公平ニシテ事實ニ適スルヲ要スルコト勿論ナレハ印税額ヲ固定セス原主物價値ノ歩合ヲ以テ之ヲ徵收シ且其ノ歩合餘リ大ナラサルヲ必要トス若此ノ印税額ヲ固定スルトキハ其ノ稍大ニシテ納税ノ餘裕アル取引ヲ利スルコト疑ヒナシ故ニ取引價値ノ歩合ニ準シテ課税スルニ限ルヘシ否幾分ノ累進比例ヲ以テスルモ其ノ目的ニ背馳スルコトナカルヘキナリ又其ノ歩合ノ餘リニ大ヒナラサルヲ必妥トス若其ノ大ニ失スルトキハ内國相場會所ノ取引ハ次第ニ去リテ外國ニ轉スルノ恐レアルニ由ルナリ斯クノ如クスルモ尙未タ全ク百散ノ弊ヲ除キ得ヘキニアラサルハ勿論ニシテ例ヘハ流通券ヲ以テ成ル所ノ總テノ財産ニ悉皆且平等ニ課税シ得ヘカラス且納税移轉ノ弊

亦稀ナラス加之必需ノ監督法ヲ施セハ取引ノ便ヲ妨グル如キハ總テ疑フヘカラサル所ナリ

相場會所ニテ取引ヲナス各個ノ場合ニ於テ税ヲ課シ以テ相場會所並合税ヲ徵收スルハ頗ル煩雜ニシテ容易ナラサルカ故ニ此ノ税ヲ課スルニハ課税固定額ノ法ヲ用ヒ法律上各相場會所ノ爲其ノ年々ノ取引高ニ準シ各別ニ一ケ年ノ總括税額ヲ固定シ相場會所長若ハ特ニ事情ニ通シタル委員ヲシテ之ヲ取引者ニ賦課セシムヘシトノ考案ヲ發議シタル者アリ

富講掛金税及當籤税ノ内甲ハ財産移轉税ヨリモ寧ロ消費税ニ近シトシ以テ消費税トスルトキハ他種ノ消費税ニ比シ之ニ課税スルノ理由一層明瞭ナリ何トナレハ掛金ハ所得ノ内餘裕ニ屬スルコト毫モ疑フヘカラサレハナリ乙ハ之ニ反シテ其ノ課税ノ點ヨリ論スルトキハ贈

與又ハ非親族者若ハ遠キ親族者間ノ財産相續ト見做スヘシ故ニ相續
税ニ關シ論述スル所ニ從フテ可ナリ何トナレハ其ノ性質贈與又ハ財
産相續ニ異ナルコトナケレハナリ

第一百十九章

契約税ハ動産ニ關スル用益權及使用權ノ設定契約ニ課スルモノナリ
土地ノ貸借契約ニハ之ヲ課スルヲ不可トス何トナレハ土地ニハ既ニ
地稅及移轉税ノアルアリ尙之レニ契約税ヲ課スルトキハ納税者ノ負
擔ヲ過大ナラシメ其ノ率少ク高ケレハ忽土地用益權貸借及小農區經
濟ヲ妨害スヘキヲ以テナリ是ヲ以テ單ニ財政上ノ理由ヨリスルコ
トナレハ之カ至當ナルコトヲ証スルヲ得サルナリ

三 死亡ノ爲ニスル財産移轉税即相續税

第一百二十章

死亡ノ爲ニスル財産移轉税ハ死亡者ヨリ他人ノ手ニ移轉スル財産ニ
課スル税ニシテ通常之ヲ相續税ト云フ其ノ税源及課税物ハ遺産ニシ
テ其ノ納税主ハ一人若ハ數人ノ相續人ナリ
相續税ハ移轉ニ属スル財産ニ課スルノ點ヨリスレハ財産移轉税ナリ
ト雖遺產者ノ全財産ニ之ヲ課スルノ點ヨリスレハ普通ノ財産税ナリ
ニ似タリ

第一百二十一章

此ノ税モ亦其ノ得失ニ關シ大ニ世人ノ爭論セシ所ナリ其ノ之ヲ非
スル論者ハ左ノ二種ノ理由ヲ擧ケテ論據トナセリ
(第一) 凡相續税ハ實際ニ於テ頗ル重キヲ常トスルカ故ニ相續人ノ丁
ニ入ルヘキ財産ヲ減殺スルコト甚著シ而シテ彼ノ收獲税及所得税
在リテハ納税主其ノ自己常時ノ所得ヲ以テ不斷其ノ製産ノ法ヲ改良

シ以テ税額ヲ償フニ足ルヘキ利潤ヲ増サントスルノ奮勵心ヲ起サシムルノ基因トナリ得ヘシト雖此ノ相続税ニ在リテハ素ト是其ノ相続人タル自己ノ勞力ヨリ財產ヲ得タルニアラサルカ故ニ其ノ相続ヲ得タルノ利ニ安ンシ此ノ上更ニ其ノ收得ヲ増シ以テ納税ノ爲ニ減少セラレタル額ヲ再得ントスルカ如キ熱心ヲ刺激喚起スルコトナシ是ヲ以テ此ノ税ハ國民ノ經濟ニ於テ不利ナル結果アリトス

(第二) 相続税ハ必スシモ常ニ產財ノ増加ニ課スルモノニアラス例ヘハ未タ特ニ獨行ノ力ナキ孤獨ヲ以テ相続人トナス時ニ於テ既ニ之ヲ課スルカ故ニ即經濟上生存ノ基礎トナルヘキ財產ニ課スルコト間マ之レアリト云フヘシ蓋斯ル場合ニ於テハ相続人ハ死者存命ノ時ニ於テ既ニ其ノ相続スヘキ財產ヲ用益シ居タルモノニシテ今之ヲ相続スレハトテ相続人ハ其ノ從前ニ比シテ富番コナルヨアララス否相続人ハ

チ相続セシニモ拘ラス從前ニ比シテ貧窮ノ位地ニ下ルコト甚多シ何トナレハ死者カ其ノ經濟上ノ働キニ據リテ財產ノ外ニ尙所得アリトシシモ死去ト同時ニ其ノ所得消滅ニ屬スルコト間マ之レアレハナリ此ノ論據ニ對シ相続税ヲ是トスル論者ハ左ノ理由ヲ舉示ス

(第一) 相続人ハ納税ノ爲ニ減殺ニ屬シタル財產ノ一部分ヲ再填充スルヤ否ハ各國民及各個人ノ精神上及道德上ノ性質如何ニ大關係ヲ有スルヲ以テ之ヲ一般ニ斷言シ難シ勿論一タヒ相続税ヲ納メ復之ヲ納ムルニ至ルマテハ隨分長キ期限ニ涉ルコト常ナレハ此ノ間ニ於テ相続人ハ納税ノ爲ニ吸収セラレタル財產ノ一部分ヲ填充シ得ルノ道ノキニアラサルナリ而シテ相続税ハ所得ニ税ヲ課スルヨアラスシテ財產ニ之ヲ課スルカ故ニ租税ノ經濟上ノ主義ニ悖反スルコトハ自ラ前段ノ論據中ニ含蓄スル所ナリト雖是未タ以テ鞏固ノ論トナスニ足ラ

ス何トナレハ相続人タル納税主ニ取リテハ其ノ相続スル所ノ遺産ノ
權利ニ屬スル財産ニシテ取リモ直サス是所得ナリ故ニ納税ノ後ニ於
テ其ノ財産ヲ増加スルノ結果アルハ固ヨリ疑ナシ

(第二) 第二ノ論據ハ相続ヲナス場合ニハ一家族ニ於テ從來用益セ
ル財産ヲ續キテ用益スルコトハ極メテ稀ニシテ他ノ親族ノ爲ニ僥倖
因リテ得タル利潤ニ類シ其ノ財産ヲ増加スルノ結果アルコト却リテ
多キヲ以テ之ヲ辯駁スヘシ若夫一家族中ノ者相続ヲナス場合ノ如キ
ハ些少ノ財産ヲ免税セ或ハ死者ノ子孫ニ傳フル財産ノ税率ヲ低ク
以テ之ヲ斟酌スルヲ得ヘキナリ

第二百二十二章

前條相續税ノ得失論ハ其ノ何レヲ是トスルモ各人ノ擇フ所ニ任ス
シト雖其ノ相續税ヲ是トスルノ論ハ尙其ノ他論據ニ乏シカラス故ニ

管ニ之ヲ徵收スルノ道理アリト云フノミナラス之ヲ最良ナル税ノ
種トナスハ動スヘカラサルノコトトス

此ノ税ハ課税ノ實地ニ於テ頗ル利便アリ即其ノ課税物ヲ確カニ捕獲
スルヲ得ヘクシテ且其ノ税額ヲ秤量シ之ヲ徵收スルニ容易ナルコト
等是ナリ而シテ此ノ税ハ納税義務者資金ヲ有スル時ヲ以テ之ヲ徵收
シ且自力ヲ以テセシニアラサル財産ノ増加ニ課スル税ナルカ故ニ其
ノ負擔ヲ感スルコト概テ少ナシトス然リト雖是僅カニ一小利便ノミ
其ノ他ノ利便ニ至リテハ猶是ヨリ大ヒナルモノアリ夫納税移轉ノ恐
レナキ所ノ租税ハ實ニ僅々タルモノニシテ此ノ相續税ノ如キ則其ノ
一ナリ又相續人ハ既ニ遺産分配ヲ目的トスルカ爲ニ死者ノ財産ノ全
部ヲ調査シテ之ヲ書面ニ認メ且官廳ノ幫助ヲ受ケサルヲ得サルモノ
ナレハ此ノ税ノ爲取テ其ノ取調等ノ煩ヲ覺ユルコトナシ尙其ノ利便

ノ最大ナルハ財産ノ全部ヲ捕獲シテ毫モ遺漏ナキヲ得ルニ在リ例
ハ各種ノ驕奢ニ屬スル動産ニシテ容易ク他ノ税ヲ脱カル、ヲ得ル
ノ、如キ死者生存中實際之ヲ脱カレ居タルモ悉ク之ヲ網羅スルヲ得
ハキナリ

又多シノ動不動産ハ代々賣却スルコトナクシテ相續スルコト稀ナリ
ナルノ點ヨリ之ヲ考フルトキハ相續税ハ復其ノ他ノ財産移轉税ヲ補
足スルニ欲クヘカラサルモノニシテ國民ノ富ヲ増スト同一ノ比例
以テ其ノ收穫ヲ加ヘサルヲ得サルモ亦之ニ關係スル利益ノ一タリ
相續税ノ理由ヲ鞏固ナラシメンカ爲尙他ニ二個ノ論ヲ提起スルモ
アリ即國家ハ云ハ、相續權ヲ創始シ之ヲ保證スルモノナリ故ニ國家
ハ其ノ目的ヲ達スルニ遺産ノ一部分ヲ要求スルノ權利ヲ有スヘシ
云ヒ以テ國家カ相續税ヲ徵收スル權利アルノ理由ヲ説カンコトヲ試

ミタルコト其ノ一ナリ相續税ノ要ハ財政上ノ財源トナスノ目的ヨリ
モ尊ロ其ノ社會政策上ノ性質ニアルコトヲ説カント試ミタルコト其
ノ二ナリ然レトモ相續税ノ理由ハ前段説述セル租税ニ關スル要義一
徴シテ既ニ足レリトス焉ツ斯ル脆弱ノ論ヲ提起シ以テ其ノ理由ヲ味
々スルヲ要センヤ

第二百二十三章

相續税ノ利便ナル各國之ヲ税法ニ加フルニ至レリ然レトモ税額評定
法ノ要点ニ至リテハ各國大ヒニ其ノ趣ヲ異ニセリ乃其ノ評定ニ關シ
テハ重モニ左ノ諸項ニ注目セサルヘカラス

(第一) 相續税ハ所有權ヲ以テ移轉スルト用益權ヲ以テスルトニ論ノ
ク且動産不動産又ハ收益財産使用財産ノ別ナク總テノ財産ニ之ヲ味
シ又遺言書ニ依レル相續ト法律上ノ相續トノ差別ヲナスヘカラス

シテ相續税ハ實際相續人ノ所有ニ歸シタル金額コノミ之ヲ課スヘキモノナレハ遺産ト共ニ引受ケタル負債義務アレハ之ヲ控除スヘキ言ヲ俟タサルナリ

(第二) 總テノ相續人ハ納税ノ義務ヲ負ハシムヘシ而シテ最近卑族全ク之ヲ免スヘキ充分ノ理由之レナシト雖前キニ説述シタル所ノ理由ニヨリ其ノ最近ノ卑族及死者ノ配偶者ハ最税ヲ輕クシ以テ親族ノ關係相隔タルニ隨ヒ次第ニ其ノ重キヲ加ヘ其ノ親族ニアラサル者相續人トナリタルニ至リテハ最重税ヲ徵スルノ法トナスヲ至當トス若夫些少ノ遺産ハ全ク其ノ税ヲ免シ慈惠院等ニ寄付スルモノ、如キハ適宜ニ之ヲ斟酌シテ可ナリ

(第三) 親族ノ遠近ニヨリテ税率ヲ累進スルノ外同等ノ親族中ニテ更ニ遺産ノ大小ニヨリテ累進ノ率ヲ定ムルヲ良トス蓋許多ノ遺産ヲ相

續スル者ノ納税力ハ固ヨリ些少ノ金額ヲ受クル者ノ比ニアラサルハ明カナレハナリ

(第四) 相續税ハ他ノ税ニ比シテ稍重クスルヲ得ルコト普通ナリ唯遺言ノ自由ヲ妨ケサルヲ期スルノミ其ノ普通ノ定限ハ何レニアルヤ固ヨリ之ヲ指定シ得ヘキニアラス

(第五) 各個ノ場合ニ於テ此ノ税額ヲ評定スルニ際シ前キニ相續アリテヨリ再其ノ相續アルニ至ルマテニ經過シタル時間ノ長短ヲ斟酌シ以テ偶マ前キニ相續ヲナシテヨリ未タ幾ナラスシテ復之ヲナスコトアルモ納税ノ爲其ノ財産ヲ餘リニ減少スルコトナカクシムヘシトハ屢々世人ノ唱道スル所ニシテ大ヒニ其ノ理アルヲ見ル然レトモ常ニ一家族内ニ於テ一財産ヲ相續スル時ニアラサレハ斯ル斟酌ヲナスコトヲ望ムヘカラサルナリ

第二百二十四章

前キニモ一言シタルカ如ク贈與物税ハ相続税ト密接ノ關係ヲ有ス足
 ヲ以テ贈與物ニ對シテモ亦課税スルニアラサレハ或ハ贈與支度土産
 等ノ名ヲ籍リ以テ殊ニ相続税ヲ脱カル、コト極メテ易シ且之ニ依リ
 テ從來ノ通税ヲ隱蔽スルヲ得ヘク遂ニ相続税ノ法ヲシテ徒法ニ屬ト
 シタルコトアルヘキハ灼然トシテ亦疑ヒアラサルナリ是ノ故ニ贈與
 物税ハ亦相続税ト同シク之ヲ評定スルコトヲ勸奨ス

四 移轉不能財產ノ税

第二百二十五章

移轉不能財產ノ税ハ自由ニ賣買讓與等ヲナスヘカラサル財產ニ課ヘ
 ル所ノ税ニシテ即財產移轉税法ノ不足ヲ補フヲ目的トスルモノナリ
 法人、公共團體、商社、保險會社、組合、協會等ノ如ク已レノ財產ヲ代々保持

スルヲ規定トセル法律上ノ財產所有主ニシカラサルハ普ク人ノ知
 ル所ナリ其ノ賣買讓與等ノ如キ移轉ヲ自由ニスヘカラサル財產ヲ稱
 シテ之ヲ死財ト云フ

斯ノ如キ財產ニ就キテ徵スル移轉不能財產ノ税ハ財產移轉税ノ補足
 ト看做スヘキ點ニアリ一ハ生存者相互間ノ財產移轉税ニ關スル補足
 トシ一ハ相続税ノ賠償トス

移轉不能財產ノ税ハ通常不動産ノミニ之ヲ負ハシメ其ノ財產ニ生
 ル收穫ニ課スル年税トナシ實際ハ地稅ノ歩割増ヲ以テ之ヲ徵求シ或
 ハ財產ノ價值ニ據リテ評定シタル税トナシ稍其ノ期限ヲ長クシ規則
 正シク徵求ス其ノ難事トスル所ハ年歩合増ノ率又ハ徵求ノ期限ヲ適
 實ニ定メ而シテ此ノ税ヲシテ自由ニ移轉スルヲ得ヘキ財產ノ税ニ對
 シ正當ノ比例ヲナサシムルコト是ナリ蓋普通ハ前項第二ノ方法ヲ優

レリトス何トナレハ財産移轉税ノ特性ハ此ノ方法ニ於テ稍明ニ顯ハルレハナリ又財産移轉税ニ於テハ動不動産ノ別ナク納税ノ義務アルニ拘ラス及移轉不能財産税ニ於テハ實際之ヲ動産ニ課セサルハ如何ナル道理ニ出ツルカ殆ト之ヲ解スヘカラス

五 財産移轉税ノ得失

第二百二十六章

財産移轉税ノ得失ヲ論セントセハ宜シク先ツ相續税ヲ除クヘシ何トナレハ相續税ハ既ニ前ニモ略言シタルカ如ク之ヲ徵スルニ充分ノ理由アリ且普通ニシテ公正ナリ故ニ其ノ評定ノ分度宜シキヲ得ハ則經濟上ニ妨害アルコトナクシテ財政ニハ尙收入ヲ生スルコト尠カラス而シテ其ノ他實際ニ於テ別ニ困難アルコトナケレハナリ又相續税ハ實ニ財産移轉税ノ補足成分タルノミナラス尙一種特立ノ

税トシテ論スルヲ得ヘキモノナルカ故ニ學術上財産移轉ノ税ニ關ルルノ論ハ皆相續税ニ及ハサルコト常ナリ

第二百二十七章

世論ハ概テ財産移轉税ヲ非トスルモノ、如シ否學術上ヨリ此ノ税ノ徵収ハ失策ノ大ナルモノナリト論定セシモノ尠カラス是認見ト云ハサルヘカラス

抑斯ル認見ハ元是レ財産移轉税モ亦彼ノ収獲税ニ於ケルカ如ク各種ヲ統一シテ之ヲ觀察シ其ノ得失ヲ論セサルヲ得スト妄信シタルニ起原スルカ如シ然レトモ此ノ税ノ歴史上ノ發達及實際ニ於テ多ク人ノ唱道セシ理由ヨリ之ヲ考フルトキハ則其ノ各種統一ノ論究ハ事實ニ適セサルニ似タリ蓋財産移轉税ハ収獲税又ハ消費税ノ如ク次序整然タル統一法ノ下ニ從ハシムヘカラスシテ各種各別ニ之ヲ觀察シ而シ

ヲ多クハ他ノ稅殊ニ收獲稅ノ補足ト看做シ其ノ缺典ヲ補填スルヲ目的トスルモノナリト云ハサルヲ得ス

抑此ノ說ハ最近代ニ及ヒテ人ノ唱道スル所トナリシモノニシテ要アルニ財產移轉稅ハ概テ公平ノ主義ニ根抵スルコトアラシテ國家自營ノ必要ニ起原セルモノト謂ハサル可カラズ是ヲ以テ之ヲ觀レハ其ノ益増加シ來ル所ノ國家ノ需用ヲ給足センカ爲ニ收獲稅若ハ消費稅ヲ重クシ或ハ新タニ其ノ稅ヲ興サントスルモ或ル理由ヨリシテ之ヲ行害ナリト認メシニ因リ其ノ方向ヲ轉シテ一定ノ財產所有ノ實ヲ證スル所ノ取引ニ課稅スルニ至リシモノナリ

右ノ理由ナルヲ以テ最初ニ於テハ其ノ財產ノ移轉稅ヲ課スルニ當リ公平ノ主義ノ如キ毫モ之ヲ顧ルコトナカリシハ勿論此ノ主義タル昔日ニ在リテハ當ニ此ノ稅ニ於ケルノミナラス概シテ往々之ヲ等閑ニ

付シ去リタルモノナリ而シテ其ノ財產移轉稅ハ乃財產タルノ性質具モ判明ニシテ其ノ收獲ハ最多ク且最確實ナルカ故ニ其ノ納稅ノ力ノ有スル點ニ於テモ亦最多カルヘシト看做シ且元ト其ノ移轉ヲ隱蔽ヘルニ最難キモノ即不動産ニノミ之ヲ課セシト雖動産ニ屬スル資本一於テモ亦殊ニ營業及商業ニ在リテ良シヤ不動産ニ比シテ多カラサルモ尙其ノ同等迄ノ收獲力ヲ具有スルコトアルヘク加之營業稅及金利稅ハ如何ナル精密ト注意トヲ以テ之ヲ評定スルモ其ノ起業者及資合家ノ能力ニ對シ正當ノ比例ヲ以テ之ヲ課スルコトハ到底爲シ能ハルコトヲ悟リ終ニ動産ノ移轉ニ對シテモ亦其ノ稅ヲ課スルコトトナリ爾後益不動産ノ外動産ニ對シテモ亦課稅ヲ要スル公平ノ主義ニモ亦依據スルニ至リシナリ

第二百二十八章

抑此ノ考案タル一部分ニ對シテハ實ニ其ノ理アリ殊ニ流通券買賣高及金利ハ之ヲ他ノ収獲ノ泉源ニ比シテ納税ヲナスノ少ナキハ之ヲ証スルコト難キニアラサルヘシ故ニ財産移轉税ニヨリ是レマテ課税セラレザリシ所得部分ニ税ヲ課シ又ハ容易ニ他ノ税ヲ脱カル、ヲ得キ投機上ノ利潤及其ノ他時機ノ僥倖ニ因リテ得タル所ノ利潤ニ對シテ課税スルヲ得ルニ至ラハ則此ノ税ハ實際税法ノ缺點ヲ補填スルヲ得ヘキナリ然レトモ此ノ税ハ斯ル場合ニ在リテ其ノ實財産ノ移轉毎課スヘキ財産税ニアラス唯収獲税ヲ納税力ニ相當セシムルヲ務ムルニ外ナラス而シテ結約票又ハ爲替ノ税モ亦此ノ論點ニ據リテ其ノ道理ヲ示スヲ得ヘシト雖株券所得部分證書、金利債券等ノ税ニ至リテ既ニ此ノ論點ヲ維持スルコト稍難シトス蓋其ノ課税物タル財産ハ創生ノ際ニ於テ充分ノ税ヲ納メザリシ時ノ外ハ此ノ税ヲ補充税ト見做

シ得ヘキニアラス然レトモ是眞ニ稀有ノコトノミ其ノ財産ヲ蓄積シタル者例ヘハ官吏タリシ時ノ如ク己レノ納税義務ヲ隱蔽スル能ハザリシカ又ハ正直ニシテ法律ニ背カザリシカ爲蓄積ノ當時既ニ法律上ノ税ヲ課シタル財産ニモ亦移轉税ヲ課スルハ不公平ト云ハサルヘカラス而シテ若補充ノ説ヲ奉セントセハ斯ノ如キ財産ヲ免税セサルヲ得スト雖各個ノ場合ニ於テ免税ノ理由アルヤ否之ヲ確知スルニ道ナキハ言ヲ俟タサルナリ

不動産取引ノ税ニ對シテモ亦地稅及家屋稅ハ其ノ價值ノ次第ニ増加スルニ隨ヒテ増進スル能ハサルカ故ニ収獲ノ實額ヲ捕獲スヘカラスト云フヲ以テ其ノ道理ヲ示サント試ミタルモノアリト雖是單ニ其ノ一定ノ分度ニ達スルマテハ其ノ理アルヘキノミ多クノ國ニ於テ實際ニ行フ所ノ如キ重税ヲ以テ不動産移轉ニ課スルノ理ハ到底之レニ據

リテ出テサルナリ

其ノ他ノ財産移轉税ニ至リテハ間接相屬的ニタモ其ノ理由ヲ求ムハ
カラス唯次第ニ増加スル國家ノ需用ヲ給足スルニ必要ナリトノ一言
アルノミ而シテ之ヲ非トスルノ理由ハ却リテ乏シカラスト雖前ニ各
種ノ税ヲ論スルニ當リ其ノ重要ナルモノハ既ニ之ヲ説述セシヲ以テ
今復贅セス

第二百二十九章

最近財産移轉税ハ益他ノ税ノ補足税又ハ附加税タルノ性質ヲ失ヒ本
來ナル財産税ニ移ラントスルノ傾向アルハ大ニ注目ヲ要スヘキ所ノ
リ而シテ其ノ目的タル各個ノ財産移轉ニ課税シテ財産税ヲ實行セ
トスルニ在ルヤ必セリ果シテ然ラトセハ此ノ税ハ彼ノ消費税ト全ク
同一ノ結果ヲ生スヘシ唯タ消費税ニ在リテハ主要ナル消費ニ課税ノ

テ之ヲ各個人ノ収入ニ負擔セシメ而シテ財産移轉税ニ在リテハ主要
ナル財産ノ移轉ニ課税シテ之ヲ其ノ財産ニ負擔セシムルノ別アルノ

ミ

夫財産税ハ概シテ之ヲ徵收スルノ道理アルヤ否ノ問題ハ特ニ財産税
ヲ論述スル所ノ後節ニ譲リ斯ニハ姑ク實際ノ傾向ニ對シ學術上ニ於
テ如何ナル考案アルヤヲ略述スルニ止ムヘシ

抑現今ノ財産移轉税ハ補足税トスルニ適セサルコトハ既ニ之ヲ論セ
リ而シテ又其ノ一種ノ特立ナル財産税トナスニ足ラサルコトハ多ク
ノ緊要ナル財産ノ移轉ニ對シ全ク課税セサルコトアルノ一點ニ徵シ
テ既ニ明白ナリ

然ラハ則何ニ由リテ其ノ満足スルヲ得ヘキ税法トナスヲ得ヘキカ曰
ハク之レヲナスノ道ニアリ其ノ一ハ財産移轉税ヲ取締シテ單ニ収獲

税ノ補足タルノ實アラシムルノ法トシ又其ノ一ハ此ノ税ヲ擴張シテ他ノ税ト併立スル財産税タラシムルノ法トス
 右ノ二法ヲ考フルニ財政上ニ於テ其ノ實行シ得ヘキ限リハ必ス第一法ヲ實行スルヲ優レリトス而シテ此ノ法ニ於テ財産移轉税トスヘキモノハ相續税及贈與物税ヲ除クノ外不動産移轉税爲替印紙及相場會所税ニ限ルヘキカ

其ノ第二ノ法ヲ取ルトキハ凡移轉スル財産ニシテ収獲又ハ所得ノ源泉ト看做シ得ヘキモノハ可及的漏サス課税スルヲ主眼トナシ以テ實際ニ成シ得ヘキ丈ケハ此ノ税法ヲ改良セスンハアルヘカラス就中収獲又ハ所得ノ源泉ト看做スヲ得ルノ點ニ注目スルヲ必要トス今財産税ヲ永遠ニ徵収シテ而モ國民ノ經濟ニ害ナカラシメント欲セハ之ヲ財産税トスルハ其ノ名義上ニ止マリ其ノ實財産ハ課税ノ標準トスル

モ税源トスヘカラサルヲ要ス又財産移轉税ハ不動産所有權移轉税ノ外主トシテ製造及商業上ノ取引税ヲ課スルノ一方ニノミ擴張スヘシ此ノ如クスレハ則此ノ税法ノ實際ニ施行セラル、ヲ得ヘキハ蓋疑トヲ容レス且其ノ施行ノ道理ハ他ノ財産ノ移轉ハ既ニ課税スルニ依リテ之ヲ推知スヘキモノトス

正當ノ財産移轉税ヲ實行セントスルニ於ケル第二ノ要件ハ可及的固定印紙ノ制ヲ廢シ移轉スル價值ノ大小ニ應シテ等級ヲ分チタル税率ヲ用ユルニ在リ財産移轉税ハ苟モ財産若ハ之ニ依リテ代表セラレタル所得ニ之ヲ課スヘキモノナリトノ本旨ヲ失ハサルトキハ則其ノ等級ヲ分ツニアラサレハ決シテ納税ノ負擔ヲ公平ニ分配スルヲ得サルナリ固定印紙ハ恰モ人頭税ノ如キ結果アリ之ヲ別言セハ些少ノ財産アル者ノ爲格別ニ負擔ヲ重シシ巨多ノ財産アル者ヲ利スルノ弊アル

ナリ

右ノ如ク税法ヲ改正スルモ前ニ續々列舉シタル所ノ弊害ハ到底悉ク之ヲ除去シ得ヘキニアラサルハ固ヨリ論ナキナリ

第三節 消費稅

一 定義及類別

第三百三十章

消費稅ハ一定ノ貨財及勞力ヲ消費シ又ハ使用スルニ顯ハレタル財產使用ノ行爲ニ課スル稅ナリ而シテ之ヲ課スルノ理由ハ納稅義務者カ一定ノ目的ノ爲ニ支出スル所ト其ノ所得スル所トノ間ニ於テ自ラ適當ノ比例ヲ存スルニ在ルナリ

消費稅ノ泉源ハ所得ナリ課稅物ハ其ノ消費又ハ使用ニ稅ヲ課シアル種々ナル物件ナリ稅率單位ハ一定ノ尺度、重量、數又ハ其ノ他ノ徵候ナリ

是ノ故ニ消費稅ハ支出ニ課稅シテ以テ間接ニ所得ニ課稅セントスルモノニシテ又之ヲナサ、ルヲ得サルナリ收獲稅財產稅及所得稅ハ納稅義務者ノ納稅力ヲ直接ニ捕獲セントシ消費稅ハ所得ヲ消費スルニ顯ハル、納稅力ヲ間接ニ捕獲スルモノナリ

第三百三十一章

抑所得ト支出トノ間ニハ正當ノ比例ヲ存スヘシトノ想像ハ或ル範圍内ニ於テハ其ノ理アルコト疑ナシ然レトモ消費稅ハ各個人ニ於テ己カ納稅力ヲ顧ミテ任意ニ其ノ稅ヲ脱カル、ヲ得ヘク又之ヲ負擔スルヲ得ヘキ餘地ヲ與ヘテ之ヲ課スルニアラサレハ之ヲ公正ナリ即納稅力ニ適スルモノナリト云フヘカラス

而シテ此ノ目的ヲ達センカ爲普通ノ消費稅即總テノ消費ヲ漏サス課稅スヘシトノ說ヲナセシ者アリト雖斯ノ如キ課稅ヲナストキハ費用

ヲ要スルコト大ニシテ且一私人上及工業上ノ生活ニ非常ノ煩雜ヲホスコト明白ナリ

又其ノ消費又ハ使用ニ徴シテ所得ノ多寡ヲ精確ニ察スルヲ得ヘキ唯一ノ物品ヲ見出スヲ得ス必定缺クヘカラサル需用品一個ニ課税セシカ恰モ人頭税ノ如キ結果ヲ生シ貧者ノ負擔ヲ大ニスヘシ多少缺クニトヲ得ヘキ物品ヲ擇ハンカ税率ヲ高ムルモ其ノ收入ハ却リテ多カンサルヘシ

然ラハ則消費税ハ少ナクトモ内國産ノ消費物ニ關シテハ數種ノ物品ニ之ヲ課スルノ外他ニ其ノ策アラサルナリ而シテ其ノ種類ノ多少ハ固ヨリ之ヲ自由ニ定ムルヲ得ルモノニシテ此ノ如クスルトキハ則各階級ノ人民ニ對シ課税ヲ公平ナラシメ且財政ノ目的ヲ完クスルカ爲大ニ便利ヲ得ルモノナリ然レトモ一家ノ生活及經濟上ノ活動ニ向ヒ

過大ノ負擔ヲ感セシムヘカラサルヲ以テ此ノ消費税ノ得失ハ姑ク指シキ之ヲ論セス唯既ニ之ヲ課スル上ハ課税物ノ選定其ノ宜キヲ得ルノ以テ第一ノ要件トナサ、ル可カラサルナリ

第三百三十二章

消費税ハ種々ナル点ニ據リテ之ヲ類別スルヲ得ヘシ其ノ最重ナル候ハ(イ)物品ノ種類(ロ)人間ノ需用ニ對スル其ノ關係(ハ)物品ノ出所及(ニ)税額評定徴收ノ方法ナリトス

(イ)物品ノ種類ニ據リ最普通ニ課税セラル、モノ左ノ如シ

第一 食用品税即穀粉税、肉類税、食鹽税、砂糖税其ノ他食用ニ供スル一定ノ輸入品税

第二 飲料品税即麥酒、葡萄酒、火酒、珈琲、茶等ノ税

第三 使用又ハ消費ニ供スル其ノ他ノ物品ノ税例ヘハ煙草、石鹼、薪炭、

点火材料、衣服地、摺附木、骨牌、曆、新聞紙、馬匹、馬車、住宅等ノ稅

第二百三十三章

(ロ)物品ノ人間ノ需用ニ對スル關係ニ據リ類別スレハ左ノ如シ

第一 必定飲シヘカラサル物品ノ稅即穀粉、肉類及食糧ノ稅等ハ其ノ重ナルモノニシテ之ヲ消耗稅トモ云フ其ノ他薪炭、点火材料、衣服地等ナリ

第二 普通ニ用ヒラル、ト雖缺シヘカラサルノ限リニアラサル物品即茶、珈琲、麥酒、葡萄酒、砂糖、煙草、新聞紙等ノ稅ナリ

第三 奢侈物稅即美食品、馬車、馬匹、僕婢等ノ稅ナリ
此ノ類別ノ内時ト場所ヲ異ニスルニ隨ヒ一定セサルモノアリ或ル物品ノ第一種ニ屬スルヤ又ハ第二種將タ第三種ニ屬スルヤハ管ニ一國民若ハ一民族ノ風俗習慣即其ノ普通教化ノ度ニ據ルノミナラス復當

サニ邦土ノ寒暖乾濕等ニ關係スヘシ又同種ノ物品ト雖其ノ性質ヲ異ニスルニ隨ヒ時トシテハ必需品ニ屬シ時トシテハ奢侈物ニ屬スルコトアルヲ忘ルヘカラス

第二百三十四章

(ハ)課稅物ノ出所ニ據リ之ヲ類別スレハ内國品稅及外國品稅ノ二種トス面シテ其ノ外國品ニ課スルモノヲ單ニ國境稅ト稱スルコト常ナリ

第二百三十五章

(ニ)稅額評定及徵收ノ方法ニ據リ之ヲ類別スレハ第一專占モノガク及第二本來ノ消費稅ノ二種トス

第一 專占
財政上ノ專占即徵稅ヲ目的トスル專占トハ國家カ一定ノ生產品ヲ製造セテ之ヲ賣捌クノ專權ヲ謂フモノニシテ國家ハ普通民法ニ遵ハス

又自由ノ競争ヲ受ケス該生産品ヲ賣捌キ之ニ依リテ内國普通ヨリモ多額ニシテ租税ト見做スヘキ利潤ヲ收ムルヲ目的トスルモノナリ故ニ專占ナルモノハ一種固有ノ租税ニアラス唯其ノ特異ナル徵收法ナルノミ

專占ハ素ト之ヲ多クノ物品ニ適用スルヲ得ルモノニシテ巨多ノ利潤ヲ收ムルノ望ミアラシムルモノナリト雖實際之ヲ適用スルハ實ニ僅々二三種ニ過キサレナリ蓋之ヲ適用スルトキハ則益自由ノ交通ヲ符制シ民間ノ經濟ヲ壓倒スルノ實アルヲ免レサルヲ以テ萬已ムヲ得サルノ理由アルニアラサレハ漫ニ之ヲ適用スヘカラサルモノナリ此レヲ以テ此ノ專占ヲ實行スルニハ必スヤ尋帝ノ消費稅ヲ以テ物品ニ對シ適宜ノ稅ヲ課シ得ヘカラサルノ明証ナカルヘカラサルナリ

第二 本邦ノ消費稅

狹義ノ消費稅ハ自由ノ交通ヲナス物品ニ課スルモノナリ而シテ其ノ賦課及評定ノ法ニ種々アリ其ノ徵收ニモ亦直接(例へハ奢侈物稅ノ如シ)及間接ノ二法アリテ就中間接ノ徵收法ヲ最緊要トス夫消費物ヲ消費スル人及之ヲ消費スル行爲ハ實際素ヨリ無數ニシテ直接之ニ課税スルハ極メテ困難ナルモノナリ是ヲ以テ其ノ物品ニシテ内國ニ産スルモノハ其ノ生産者又ハ商人ニ就キテ課税シ其ノ外國ヨリ輸入スルモノハ輸入者ニ就キテ課税ス是蓋其ノ多量ノ集積スル所且其ノ調査ニ漏ル、ノ恐レ少ナキ時ニ就キテ之ニ課税シ以テ其ノ困難ヲ避クルモノナリ然レトモ其ノ生産者及商人ニ取リテハ其ノ實一時仮リニ國家ニ納税スルニ過キス即其ノ額ヲ物品ノ代價ニ加ヘ以テ其ノ消費者ヨリ之ヲ償ハシムルヘキヲ以テナリ故ニ此ノ場合ニ於テ納税移轉ハ其ノ分配ヲ公正ナラシムルノ要件ナリト云フヘシ

此ノ間接消費税ハ之ヲ徵收スル時期ニ據リテ尙之ヲ細別スルヲ得ヘシ蓋此ノ税ハ其ノ製造中ニ於テ又賣買流通ノ中ニ於テ之ヲ徵收スルヲ得ヘキヲ以テナリ

税額評定ノ方法ハ下章ニ至リ各其ノ種類ノ一ヲ觀察スル毎ニ逐次之ヲ論スヘシ要スルニ課税物ノ各特異ナル性質ニ依リ製造中若ハ賣買ノ時ニ於テ其ノ税額ヲ評定スルニ最適當ナル時期ヲ擇ミテ之ヲ利用スヘシ但事宜ニヨリテハ其ノ製造中ト賣買ノ時トノ二期ヲ併用セサルヲ得サルコトアリ

請フ先ツ製造税ヲ論セン此ノ税ハ粗製品税又ハ半製品税若ハ精製品税等ニ別ツヘシ其ノ生産材料ノ積量及其ノ性質ヲ査定スルニ極メテ困難ナルトキハ例ヘハ生産中一定ノ期限ニ使用スル器物ノ内容量ヲ標準トナスカ如ク其ノ積量等ヲ概則スルノ基トナスヲ得ヘキ一定ノ

徴候及生産用ノ機械ニ據リテ税額ヲ評定スルコトナシトセス然レトモ要スルニ驗酒器驗糖器等ノ如キ物質ノ良否ヲ檢定スル機械装置又ハ計數評量ノ装置ヲ發明シ之ヲ實用シテヨリ大ニ税額ヲ評定スルノ方法ヲ完全ナラシメタリ

製造税ハ重モニ廣大ナル家屋内ニ於テ製造シ數多ノ個所ニ散在スルニアラスシテ其ノ調査監視ニ便ナル物品ニ用ヒラル而シテ其ノ工業ニ對シ餘リ妨害ナクシテ實行シ得ヘキ限リハ精製品ニ依リテ評定シ且可及的之ヲ消費ニ移スノ期ニ近ツキテ徵税スルヲ良トス或ハ之ヲ粗製品税トナストキハ生産ノ始期ニ於テ課税スルヲ以テ工業最中ノ時間ヲ妨ケサルノ利アリト雖是唯物量ニ據リテ課税スルノミニシテ其ノ物質ノ良否ヲ顧ミ難キノ不利アルヲ免レス之ニ反シ之ヲ精製品税トナストキハ多クノ場合ニ於テハ物質ノ良否ヲモ斟酌シ美良ノ生

産物ノ消費ハ稍多額ノ所得アルコトヲ表スルヲ以テ之ニ對シ積重キ
 税ヲ課スルヲ得ヘキノ利アリ且夫納税ノ期ヲシテ物品賣捌ノ期ニ近
 ヲカシムルハ其ノ納税ノ後尙種々ノ經過ヲ要スルニ比スレハ生産者
 ヨリ該納税額ヲ稍費者ニ移轉スルコト容易ニシテ即圓滑ニ之ヲ實行
 スルヲ得ヘシ但シ此ノ移轉ハ元來間接税ニ於テ最缺クヘカラザルノ
 要件トナスハ既ニ知悉スル所ナリ乃此ノ点ヨリ考察スルモ其ノ精製
 品ヲ評定シテ課税スルヲ以テ優レリトスヘキナリ
 次ニ賣買流通税ヲ論セン其ノ之ヲ論スルニ於テハ先ツ外國ヨリ輸入
 シ又ハ外國ニ輸出スル物品ト内國ニ於テ生産消費スルモノトヲ區別
 セサル可カラス

凡外國ヨリ輸入シテ内國ニ於テ消費スル生産物ニシテ課税スヘキモ
 ノハ國境ニ於テ輸入税ヲ課スルヲ最良シトス其ノ外國ニ輸出スル時

ニ課税(輸出税)スヘキ生産物ニ在リテモ亦然リ而シテ輸出入税ハ其ノ
 輸出シ又ハ輸入スル物品ノ性質如何ニ據リ或ハ重量箇數ニ據リ或ハ
 其ノ價值ニ從ヒ之ヲ課スルモノナリ

内國産ノ物品モ亦往々賣買流通税ヲ課セラル、コトアリ而シテ此ノ
 税ハ或ハ本來ノ流通税ナルコトアリ或ハ又商業税ナルコトアリ
 而シテ其ノ何種ナルヲ論セス流通税ハ皆製造税ノミヲ以テ希望ノ如
 ク課税シ得ヘカラサル時ニ於テ製造税ト併用セラル、モノナリ例ヘ
 ハ葡萄酒及火酒ノ卸賣小賣ノ商業税アリ此ノ税ハ製造税ノ外ニ尙酒
 類ニ課税スルモノナリ或ハ酒類ヲ製造所ヨリ運出シタル時又ハ之ヲ
 小賣商ノ倉庫ニ積入レタル時等ノ如キ運搬中適宜ノ期限ヲ定メ其ノ
 流通中ニ在ル物品ノ税ヲ徵收スルナリ斯ノ如クスルモノ之ヲ本來ノ
 流通税ト云フ

流通税ハ國內關稅、通門稅等ト稱シテ國內一定ノ地方殊ニ市府ニ物品ヲ輸入スルニ際シテ徵收セラル、コト最多シ然レトモ是等ノ稅ハ概テ國家ノ爲ニセシテ町村ノ爲ニ徵收スルモノトス又所謂換稅賦金ナルモノハ一種特異ノ課稅法ナリ即生產者又ハ商業者カ課メ收稅應ニ協議シ物品ニ就キテ一々評定スヘキ消費稅ニ換ヘテ納付スル所ノ賠償ヲ稱シテ之ヲ換稅賦金ト云フ

第三百三十六章

消費稅ヲ講究スルニ其ノ次序ヲ整然タラシムルニハ必ス本來ノ消費稅ト國境稅トヲ區別スルヲ要ス國境稅ハ特ニ其ノ講究ヲ必要トスルノ理由一ニシテ足ラス夫此ノ稅ハ價々小數ノ物品ニ課スルニ止マルアリ或ハ數多ナル物品ニ及ハスアリ其ノ評定ノ方法ハ全ク他ノ消費稅ト別異ナリ而シテ其ノ違セン

トスル所ノ目的ハ單ニ財政上ニ止マラス否財政上ノ目的ヲ以テ主要トセサルコト稀ナラサルナリ抑國境稅ノ實況ハ各國其ノ商業政策ノ目的ヲ異ニスルニ隨ヒ極メテ不同ナリト雖內國ノ生産物ニ課スル消費稅ニ至リテハ各國殆ト其ノ課稅物ヲ同フス即其ノ最普遍ナルモノヲ舉レハ穀粉、肉類、食鹽、麥酒、葡萄酒、火酒、甜菜糖、煙草及概テ奢侈物ニ屬スル其ノ他種々ノ物品ナリ但此ノ物品ノ稅ハ之ヲ直接ニ徵收スルヲ常トス此ノ內國消費稅ヲ論スルニハ課稅物ノ性質、本體及其ノ人間ノ需用ニ對スル關係ニ據リテ之ヲ類別スルヲ最良トス故ニ之ヲ類別シテ第一穀粉、肉類及食鹽稅第二麥酒、葡萄酒及火酒稅第三甜菜糖稅第四煙草稅第五直接消費稅及第六國境稅ノ六種トナスヘシ若夫消費稅總體ノ得失ハ本節ノ終尾ニ之ヲ論セン

二 穀粉、肉類及食鹽稅(消耗品稅)

第三百三十七章

第一 穀粉稅(挽粉稅)又ハ麵包稅トモ云フ

此ノ稅ハ麵包ノ消費ニ課稅スルヲ目的トシ挽粉稅又ハ通門稅トシテ之ヲ課ス

挽粉稅ハ麵包ノ製造ニ充ツヘキ穀物ヲ挽粉所ニ運送シ來リタル時ニ於テ其ノ重量若ハ斗量ニ準シテ之ヲ徵收ス而シテ人力挽粉器ノ禁止、挽粉所ノ監視、穀物持入又ハ持出ノ時限及方法ニ關スル規定、挽粉器運行之計數及計量裝置等ノ如キ種々ナル監督法ヲ設ケ以テ脫稅ナキヲ保セサルヲ得ス

通門稅ハ穀物若ハ穀粉ヲ市域ニ輸入スル時ニ之ヲ徵收ス
抑麵包稅ハ人生缺クヘカラナル普通一般食用品ノ稅ナルヲ以テ國家

ノ爲巨多ノ收入ヲ生スルハ勿論ナリト雖學術上ニ於テハ之ヲ非トスルヲ普通トスル理由二種アリ

抑全國ニ於テ消費スル穀物ニ對シ悉ク之ニ課稅スルハ實際ニ於テ甚タ困難ナルコト、ス若之ヲ挽粉稅トセンカ即其ノ數多ナル各所ノ挽粉所ヲ監視スルコト極テ難ク且費用ヲ要スルコト大ナルヲ如何セン又之ヲ通門稅トセンカ即其ノ市内ノ人民ノミニ之ヲ負擔セシメ而シテ之ニ代ルヘキ租稅ヲ以テ田舎ノ人民ニ課スルコト難キヲ如何セン是麵包稅ヲ非トスル理由ノ第一ナリ

麵包稅ハ他ノ諸國ニ於テハ兎モ角モ我歐州ニ於テハ必要ナル食用品ノ稅ナルヲ以テ縱令穀物ノ種々ナル性質ヲ斟酌スルモ到底下等ノ人民ノ爲特ニ負擔ヲ重カラシメ彼ノ總テ消費稅ニ於テハ納稅者自己ノ所得ニ應シ任意ニ之ヲ負擔シ又ハ之ヲ脫カル、ヲ得セシムヘシトノ

要件ヲ完クスルコト能ハス又貧民ノ麵包ヲ消費スルコト其ノ富者ニ異ナラス否其ノ所得ハ甚タ小ナルニモ拘ラス勞働等ノ多キ故ニヨリ消費ハ却テ大ヒナルモノナリ殊ニ同シク貧民中ニ在リテモ其ノ女子ノ多寡ニ據リテ其ノ負擔ヲ異ニスルコトアリ或ハ其ノ賃錢ヲ受クル日雇ハ其ノ給養ヲ受クル者ニ比シテ負擔ノ大ヒナルコト知ルヘキナリ此等ノ諸件ハ即是麵包稅ヲ非トスル理由ノ第二ナリ

但手工業者ニ對シ直稅ヲ課セサルノ國ニ於テハ此ノ稅ヲ以テ多少其ノ理アリトスルヲ得ヘキカ

然レトモ麵包稅ハ穀物及穀粉ニ國境稅ヲ課スルノ外國稅トシテ之ヲ徵收スルコトハ概テ既ニ廢セラレ唯今日ニ於テハ通門稅トシテ自治體ノ爲ニ之ヲ徵收スルコトアルノミ

第三百三十八章

第二 肉類稅(屠獸稅)

此ノ稅ハ肉類ノ消費ニ課稅スルヲ目的トスルモノニシテ麵包稅ノ如ク或ハ生産稅(即屠獸稅)トナシ或ハ通門稅トシ之ヲ評定スルヲ得ヘシ屠獸稅トナストキハ或ハ屠殺前獸類ノ頭數及其ノ種類ニ應シテ之ヲ課シ或ハ屠殺後其ノ種類及消費ニ付スヘキ重量ニ應シテ之レヲ課スルナリ

獸類及肉類ノ稅ヲ通門稅トナストキハ之ヲ徵收スルノ方法穀物及穀粉ニ異ナルコトナシ

肉類稅ヲ非トスルノ理由ハ之ヲ麵包稅ニ比スレハ稍少ナシトス蓋肉食ハ所得ノ稍大ナルヲ表明スルモノニシテ富者ハ肉ヲ食スルコト多量ナルカ故ニ所得ニ應スルノ分度ハ一步ヲ進メリ而シテ通門稅トナストキハ更ニ其ノ性質ノ良否ニ從ヒテ稅率ヲ異ニスルヲ得ヘシ然レ

トモ其ノ稅少シコトモ重キ時ハ夫ノ最希望スヘキ下等人民ノ肉食ヲ妨ケルノ害アルヲ免レサルハ勿論ナリ蓋此ノ害ハ尙可ナリトスルモ其ノ徵收ノ實際ニ困難ナルニ因生スル害ハ一層甚シキモノナリ又都鄙一樣ニ遺漏ナシ課稅スルノ方法ヲ設クルコトハ到底ナシ得ヘカラサルノ状態アリ則其ノ徵收ノ密ナルヲ得ルハ屠獸所ノ制アル地及其ノ周圍ノ市府ノミ他ノ田舎ニ至リテハ一家私用ノ爲自ラ獸類ヲ屠殺スルコト稀ナラス斯ノ如キハ之ヲ秘スルニ便ナルヲ以テ極テ嚴重ナル監督法ヲ設クルモ尙其ノ肉類ノ消費ヲ悉ク捕獲スヘカラサルナリ故ニ田舎ノ屠獸者ニ就キテ換稅賦金ヲ納メシメ以テ課稅普及ノ目的ヲ達セントスルモノアルニ至ル然レトモ斯ノ如キ賦金ハ家畜商業稅ノ如キモノニシテ實ニ姑息ノ策タルニ過キサルノミ此ノ理由アルヲ以テ肉類獸類ニ國境稅ヲ課スルノ外ハ大ニ國稅トシ

テ肉類稅ヲ徵收スルコトヲ廢止シ以テ之ヲ自治體ニ委付スルニ至レ

第三百三十九章

第三 食鹽稅

食鹽ノ消費ニ課スル稅ハ或ハ食鹽專賣トナシ或ハ自由生産ノ稅トシテ之ヲ徵收ス

夫食鹽專賣ノ法ハ昔日人ノ頗ル稱揚セシ所ナリ此ノ法ニ依レハ國家ハ食鹽ノ生産(生産專賣)又ハ其ノ商賣(商業專賣)ヲ專行シ或ハ全ク其ノ二者ヲ併セテ專行シ國家ノ專定セル代價ヲ以テ徵稅ス而シテ其ノ食鹽ヲ外國ヨリ輸入スルノ權ヲモ亦國家ノ專有ニ歸セシムルハ此ノ占賣法ニ於テ必定ノ結果ナリトス

生産稅ノ法ニ依レハ食鹽ノ生産及賣買ヲ專クテ民間ノ工業ニ委付シ

食糧ノ重量ニ從ヒ生産者又ハ輸入者ニ就キテ消耗税ヲ徴收ス
 人ノ食用ニ供セサル塩類例ヘハ動物ノ飼養ニ用ヒ又ハ工業上及化學
 上ノ目的ニ用ユルモノハ食鹽專賣ノ法ニ於テモ亦生産税ノ法ニ於テ
 モ免税タルヘキハ固ヨリ言フ埃タス其ノ動物ノ飼養ニ用ユルモノ、
 如キハ一定ノ物質ヲ混和シ人ノ食用ニ供スヘカラサラシムルヲ以テ
 脱税ヲ豫防スルヲ常トス

單ニ實際上ヨリ之ヲ論スルトキハ食鹽ニ課税スルニ專賣法ヲ用ユル
 ノ必要アルヲ見ス則二三ノ監督法ヲ施行セハ其ノ多量ノ脱税ヲ企ツ
 ルコト容易ナラサルヘシ或ハ其ノ性質ノ良否ニ據リテ税率ヲ異ナフ
 シムル如キハ賣買法ニ於テ之ヲ實行シ易カルヘシト云フモノアラン
 然レトモ元來食鹽ハ其ノ性質ニ差等ヲ分テ得ヘキモノニアラス之ヲ
 專賣トスルトキハ國家ハ之ヲ爲殊ニ從來鹽坑及製鹽所ヲ有セサルニ

於テハ往々困難ナル行政事務ヲ負ヒ一方ニハ民間起業者ノ爲大ニ起
 業ノ餘地ヲ縮少スルノ不利アリ是ヲ以テ生産賣買ノ自由ヲ妨害スル
 コト他種ノ税ニ比シテ稍少ナキ所ノ生産税ヲ以テ優レリトスヘキナリ
 抑食糧税ハ租税ノ大原則ニ對シ如何ナル關係ヲナスヤヲ考案スルニ
 學理上之ヲ非トスルハ何レノ論者ト雖殆ト貴其ノ權ヲ同スルモノハ
 知シ而シテ其ノ理由ハ麵包税ヲ非トスルモノニ異ナラス食糧ハ必定
 缺タヘオラサル需用品ナルカ故ニ其ノ税ハ人頭税ト同シク却リテ下
 等人民ノ負擔ヲ重クシ且一定ノ工業者ハ農業ヲ營スルノ結果アリ是
 ヲ以テ食糧税ヲ廢シ適當ノ租税ヲ以テ之ニ代フルヲ目的トスルハ極
 テ希望スヘキコトナリトス

夫れ故ニ此ノ税ハ固ヨリ偏執保持スヘキニアラスト雖又濫リエ之
 テ攻撃シテ之ヲ全廢セシメントスルモ亦其ノ策ノ得タルモノニアラ

ス蓋其ノ税率ハ格別ニ重カラサルコト常ニシテ其ノ履賃ニ課スル直
 税最輕キトキハ則納税ノ負擔ヲシテ平等ナラシムルニ適セルコトヲ
 忘ルヘカラス若之ヲ全廢セントセハ先ツ其ノ企望ノ結果ヲ收ムヘキ
 ヲ熟計シ即必ス細民ノ負擔ヲ輕減スルノ實アルコト其ノ相違ナキヲ
 保セサルヲ得ス然レトモ此ノ間接ノ消費稅ヲ廢スルモ生産者又ハ商
 者ハ從來ノ價ヲ維持シ物價ヲ減セス良シヤ之ヲ減スルモ稅額ニ充ツ
 ルニ至ラスシテ其ノ實生産者又ハ商者獨リ利ヲ專ラニシ消費者ハ毫
 モ其ノ利ヲ受ケス國庫ハ其ノ收入ヲ失フニ歸スルコトアリシハ既ニ
 世人ノ經驗セル所ナリ故ニ其ノ廢止ハ未タ遽カニ其ノ可ヲ決スヘカ
 テサルナリ

三 麥酒葡萄酒及火酒稅(酒稅)

第四百十章

必定缺クヘカラスト云フニアラス而シテ普通ニ用ヒラル、物品ハ其
 ノ消費稅ヲ課スルニ最適セリト云ハ、(實際ニ之ヲ行ツテ得ヘク且交
 通ヲ妨害スルノ恐ナキ時ニ限ルハ勿論ナリ)此ノ稅ヲ課スヘキ物品中
 酒精ヲ含著スル飲料ノ右ニ出ツルモノナカルヘシ夫麥酒及葡萄酒ノ
 二類ハ一定ノ地方ニ於テ若ハ富ノ分度ヲ進メタル者ニ在リテハ必需
 品ノ一ニ屬スルモノ、如ク且麥酒ハ殊ニ之ヲ多量ニ消費スル國ニ於
 テハ其ノ成分ヨリ論スルモ食用品ト看做スヲ得ヘキモノナリト雖然
 レトモ之カ爲酒類ハ必定缺クヘカラサルモノト謂フヘカラス何トナ
 レハ之ヲ缺ケハトテ人身ノ健康ヲ害スルコトナキノ事實ヲ變スルコ
 トナクレハナリ

然リト雖モ酒類ハ其ノ種類ヲ異ニスルニ從ヒ其ノ稅額評定ノ方法及
 稅率ノ輕重ヲ差別スヘキハ勿論ナリトス

第四百四十一章

第一 麥酒稅

凡酒稅ノ中ニ就キ麥酒稅ハ之ヲ徵收スルニ最容易ナリ何トナレハ麥酒醸造ハ葡萄酒栽培ノ如ク農業ノ一支分ニ属スルノ業タルニアラヌ又火酒醸造ノ如ク多クハ其ノ營業タルニアラヌ却リテ一個特立ノ營業ニシテ比例的ニ其ノ起業者ノ數モ少ナキヲ以テナリ其ノ稅額ハ或ハ精產物ニ據リ或ハ醸造器ノ能力ニ據リ又ハ粗製品ニ據リテ之ヲ評定ス

此ノ三法中精產物ニ據リテ計量ノ外ニ其ノ性質ノ良否ヲ斟酌スルモノヲ以テ最良シトスルハ疑ナシ然レトモ最總密ニシテ且甚ク煩雜ナル監督法ヲ施スニアラサレハ此ノ評定法ヲ實行スヘカラス釀造器ノ能力即其ノ器ノ容積ニ據リテ稅額ヲ評定スルニハ釀器ノ容

積及其ノ使用ノ度数ニ從ヒ稅額ヲ算定シテ釀器稅トナシ(甲)麥酒ヲ沸騰セシムルニ用ユル鐘ノ容積ヲ標準トシテ釀器稅トナシ(乙)又ハ麥酒ヲ捕テ、賣出ス所ノ樽ノ容積ヲ基トシテ酒樽稅トスル(丙)ノ三法アリ此等ノ法ハ何レモ麥酒ノ性質ヲ斟酌セス且消費スル麥酒ヲ悉ク捕獲スルヲ保スヘカラスシテ却リテ煩雜ナル監督法ヲ用ヒサルヲ得サルノ短所アルヲ免レヌ或ハ釀器稅又ハ之ニ類スル容積稅ト麥酒ニ用ユル香料ノ稅トヲ以テ同時ニ之ヲ併用センカ其ノ性質ハ概テ之ヲ斟酌スルヲ得ヘント雖モ其ノ新來ノ監督法ト收稅廳ノ干涉トニ依リ營業上大ニ其ノ煩ヲ覺ヘシムルコト多キヲ加フルノ弊アルヘシ是ノ故ニ二三ノ國殊ニ麥酒製造ニ關シテハ釀器トモナシ得ヘキ國々ニ於テハ粗製品課稅ノ法ヲ存セリ粗製品即麥芽代品ノ使用ヲ許スト否トニ論ナク之ヲ春碎スル時ニ其ノ稅ヲ課シ又ハ碎麥ノ量ニ據リテ稅額ヲ評

定スルトキハ之ヲ實行スルニ易クシテ醸造ヲ妨クルコトナキノ利アリ殊ニ麥芽ノ代品ヲ禁止シアルトキハ甲種ノ法ハ比例的ニ好結果ヲ收ムヘシ蓋手挽車ヲ禁シ麥芽ノ輸出入ニ關スル規則ヲ一定シ且計數秤量裝置ヲ設ル等ノ方法ヲ施サハ以テ麥芽ノ量ヲ査定スル頗ル精確ナルヲ得ヘシ且夫麥酒ノ良否ハ概テ麥芽質ノ含量如何ニ關シ其ノ含量多キ麥酒ヲ產出スル醸造家ハ隨ヒテ多額ノ稅ヲ納ムルノ理ナルル故ニ此ノ課稅法ハ自ラ多少性質ノ良否ヲ斟酌スルモノト云フヘシ

第四百四十二章

第二 葡萄酒稅

凡酒稅ノ中ニ就キ葡萄酒稅ハ之ヲ徵收スルニ最困難ナリトス其ノ之ヲ困難トスル理由種々アリ葡萄酒製造ハ特立ナル固有ノ營業ニアラスシテ無數ナル農家營業ノ一支分ノ業ニ屬スルコト其ノ一ナリ生産

者自家ノ消費及生産者消費者間直接ノ賣買ハ何レノ監督法ヲ施スセ容易ニ脫稅スルヲ得ルコト其ノ二ナリ毎年氣候ノ如何ニ依リ葡萄酒ノ收穫ハ其ノ性質多寡ニ於テ極テ不同ナルコト其ノ三ナリ又葡萄酒ニ善惡ノ差アルコト甚シク且數年ヲ經タル後ニアラサレハ其ノ善惡ヲ一定セサルヲ常トスルカ故ニ之ヲ確定スルノ難キコト其ノ四ナリ内國產葡萄酒ノ稅ハ實際ニ之ヲナセ得ヘキ限リハ可及的之ヲ消費ニ付スル時期ニ接シテ徵收スルヲ適當トス而シテ此ノ目的ヲ達センカ爲種々ノ方策ヲ試ミ就中流通稅トナシ一ハ葡萄酒ノ一地ヨリ他ノ地ニ運搬スル時ニ於テ其ノ稅ヲ課シテ運搬稅トナスノ法ヲ取り(即其ノ製造所又ハ貯蓄所ヨリ輸出スル時ヲ以テ徵收スルヲ積出稅ト云ヒ其ノ倉庫ニ積入ル、時ヲ以テ徵收スルヲ積入稅ト云ヒ市府ノ周圍線ヲ通過スル時ヲ以テ徵收スルヲ通門稅ト云フ)一ハ賣買殊ニ飲食店ニ於

ヲ賣買スル時ニ於テ其ノ税ヲ課スルノ法ヲ取ルナリ
 運搬税ハ通門税ヲ除クノ外他ノ方法ヲ以テ徵税スルニ比スレハ葡萄
 酒ノ消費ヲ捕獲スルコト稍密ナリト雖其ノ積出人又ハ積入人ヲシテ
 葡萄酒積出積入ノ場所並ニ其ノ種類計量等ヲ届出ツルノ義務ヲ負ハ
 シメ以テ積出人積入人ヲ煩ハスコト甚シク且極メテ綿密ナル検査監
 督ヲ必要トシ之カ爲ニ費用ヲ要スルコト尠カラズ積出積入税ニ在リ
 テハ自家ノ消費ニ歸スルモノハ全ク納税ヲ脱カレ通門税ニ在リテ
 市内ノ消費ノミ課税セラル而シテ葡萄酒ノ性質ヲ綿密ニ調査シ之
 應スルノ税ヲ課スルカ如キハ到底ナシ得ヘキコトニアラス僅カニ二
 三ノ税率ヲ定ムルノミヲ以テ満足セサルヲ得サルナリ
 小賣税ハ僅カニ飲食店ヲ經由スル消費ニ課税スルノミ生産者及消費
 者間直接ノ賣買ニ屬スル多量ノ消費ハ却リテ之ヲ脱カレシム其ノ他

小賣税ニ在リテモ嚴重ニシテ頗ル煩雜ナル監督ヲ怠ルヘカラス
 以上列舉シタル評定法ハ何レモ葡萄酒税ノ普及ヲ目的トスルモノ一
 シテ整然之ヲ併用スルトキハ財政上好果ヲ収メ且概テ公平ナル納税
 義務分配ノ要件ヲ完クスルヲ得ヘシト雖其ノ弊ヤ官廳ノ監督ト運搬
 ニ關係スル者ノ義務トヲ煩煩ニシテ納税ノ手續ヲ繁雜ナラシメ其ノ
 交通ヲ妨害スルコト甚シキニ至ラン

夫運搬税及商業税ハ元來其ノ正確ナルコトハ必然ナリト雖唯其ノ一
 私人ノ經濟上甚シキ妨害ヲ加ヘスシテ之ヲ實行スルコト難キカ故ニ
 多クノ國ニ於テハ葡萄栽培ニ課スヘキ單一ノ生産税ヲ以テ満足スル
 ニ至レリ

此ノ税ハ地税ニ同シク蓋帳ヲ設備シ之ニ登記スル葡萄園ノ面積ニ應
 シテ之ヲ評定シ或ハ實際葡萄絞汁ノ收穫ニ據リテ之ヲ評定ス而シテ

今日普通ニ實行スル方法ハ未タ以テ公平ニシテ且多額ノ收入ヲ生ヘ
 ヘキ課税ノ要件ニ適セスト雖生産税ノ等級ヲ分チ且之ニ小賣税ヲ併
 用スルトキハ或ハ之ニ適スルヲ得ヘキカ故ニ先ツ葡萄園ニ若干ノ等
 級ヲ分チテ其ノ税率ヲ定メ之ニ據リテ各葡萄園ノ等級ヲ評定スヘン
 其ノ等級ハ地税ニ於ケルカ如ク時々之ヲ改正スヘキコト勿論ナリ然
 ルニ此ノ税ノミコテハ尙人工葡萄酒ニ課税セス及數年ノ藏詰又ハ其
 ノ他ノ方法ニ因リテ善良ナラシメタル性質ヲ斟酌セサルカ故ニ生産
 税ノ外小賣卸賣ニ向ヒテ頗ル輕カラサル税ヲ課スルヲ要スヘキカ又
 此ノ小賣卸賣税ハ各其ノ營業者ニ分賦シタル換税賦金トシテ徵シテ
 可ナランカ

右ノ如キ税ト雖決シテ各般ノ弊害ヲ悉ク免除シ去リタルモノトナス
 ヘカラス即例ヘハ其ノ性質ノ良否ヲ斟酌スルコト不充分ナリ不作ノ
 年ニ在リテハ葡萄栽培者專ラ之ヲ負擔セサルヲ得サルノ結果アリ且
 輸出ノ葡萄酒ニ對シテモ亦内國消費ノモノト同一ノ税ヲ課スルカ如
 キ皆其ノ弊ナラサルハナシ然レトモ彼ノ流通税ノ如ク營業者ヲ煩
 スコト甚シカラサルト又他ノ酒類ニ比スレハ葡萄酒ノ消費ニ稍重
 税ヲ課スルトノ利アルヲ得ヘシ蓋葡萄酒ノ消費ハ富ノ徵候タルコト
 殆ト通常ナルカ故ニ之ニ對シ稍重キ税ヲ課シ以テ麥酒又ハ火酒ト同
 一ノ額ニ止メサルハ大ヒニ公平ノ主義ニ適スルモノナリ

第一百四十三章

第三 火酒税

抑此ノ税ノ評定ハ其ノ醸造方主トシテ明カニ他ヨリ之ヲ知り得ヘキ
 營業ナルヲ以テ彼ノ葡萄酒ニ於ケルカ如キ困難ヲ見スト雖而カモ嚴
 業ノ兼業ニ屬シテハ特ニ斟酌ヲ要スルコト少ナカラサルカ故ニ亦麥

酒ニ於ケル如ク能ク簡易ナルニモアラス到底其ノ困難ナキヲ得サルナリ且夫其ノ性質ノ良否如何ニ從ヒ之ヲ消費スル者ノ階級異ナルカ故ニ課税其上其ノ最數多ナル性質ヲ悉ク斟酌ヒサルヲ得サルカ如キ是亦困難ノ一ト云ハサルヲ得サルナリ

該税ニ付最多ク慣用セラル、賦課徴收ノ法ハ左ノ三種ナリ

第一 粗製品税トシテ粗製品ノ種類及多寡ニ從ヒ之ヲ課ス

第二 容積税トシテ醸造ニ用ユル一定ノ器物ノ容積ニ從ヒテ之ヲ課ス

第三 生産物税トシテ精製品ノ性質及多寡ニ從ヒ之ヲ課ス

生産物税ハ精製品酒精含量ノ強弱ヲ斟酌シ之ヲ徴收スルモノニシテ其ノ消費者ノ負擔ヲ適實正當ニシ、各種ノ材料ヲ同一ニ看做シ、且既ニ納税シタル火酒ヲ輸出スル時ハ相當ノ賠償ヲ與フルノ便アルカ故ニ

前三法中此ノ法ヲ以テ最良トスヘシ然レトモ此ノ法ニ於テハ監督ノ範圍ヲ擴張シテ之ヲ嚴重ニシ且數多ノ醸造業ヲ以テ可及的少數ノ大營業場ニ集約スルノ必要アリ故ニ國民ノ經濟上殊ニ農業ノ利益上細小ノ醸造家ヲ保護セントセハ一般ニ他ノ課税法ヲ取ルカ然ラサレハ細小ノ醸造家ニ限リ他ノ方法ヲ以テ其ノ額ヲ評定セサルヲ得サルナリ容積税ハ醸造ニ用ヒル蒸溜罐ニ之ヲ課シ又ハ粗製物質ヲ混和スルノ用ニ供スル醸桶ノ容積ニ從ヒ之ヲ課スルモノニシテ甲ノ場合ニ於テハ一定ノ期限内ニ製出スル酒精ノ量ヲ斟酌シ乙ノ場合ニ於テハ桶小ニ混和スル處ノ物質ヲ斟酌シテ其ノ税額ヲ定ムルコト勿論ナリ粗製品税(材料税)ハ粗製品ノ斗量又ハ重量ニ從ヒ之ヲ課ス而シテ此ノ法ニ於テモ各種材料ノ酒精ヲ産スルノ量異ナルニ從ヒ其ノ税率ヲ別ツハ言ヲ俟タス

其ノ他葡萄酒税ニ於ケルカ如ク換税賦金、小賣税等ヲ併セテ課スル
トアリ

生産物税ヲ除クノ外前述ノ課税法ハ皆火酒消費ノ負擔ヲ適實正當ト
ラシメ且悉ク之ヲ網羅スルヲ得ス蒸餾器又ハ醸桶ニ據リ或ハ粗製品
ノ種類多寡ニ從ヒテ課税セハ夫ノ製造法ヲ益々改良シテ法律上ニ仮定
セタルヨリモ多量ノ酒精ヲ生産スルヲ得ル所ノ大營業ヲ利スルコト
著シ乃法律ニ於テ大營業ヲ主眼トスレハ勢ヒ小營業ヲ枉害壓倒ス
ノ恐レアルヲ如何セン然ラハ此ノ小營業ヲ保護セントスルニハ如何
ナル法ヲ取ルヘキヤ唯大小營業ノ課税ヲ異ニシ其ノ大營業ニハ生産
物税ヲ課シ而シテ小營業ニハ粗製品税又ハ醸桶税ヲ課シ以テ彼此
間ニ其ノ比例ヲ正當ナラシムルノ外復他策アラサルヘシ

第四百四十四章

以上酒税ノ評定徴收ノ最重ナル方法ヲ列舉スルニ當リ此ノ三種ノ酒
類ハ各皆其ノ生産消費ノ法異ナルニヨリ其ノ税額ノ評定及徴收上ハ
種々ナル困難アルコトヲ論セリ

然ルニ尙他ニ一ツノ困難アリ即税率ノ分度ヲ定ムルコト是ナリ別
スレハ三種酒類ノ税率ハ相互ニ如何ナル比例ヲナスヘキヤノ問題ニ
シテ蓋是其ノ實際上ヨリモ寧ろ原則上ノ困難ト云ハサルヲ得ス
抑此ノ問題ハ之ヲ解答スルコト極テ難シ故ニ從來適實正當ノ解答ヲ
ナシ之ヲ實際ニ行フモノ尙甚稀ナリ即彼ノ最重キ負擔ニ堪ユルヲ得
ヘキ葡萄酒ニ於テ既ニ之ヲ知ルヲ得ヘシ夫葡萄酒ハ最其ノ納税力ニ
富メル階級ノ飲料物タルニアラスヤ然ルニ尙之ニ課税スルノ困難ナ
ルヤ從來之ヲ網羅スル其ノ表面ニ止リ極テ不充分ナル狀況ヲ見ハセ
リ若其ノ課税ヲシテ公正ナラシメント欲セハ尙從來ヨリモ一層ノ重

税ヲ課スルヨリ復爲スヘキノ計ナキカ如シ
 麥酒税ハ必ス葡萄酒ノ如ク重カラサルヲ要ス何トナレハ麥酒ハ麥芽
 質ヲ包含スルノ故ヲ以テ多少食品タルノ効アルヘク又其ノ税ノ重
 キニ過クルトキハ少量ニシテ最多分ノ酒精ヲ含有スル火酒ノ消費ヲ
 勸ムルノ起因トナレハナリ
 火酒ノ税率ヲ定ムルコト最難シ國民ノ風俗及衛生警察ノ点ヨリ之
 重税ヲ課スヘシトハ既ニ世人ノ唱道セシ所ニシテ重税ハ多少其ノ口
 的ヲ達スルニ効アリトスルモ抑酒税ナルモノハ固ヨリ斯ル目的ニ利
 用スルヲ第二段トナシ其ノ財政上ニ關スル目的ヲ以テ第一トセサル
 ヲ得ス且夫最近火酒醸造ハ農業ノ一重要部分ナルヲ以テ若之ニ重税
 ヲ課スルトキハ即自然農業ヲ妨クルノ結果アルコトヲ察セサルヘム
 ラス面シテ火酒税ノ輕重ハ火酒消費ノ多量及其ノ醸造法ノ便否ト密

接ノ關係ヲ有スヘク且其ノ多寡ト云ヒ其ノ便否ト云フハ皆各國ノ狀
 態如何ニ從ヒ極メテ異ナルヲ以テ此ノ点ヨリ之ヲ考フルモ既ニ其ノ
 税率ヲ普通ニ定ムルコト難キヲ知ルヘシ要スルニ財政上ノ收入ヲ減
 シ又農家ノ醸造ヲ減スルノ恐ナキノ点ニ止マルヲ以テ課税ノ最上限
 トナスヘシト云フノ外ナカルヘシ

四 甜菜糖稅

第四百四十五章

砂糖税ニ二種アリ外國ヨリ輸入スル甘蔗糖ニ課スル國境税及内國ニ
 於テ生産シ且消費スル甜菜糖ニ課スル本來ノ税即是ナリ而シテ本項
 ニハ專ラ甜菜糖ノミヲ論スヘシ
 夫砂糖ハ課税スヘキ消費物タルコト殆ト疑ヒナシ蓋砂糖ナルモノハ
 葡萄酒若ハ烟草ニ比スレハ稍必要ノ度多シト雖其ノ消費ハ多少納税

ニ堪ユルノ所得アルコトヲ表スルモノニシテ一家富裕ナルニ從ヒ平均之ヲ消費スルコト益々多量ナルコト常ナリ
 加之砂糖ハ特ニ其ノ目的ノ爲ニ設置セル廣大ナル製造所内ニ於テハルコアラサレハ之ヲ製造スヘカラス而シテ製造所ノ數ハ比例的ニ僅少ナルヲ以テ其ノ税ヲ徵收スルニ容易クシテ且正確ナルヲ常トス亦評定法ノ如キモ未タ最良ノ方法ト云フ可カラサルモ他ノ消耗品税ニ於ケル如キ困難アラズ亦不充分ニモアラサルナリ
 砂糖税ヲ評定徵收スルノ方法ハ分チテ左ノ四種トス

- 第一 粗製品即甜菜ノ重量ニ從ヒ課税ス
- 第二 製造使用ノ壓搾器及其ノ他ノ装置ニ據リテ課税ス
- 第三 糖汁ノ濃淡ニ從ヒ課税ス
- 第四 生産物即其ノ多寡及糖分ノ含量ニ從ヒテ課税ス

此ノ四法中生産物ニ據リ課税スルヲ以テ最完美ニシテ最公正ノ法トス蓋此ノ法ニ於テハ直接ニ製造物ニ課税シ全ク製造家ニ就キ徵税ヘルノ基礎ヲ均一ニシテ營業ノ某種ニ偏倚スルコトナク國庫ノ収獲セント欲スル税額ヲシテ悉ク國庫ニ収得セシメ生産物消費ノ時期ニ按シテ納税ノ義務ヲ生セシメ且多量ノ砂糖ヲ輸出スル國ノ爲ニハ輸出品ハ内國ノ消費税ヲ免レシムヘキカ故ニ輸出者カ曩キニ納税シタルト同一ノ額ヲ拂戻スヲ得ル等ノ利便アルヲ以テナリ而シテ此ノ利便アルニモ拘ハラズ此ノ法ノ未タ普ク行ハル、ニ至ラサルハ當局者間斷ナク其ノ製造所ヲ監視スヘキカ故ニ之カ爲費用ヲ要スルコト多キト其ノ糖分ノ含量ニ就キ明確ニ之ヲ査定スルノ法未タ發明セラレサルニ因ルナリ

生産物税ニ最近キハ糖汁ノ濃淡ニ從ヒ課税スルノ法ナリ此ノ法ハ製

造業ヲ妨クルコト甚シク而シテ其ノ効果ニ至リテハ終ニ生産物税ニ
優ル所ナシ

其ノ他ノ二法ヲ勸奨スル者ハ曰ハク營業ヲ妨クルコト最少ナク且徵
收費ヲ要スルコトモ亦最少ナシト然レトモ之ヲ排斥スル者ハ曰ハク
此ノ二法殊ニ甜菜税ニ在リテハ生産物ノ多寡及性質ニ從ヒ課税スル
カラス蓋技術ノ進歩スルニ隨ヒ新タニ機械ノ装置ヲ發明シ以テ其ノ
法律上ニ仮定セルヨリモ多量ノ砂糖ヲ搾収スルニ至リ之カ爲其ノ輸
出者ノ如キハ其ノ精製砂糖ヲ輸出スル時ニ當リ曾テ甜菜税トシテ什
拂ヒタル額ニ比シテ多額ナル拂戻ヲ受クルノ奇利ヲ生スルコトナシ
トセサレハナリト

五 煙草税

第四百四十六章

煙草ハ消費税ヲ課スルニ最適當ナリトハ輿論ノ公認スル所ナリ夫
包税肉類税食塩税砂糖税ノ如キ所謂消耗品税ナルモノハ大概人頭税
類スルノ性質アリト雖(麥酒税及葡萄酒税ノ如モ亦多少其ノ性質アリ)
獨リ煙草税ニ在リテハ毫モ其ノ性質ヲ有セス即其ノ之ヲ消費スル者
ハ成長ノ男子ニ限り而シテ其ノ嗜好ヲ満足セシムルハ全ク任意ノ需
用ヲ給スルニ過キス且其ノ税源ハ全ク餘計ノ所得ニ外ナラサルナリ
煙草税ヲ評定シ之ヲ徵收スルニ二法アリ即本來ノ消費税トナスト
占ノ法トナス是ナリ
其ノ之ヲ消費税トスルトキハ粗製品税トナシ或ハ生産物税トナシ或
ハ商業税トシテ徵收ス
粗製品税ニ於テ煙草ヲ栽培セル土地ノ面積ニ課税スルト煙草ノ收獲
高ニ課税スルトノ二種アリ而シテ其ノ土地ノ面積ニ課税スルトキハ

則製造ニ妨ケナクシテ徵收スルニ易ク且其ノ栽培地ニ隨ヒ地位ヲ分
ツトキハ則或ハ正確ヲ欲ク所アルモ幾分カ煙草ノ性質ヲモ斟酌ス
ヲ得ヘシト雖其ノ毎年ノ收穫高ヲ斟酌セサルカ故ニ遂ニ煙草栽培者
ノ負擔ヲシテ法外ニ甚シカラシムルコト間マ之レアリ而シテ其ノ納
稅移轉モ亦自ラ之ヲ困難ナラシムルノ傾向アリ是ヲ以テ此ノ稅ハ可
及的其ノ輕キヲ要スルヲ以テ國庫ノ爲收入ヲ生スルコト隨ヒテ寡少
ナリ又其ノ收穫高ニ課稅スルトキハ則其ノ多寡ヲ標準トナスコト勿
論ナリト雖其ノ性質ヲ斟酌スルノ便ナク加之生産者ニ對シ極メテ煩
雜ナル監督ヲ施サ、ルヲ得サルナリ尙此ノ二法ノ何レニ在リテモ煙
草ヲ輸出スルニ方リ正當ニ其ノ拂戻稅ヲ算定スヘカラサルハ共ニ免
カレ難キ所ナリ

生産物稅ハ紙卷、葉卷、刺煙草等精製品ノ重モナル種類ヲ區別シ其ノ重

量ニ從ヒ之ヲ課ス而シテ此ノ稅ヲ徵收スルニハ印紙ヲ用ユルモノ
シテ納稅者ハ收稅廳ニ就キ之ヲ買入レ煙草包裝ヲ開クトキハ印紙ヲ
破損スル様其ノ封シ目ニ粘用スルモノナリ

生産稅ハ消費ノ期ニ近ツキテ徵稅シ多少其ノ性質ヲ斟酌スルヲ得ヘ
ク且輸出ノ時拂戻稅ヲ精密ニ算定スルヲ得ルノ便益アリ然レトモ此
ノ目的ヲ達セント欲セハ其ノ生産ノ始期ヨリ以テ消費ニ至ルマテ之
ニ關スル所ノ總テノ措置ハ悉ク之ヲ監督セサルヲ得サルモノニシテ
製造者ヲシテ實ニ其ノ煩ニ堪ヘサラシムルノ短所アリ而シテ煙草製
造業ハ其ノ數極メテ多ク小製造所トナリテ處々ニ散在スルコト稀ナ
ラサルカ故ニ之ヲ實行スルニ最難ク且費用ヲ要スルコト亦莫大ナク
サルヲ得ス

内國ニ於テ煙草ノ栽培ヲ禁シ粗製品ヲ悉ク外國ヨリ輸入スルトキハ

國境税ヲ課スルノミニシテ即商業税ノ法ヨリ最簡便ナリトス然レトモ煙草ヲ多量ニ産出スルニ適スルノ氣候及地味ヲ有スル國ニ於テ煙草ノ栽培ヲ禁スルハ營利ノ業ヲ制限檢束スルノ甚シキモノヨシテ殆ト其ノ理ヲ知ルヘカラサルハ固ヨリ言ヲ俟タスシテ明白ナリ

第四百四十七章

以上述フル所ノ徵収法ハ皆重量ヲ主眼トシ品位ヲ斟酌スルコト充分ナラス然ルニ煙草ノ品位ハ極テ差別アルモノニシテ消費者ノ納稅力ハ其ノ良否ニ反照シ即普通ハ品位ト納稅力ト正比例ヲナスコト疑フ容ルヘカラス

煙草ノ品位極テ多シ而シテ之ニ應シ以テ課稅スルノ法ハ專占法ノ心ニ出ツルモノナシ
煙草製造ニ就キ現今行ハル、專占法ナルモノハ則國家自ラ之ヲ製造

スルノ權ヲ專有シ其ノ特ニ許可シタル賣捌人ヲシテ之ヲ消費者ニ與捌カシメ以テ其ノ製造費ノ外稅金ニ充ツヘキ金額ヲモ包含スル代價ヲ収ムルニ在リ而シテ其ノ專占法ヲ實行スト雖尙煙草ノ栽培ヲ自由ナラシムルヲ原則トシ唯内外國產ノ煙草ヲ買上ケ之ヲ精製シテ賣捌ク所ノ權ヲ舉ケテ國家ノ專有ニ歸セシムルノミニ
煙草製造ノ專法ヲ非トスル者ハ其ノ不利五アリト論ス即民間工業ノ爲ニ極メテ有益アル餘地ヲ奪ヒ去ルコト其ノ一ナリ、煙草栽培ハ其ノ買上ケ等コ付キ簡易ノ便アラシムル爲多量ニ栽培スル地方ニ限ハサルヲ得サルコト其ノ二ナリ粗製煙草ノ代價ハ政府ノ專定スル所ナルカ故ニ不公平ヲ生スルノ容易ナルコト其ノ三ナリ、專占事業生産物ハ競争者ナキノ故ヲ以テ民間工業者ノ生産物ニ比スレハ下惡ナルコト其ノ四ナリ、政府ニ從屬スル人員ヲ著シク増加シテ其ノ政治上ノ勢

力ヲ強大ナラシメ恐ルヘキ結果ヲ來スコトアルモ知ルヘカラサル
ト其ノ五ナリト

又之ヲ是トスル者ハ右ノ五不利ヲ駁シテ曰ハク第一民間ノ工業既一
發達ノ後始テ專占法ヲ施行スル時ノ外ハ決シテ之ヲ妨クルコトナ
第二煙草栽培地ヲ制限スルハ各地悉ク其ノ必要アルニアラス良シ
ヲ制限スルモ僅々一部ノ栽培ニ關スルノミ第三政府其ノ代價ヲ專
スルモ政府ハ之ヲ一私人ニ比スレハ正直確實ノ購買者ナルヲ以テ
培者ハ其ノ生産物ヲ賣捌ノ期節ヲ失スル等ノ恐レナク又民間工業者
及商業者ニ之ヲ賣渡ス時ニ生スル掛ケ引中常ニ有ル所ノ種々ノ弊害
ヲ免カルヘシ第四專占事業ニ於テ其ノ生産物ハ下賤ナリト云フモ其
ノ證左トスヘキモノ一モ之レアルナシ第五立憲國ニ於テ政府ノ恐
ルヘキ勢力ヲ抑制スルハ其ノ法方固ヨリ乏シカラサルナリ豈一事業ノ

爲ニ特ニ恐レヲ抱クヲ要センヤト要スルニ專占法ハ之ヲ他ノ課税法
ニ比スレハ全ク動カスヘカラサルノ長所アリ即其ノ品位ニ應シテ課
税スルヲ得ルハ此ノ法ノ特有ニシテ最要重ノ事實ナリ又要スルニ此
ノ法ハ各種ノ品位ヲ斟酌シ煙草税ヲシテ消費ニ適實ナラシメ且収
高及土地面積ニ課税スルノ法ニ於テ斟酌スヘキ要件全ク無用ニ歸
ルカ故ニ財政上最有益ナルハ亦喋々ヲ待タサルナリ

抑此ノ專占法ノ長所ハ現今世人ノ普ク是認スル所ニシテ嘗ニ古來該
法ヲ施行シ來リタル國ニ於テ之ヲ保持スルヲ必要トナスノミナラハ
復民間工業者ニ於テ煙草ノ需要ヲ供給シ來リタル國ニ於テモ新ニ此
ノ法ヲ施行スルヲ勸奨ス但新ニ之ヲ施行スヘキハ固ヨリ其ノ理ア
モノニシテ復其ノ是非ヲ論スルニ及ハスト雖唯之ヲ實施スルニ當
リ政治、經濟及財政ノ点ニ於テ之ヲ輕々看過スヘカラサルノ困難ア

就中新ニ之ヲ施行スルトキハ直接ニ從來ノ工業者及商業者ヲシテ其ノ業ヲ廢セシメ之ニ支拂フヘキ賠償ノ多寡ヲ算出セサルヲ得ス是其ノ困難ナル事項ト云ハサルヲ得ス

六 直接消費稅

第四百四十八章

直接消費稅トハ一定ノ財産使用ニ關シ其ノ使用者ヨリ直接ニ徵収スル稅ヲ云フ是ヲ以テ此ノ稅ハ一定ノ支出ニ基キテ其ノ所得アルコトヲ知ルノ点ニ於テハ前條マテ論述セル各種ノ消費稅ニ同クシテ其ノ異ナル所ハ單ニ支出ヲナス者ニ就キ直接ニ之ヲ徵スルノ点ニアリトス此ノ稅ハ財産稅ト混同スヘカラス縱令財産ノ一部分タル物件ニ課稅スル場合ト雖其ノ目的ハ所有權ニアラスシテ其ノ消費使用ニ關ハレタル支出ニ課稅スルニアレハナリ

直接消費稅ハ元來之ヲ間接ナルモノニ比スレハ稍公正ニシテ其ノ額ヲ徵收スルニ易ク且經濟ニモ適スルモノナリ然レトモ其ノ消費若ク使用稍永續シテ其ノ性質上容易ニ隱蔽スヘカラサルカ故ニ一家ノ私事ニ立入ラスシテ能ク網羅スルヲ得ヘキ物件ニ課稅スルノ外ハ此ノ法ヲ用ユヘカラス

直接消費稅ノ主要ナルモノヲ舉クレハ住宅稅、家具稅及僕婢、馬匹、犬、鐵道切符等ノ如ク稍多額ノ所得アルノ徵証トナリ得ヘキ財産使用ニ課稅スルモノニシテ所謂奢侈物稅是ナリ

抑奢侈物稅ナルモノハ下等人民ノ負擔ニシテ稍重カラシムルノ嫌ノル消費稅ニ對スル均重ヲ計リ公平主義ヲ行フ爲多クノ國ニ於テ租稅ノ一ニ加ヘタルモノニシテ其ノ主意ハ頗ル美ナリ然レトモ財政上其ノ收入ヲ生スルコト多カラサルヲ如何セン但奢侈ノ消費ハ主トシテ

多額ノ所得アルノ徵候タルコト疑ナシト雖若其ノ負擔ヲシテ過大ナラシムルトキハ忽チ其ノ消費ノ向方ヲ轉シテ尙其ノ収入ヲ減少スルノ起原トナラサルコトナキヲ免カレサルヘシ

直接消費稅ノ最主要ナルハ住宅稅及家具稅ナリト雖家具稅ハ之ヲ徵收スルニ難ク住宅稅ハ之ヲ非トスル論者尠ナカラサルナリ

住宅稅ヲ贊成スルモノハ曰ハシ住宅ハ大凡實際其ノ住居人經濟ノ能力ヲトスルノ標準トナスヘシ又此ノ稅ハ收入ヲ生スルコト尠カラズ而シテ窓及戸扉若ハ煖爐ノ數ニ從ヒ又ハ借料ノ多寡ニ應シ容易ニ之ヲ徵收スルヲ得ヘシト然レトモ斯ノ如クスルトキハ非常ノ不公平ヲ生スルコト往々之アリ彼ノ借料ノ多寡ニ應シテ其ノ稅額ヲ定ムルニ至テハ殊ニ然リトス蓋家屋借料ハ都鄙ノ差極テ大ナルハ勿論一都府ニ於テモ其ノ位地ノ便否ニ因リ頗ル異ナルヲ以テナリ況ヤ貧者ハ之

ヲ富者ニ比スレハ其ノ所得高ノ中住宅ノ爲ニ費ス所ノ歩合稍大ナルコト常ナルヘク子女ノ多キモノハ之ヲ無子ノモノニ比スレハ家屋ノ借料多カルヘク營業職業ハ住宅ノ位置廣狹ニ關係アルコト少ナカフナルニ於テヤ但其ノ稅率ヲ累退スルノ法ヲ用ユルトキハ多少住宅稅ノ有害ナル部分ヲ免除スルヲ得サルニ非サルハ素ヨリ言ヲ俟タス

七 國境稅(關稅)

第四百十九章

國境稅即關稅ハ一定ノ物品ヲ國境又ハ關稅區ノ境界線ヲ超ヘテ運搬スル時其ノ內國ニ輸入スルト(輸入稅)外國ニ輸出スルト(輸出稅)又ハ內國ヲ通過スルトノ別ヲ問ハス之ニ課スルモノナリ而シテ此ノ稅ハ有稅品ノ消費ニ顯レタル所得ヲ以テ課稅ノ目的トスルカ故ニ消費稅ニ屬シ又輸入者ト消費者ト別人ナルコト常ナルカ故ニ概テ間接稅ニ屬ス

通過税及輸出税ハ至ル所殆ト既ニ廢セラレタルカ故ニ以下輸入税ノミヲ論セン

輸入税ニ於テハ課税物ハ輸入品ナリ其ノ納税人ハ輸入者ニシテ負税人ハ最終ノ受得者即消費者ナリ而シテ税源ハ他ノ消費税ニ於ケルカ如ク全ク消費者ノ所得ナリトス

抑國境税ヲ特別ニ論スルノ必要ハ種々ノ理由ニ出ツルモノニシテ即其ノ要訣ヲ舉ケレハ左ノ如シ

第一 國境税ハ國境ニ於テ概テ統一ノ法ニ據リ特別ノ官衙之ヲ徵收スルカ故ニ其ノ評定徵收ノ法ヲ異ニス

第二 内國ノ消費税ハ一ハ徵税實地ノ理由ニ出テ一ハ其ノ他ノ理由ニ出テ之ヲ課スル物品僅々少數ナリト雖國境税ハ外國ヨリ輸入スル諸テノ物品又ハ總テト云フニ至ラサルモ極テ多數ノ物

品ニ之ヲ課ス

第三 輸入物ニ國境税ヲ課スルハ單ニ財政上ニ止マラス其ノ他ニ國民經濟上又ハ政治上ノ目的ニ出ルモノナリ

凡國境税ノ興廢ニ關スル國民經濟上ノ理由ハ國境税ヲ論究スルノ上ニ於テ最要點トナスヘキコト往々之レアリ是國境税ニ保護税ト國庫税トノ別アル所以ナリ但國庫税ニシテ同時ニ保護税ヲ兼スルコトアリ之ヲ細言セハ外國品ノ價ヲ不廉ナラシメ以テ内國生産者ヲシテ外國ノ競争ヲ免レシメ其ノ利益ヲ保護スルノ目的ヲ兼スルコトアリ即此ノ税ヲ課スルニモ拘ラス外國品ヲ輸入スルトキハ其ノ税額ヲ以テ内國ノ國庫ヲ富裕ラシムヘシト雖其ノ主眼トスル所ハ財政上ノ收入ニアラスシテ全ク國民經濟ノ保護ニアルノミ之ニ反シテ保護税ヲ以テ其ノ目的ヲ完クセント欲セハ外國品ニシテ内國市場ニ入り來ルモ

ノヲ防カサルヘカラス故ニ財政上ニ收入ヲ生スルコトナシ要スルニ保護税ヲ必要トスルノ理由ハ國民經濟ト外交政略トニ出ツ而シテ此ノ税ニ於テ國民經濟上ノ点ニ斟酌スルヲ要スルハ他ノ諸税ニ於テ之ヲ要スルノ分度ニ過キサルノミ

第一百五十章

財政學ヲ論述スル本書ニ於テハ其ノ論スル所主トシテ國庫關稅即國庫ヲ富裕ナラシムルヲ專一ノ目的トスル國境稅ノミニ止ラザルヲ得、ス夫國庫關稅ハ他ノ消費稅ト相離ルヘカラサルノ關係ヲ有スルモノニシテ一ハ內國ノ消費稅ヲ補充シ一ハ秩序上之ヲ擴張スル所ノモノナリ而シテ此ノ關係ヲ約言スレハ則左ノ二項ニ外ナラス

第一 內國ニ於テ消費稅ヲ課スル物品ヲ外國ヨリ輸入スルトキハ內國ノ消費稅ト同一ノ比例ヲ以テ之ニ關稅ヲ課セサルヲ得ス

第二 內國ニ於テ毫モ產出セサルモノナルモ內國ノ消費稅品ニ類似

シ且其ノ性質上內國產ノ消費物ニ同シク課稅ニ適當ナル物品ヲ外國ヨリ輸入スルトキハ之ニ關稅ヲ課スヘン蓋斯ノ如キ物品中ニ在リテ或ハ其ノ消費ヲ無稅ナラシムルトキハ之カ爲內國品ノ消費ヲ減少シ隨ヒテ財政上ノ目的ヲ虛クスルノ恐レノルノ点ヨリセルモ既ニ之ニ關稅ヲ課セサルヲ得サルモノアリ

第一項ノ原則ニ從ヘハ外國ヨリ輸入スル食鹽、砂糖、煙草、葡萄酒、火酒、及麥酒ニ補充ノ關稅ヲ課スルヲ要ス、穀粉稅及肉類稅ノ制ヲ行フ國ニ在リテハ其ノ穀粉肉類ヲ輸入スルトキモ復之ヲ課スルモノトス

第二項ノ原則ニ從ヘハ所謂殖民地產物就中香料、茶、椰子、及珈琲ニ關稅ヲ課スルコト至當ナリ

特ニ茶及珈琲ニ就キテ論スルニ此ノ二品ハ本來ノ食品ヨリモ寧ロ

者修物又ハ興奮物ニ屬スル所ノ事實ニ徴シテ之ニ關稅ヲ課スルヲ至
當トセザルヲ得ス去リナカラ此ノ二品ノ消費益普及シテ下等ノ人民
モ亦之ヲ消費スルノ慣習ヲナスニ至ルト彼ノ有害ナル火酒ノ換用品
トナルノ故ヲ以テ過大ノ稅ハ之ヲ課スヘカラス

第一百五十一章

關稅ノ評定關稅額秤量ノ基礎單位及稅率ヲ定ムルノ方法二種アリ
ハ種別稅トナスノ法ニシテ品種ヲ分チ各其ノ個數重量總量純量ノ別
アリ及丈量ニ據リテ關稅ヲ課シ一ハ從價稅トナスノ法ニシテ届出ノ
物價ニ應ジテ之ヲ課ス
抑從價稅ハ品位稅ノ如キモノニシテ租稅ノ本性ニ適スルコト最多シ
ト雖然レドモ種々ナル理由ノ存スルアリ普通ハ其ノ適用ヲ勸獎ス
ヘカラス然レドモ種々殊ニ如キ從價稅ハ其ノ之ヲ徵收スルニ難シトス何ト

ナレハ納稅義務者ノ届出ハ憑信スヘカラスアルヲ以テ種々ナル監督法
ヲ設ケ且例ヘハ先買權ヲ關稅局ニ與フル等ノ方法ニ據リテ密賣詐欺
ノ惡策ヲ豫防セサルヲ得サレハナリ是ヲ以テ現今ニ至リテハ次第ニ
種別稅ノ法ヲ取り而シテ其ノ從價稅ハ重量箇數ニ據リテ課稅スヘカ
ラサル物品ノミニ限ルコトトセリ蓋種別稅ハ之ヲ徵收スルニ其ノ方
法稍簡單ニシテ舉措便利ヲ得手順迅速ニシテ費用ヲ要スル低廉且詐
欺爭論及密賣等ノ弊ヲ生スルコト却リテ少ナキヲ以テナリ
凡納稅ノ義務アル物品其ノ單位及稅率ヲ列記セルモノヲ稅率表ト云
フ而シテ稅率表ニ「イロハ」分ケト品類分ケトノ二種アリ甲「イロハ」順
ヲ以テ納稅ノ義務アル物品ヲ列記シ乙ハ品類ノ異同ヲ分カチテ之ヲ
列記ス或ハ其ノ大區分ニ「イロハ」順ヲ用ビ小區分ニハ品類ヲ基礎ト
シテ甲乙二種ノ法ヲ併用セシ稅率表モ亦往々之レアリ

凡關稅事務ノ主要ハ第一稅額ヲ正確ニ收入シ第二其ノ徵收ヲ確實ナ
ラシムルノ上ニ於テ其ノ許ス限リハ商業ノ便利ヲ與フルニ在リ
收入ノ確實ヲ保スルニハ納稅品ハ一定ノ街道ヲ經ルコアラサレハ輸
入スルヲ許サス若又鐵道郵便ニ依リ又ハ河海ヲ經テ輸入スルトキ
一定ノ順序ヲ以テスルニアラサレハ之ヲ許サストノ規定ヲ設クヘシ
而シテ密輸入ニ對シテハ斷ヘス國境ヲ監視スルヲ要ス
交通ノ便利ヲ計ル爲ニハ所謂廣義ノ關稅猶豫ハ大ヒニ効用アルモノ
ナリ抑關稅猶豫トハ輸入者カ實際內國ニ於テ其ノ輸入物品ヲ販賣ス
ルマテ納稅ヲ猶豫スルヲ本性トスルモノニシテ而シテ其ノ利益ハ納
稅期ヲ可及的物價受取ノ期ニ近カラシメ以テ其ノ輸入者ヲシテ
長ク展シ入ルヘカヲナルノ靈機ヲナスノ不利ヲ免レシムルニ在リ

ナリ而シテ此ノ猶豫法ヲ實行スルニハ國家自ラ借庫ヲ建設シ商人ヲ
シテ實際販賣ノ時マテ無稅ニシテ商品ヲ其ノ庫内ニ積置クコトヲ得
セシメ又ハ國家其ノ貯積スル所ノ一私人ノ倉庫ヲ封鎖シ需用ニ應シ
テ商品ヲ持出ス毎ニ其ノ監視ヲ受ケル等ノ法ヲ用ユ其ノ無稅港
ヲ設クルモ亦交通ヲシテ便ナラシムルノ一策ナリト雖斯ノ如キ便利
法ハ皆平常多量ノ商品ヲ輸入スル地ニアラサレハ之ヲ實施スヘカラ
サルナリ狹義ノ關稅豫即既ニ納期ニ達シタル關稅ノ納付ヲ猶豫スル
モ亦交通ヲ便ナラシムルニ足ルモノナリ而シテ關稅ヲ徵收スルノ場
所ヲ以テ次第ニ之ヲ內國中央ニ移スハ轉々其ノ交通ノ便利ヲ與ヘ且
其ノ徵收ヲシテ簡易ナラシムルニ大ナル利益アルモノナリ

第百五十三章

夫關稅ハ元來他ノ消費稅ヲ補足シ以テ之ヲ擴張スルモノナレハ一般

ノ消費税ヲ是認スル以上ハ關稅モ亦之ヲ徵收スルノ道理アリト云ハサルヘカラス故ニ苟モ消費税ノ法ニシテ存續スル間ハ國庫關稅ヲ廢スルヲ得サルヘシ面シテ保護關稅ナルモノ則之ニ異ナリ故ニ其ノ興廢ハ固ヨリ經濟政策ノ難問ニ屬スルモノナリ

關稅ヲ以テ單ニ租稅ノ一種トシテ之レヲ論スルトキハ則關稅ハ尋常ノ消費税ニ於テ見ルヘカラサルノ長所就中徵稅實地上ノ便利少ナカラス例ヘハ其ノ交通ヲ支障スルコト比例的ニ少ナク且其ノ評定徵收ノ方法ハ全般殆ト一樣ナルヲ以テ該課稅品ノ多寡ハ以テ關稅事務ヲ執ル所ノ機關ヲシテ煩雜ニ堪ヘナラシムルカ如キ恐アルコトナシ然レトモ此ノ關稅ト雖亦全ク有益無害ノモノト云フヘカラス今其ノ重要ナルモノヲ舉クレハ必需品交通ノ難キヲ感スルノ分度ハ其ノ交通ノ迅速ヲ期スルニ關シテ甚キヲ加ヘ爲ニ國境ノ住民殊ニ其ノ輸入ヲ

業トスル者ヲシテ煩重ヲ覺ヘシムルコト往々益甚シキニ至ルヘシ況ヤ其ノ國境監視ノ困難ナル國ニ在リテハ爲ニ密賣ヲ盛ナラシムルノ危險ヲ免レス行政費上却リテ莫大ノ額ヲ要スルニ至ルヘキヲヤ

八 消費税ノ得失

第百五十四章

凡租稅ノ中ニ在リテ其ノ消費税ノ如ク世人ノ爭論シタルモノハ未タ之レアラサルヘシ一方ニ於テ熱心之ヲ贊成辯護スル者アルニモ拘ハラス他ノ一方ニ於テハ他マテ之ニ反對シテ其ノ論駁ヲ斷タサル者アリ就中爭論ノ觸點ナルモノハ消費税及保護税ノ優劣即通常世人ノ稱道スルカ如ク間稅直稅ノ得失利害ニ在リタリキ

租稅ノ大主義ニ對シ消費税ハ如何ナル關係ヲ有スルカヲ考察セハ即其ノ財政ノ爲ニ有スル所ノ能力ノ範圍ノ如キハ自ラ之ヲ知ルニ足ラ

先ツ公平主義(第一)ニ對スル關係如何ヲ觀察セン抑消費稅ハ収獲稅ニ於ケルカ如ク一部ノ収獲ヲ評定シテ臺帳ヲ設ケ之ニ依リテ徵收スルニアラス則其ノ消費ノ多寡ニ顯出スル所ノ分度ヲ基トスルカ故ニ各個人ハ己レノ能力ニ應シテ任意ニ之ヲ負擔シ之ヲ免カル、ヲ得ヘキカ故ニ其ノ負擔ノ比例爲ニ公平ナルヲ得ヘシ之ヲ別言セハ其ノ消費稅ヲ課スルニ當タリ各個人其ノ所得ニ應シテ消費スヘキ物品ノミヲ選フコトヲ得ルニ隨ヒ消費稅ハ益公平トナリ課稅品ノ必需ヲ感シ且其ノ品位ニ適スル稅率ヲ定ムヘカラサル等ノ有様ニ赴クニ隨ヒ消費稅ハ愈々人頭稅ノ性質ニ傾キ遂ニ下等人民ノ負擔ヲシテ重カラシムルニ至ルヘシ而シテ今普通ノ消費稅ヲ通覽スルニ其ノ中幾分カ該所得ニ應シテ任意ニ之ヲ負擔ヤ又ハ之ヲ免カル、ヲ得ルモノニミアラスト

雖要スルニ消費稅ハ上等人民ヨリモ寧ロ下等人民ヲシテ負擔ヲ感セシムルコト遙カニ多キハ更ニ疑ヲ容レサル所ナリ
 次ニ消費稅ハ經濟ノ主義(第二)ニ對シ如何ナル關係ヲ有スルヤヲ討究スルニ此ノ關係ニ於テモ必需ノ消費物ニ課稅スルコト多ク且稅率高キニ隨ヒ消費稅ハ愈々不完全ナリトセサルヲ得ス又其ノ評定及缺クヘカラサル監督法ノ爲課稅物製造ノ營業ヲ支障シ以テ其ノ發達ヲ妨害スルハ論ヲ竣タス乃此ノ点ヨリスルモ消費稅ハ經濟上有害ヲ免レサルヲ知ルヘシ

翻リテ財政ノ主義(第三)ヨリ之ヲ論スルトキハ則消費稅ハ國庫ノ爲収入ヲ生スルコト多ク且其ノ増減ヲ自由ニシ而シテ負擔者ハ却リテ其ノ負擔ヲ感セサルノ便利アルモノナリ

夫消費稅ハ之ヲ徵收スルニ往々非常ニ多額ノ費用ヲ要スルコトアリ

然リト雖収獲稅ヲ以テ如何ニ之ヲ嚴重ニスルモ決シテ生シ得ヘカ
 サルカ如キ富實ナル收入ヲ生スルハ消費稅タルコト争フヘカ
 ノ事實ニシテ則此ノ稅ハ之ヲ増加スルニ最容易ニシテ繁榮ノ時ニ於
 テハ一般ノ消費使用ノ程度ヲ増スコト常ナルカ故ニ勢ヒ其ノ收入モ
 亦自ラ増殖セサル得ス其ノ他此ノ稅タル常ニ所得ノ消長ニ適セシム
 ルヲ得ルコト容易ナルノ点ヨリスルモ其ノ増減モ亦自由ナリト云フ
 ヘキナリ之ニ反シテ消費稅ハ其ノ收入ノ多寡極メテ正確ナラス稅率
 重キヲ加フト雖豫期ノ如ク收入増加シ難ク且國家カ殊ニ確實ノ收入
 ヲ要スル程度ノ夥多ナル衰頹多事ノ時ニ於テ普通ニ消費ヲ減スルト
 其ニ隨ヒテ其ノ收入ヲ減シ大ヒニ困難ヲ極ムルノ大不利ナシトセザ
 ルナリ消費稅ノ利害得失既ニ斯ノ如ク然レトモ普通ニ之ヲ是ト
 スル所ノ理由ノ最重要ナルモノハ即負擔者ヲシテ其ノ負擔ヲ覺ヘシ

メナルモノナリ此ノ一事決シテ動カスヘカラサルノ事實トス故ニ此
 ノ理由ハ實ニ下等ノ人民ニ對シ消費稅ヲ課スルノ不當ナラサルコト
 ヲ證明スルノ要点トナス所ナリ蓋消費稅ハ敢テ消費者ヲシテ納稅ノ
 行爲ヲナサシメス極メテ些少ノ額ヲ以テ數度ニ之ヲ徵収スルモノニ
 シテ而シテ其ノ稅額ハ全ク物價ニ混交シ納稅者ハ稅額ヲ仕拂フノ時
 ニ於テ其ノ價ニ代フル所ノ物品ヲ受クルモノナリ

然ルニ消費稅ニ反對スル者ハ却リテ此ノ負擔ヲ覺ヘシメサルノ利ヲ
 以テ之ヲ駁論ノ攻具トナシテ曰ハク納稅義務者ハ元來國家ニ對シテ
 如何ナル義務ヲ盡スヤヲ知ラス暗々裏ニ其ノ義務ヲ負ハシメラル、
 モノナリ故ニ下等人民ノ負擔ヲシテ法外ニ重カラシムルノ弊ニ陷ル
 コト益々容易ナリト

今此ノ消費稅ヲ以テ収獲稅ニ比較セハ則収獲稅ハ所得ノ外面ヲ基ト

セスシテ其ノ一部分ノ景況ニ據ルモノナレハ少ナクモ其ノ幾分ハ納税者ノ能力ニ應スルヲ得ヘク且常時ニ在リテハ其ノ収入稍確實ナリトス若夫非常ノコトアラハ之レカ税率ヲ加重シ以テ其ノ収入ヲ増加スルノ便アリ隨ヒテ納税義務者ヲシテ其ノ納額ヲ知悉セシムルヲ得ルノ利アリト云フヲ得ヘキナラン然レトモ此ノ税ハ通常長キ期限内中固定レアリテ容易ニ其ノ所得ノ消長ニ適セシムヘカラス且其ノ税率ヲ加重スルコト亦最困難ニシテ今日ノ如ク次第ニ増加スル所ノ國家ノ需要ヲシテ全然満足セシムヘカラスハ勿論其ノ一定ノ期限ニ一定ノ金額ヲ仕拂フノ義務ヲ以テ納税者ニ負ハシムルニ因リ下等ノ人民ヲシテ大ニ迷惑セシムルコトアルヲ奈何セン

第百五十五章

凡収獲税ニ於テ納税額ノ一定ナルヲ爲下等人民ノ迷惑ナカラサ
ルノ短所ヲ償フヘキハ消費税ニアリ是ヲ以テ消費税ハ概テ租税中最
貴重スヘク又全ク缺ヘカラサルノ一部ヲ占ムルノ理ヲ知ルヘキナリ
苟モ消費税ハ濫リニ之ヲ排斥スルコトナク且其ノ眞價ヲ探知セント
欲セハ絶對又ハ之ヲ収獲税ニ對比シテ論究スルコトナク必ス租税全
般ノ域内ニ在リテ消費税ハ如何ナル動作ヲナスヘキヤヲ講セサル
得ス凡租税ノ何種タルヲ問ハス其ノ得失ヲ論スルニハ租税ノ全般
根底トスヘキモノニシテ消費税ニ在リテモ亦然ラサルヲ得サルナリ
故ニ其ノ問題ハ収獲税消費税ノ優劣ニアラスシテ此ノ二税相持テ直
ニ租税全體ノ次序整然タルヲ得ルヤ又如何ナル方法ヲ以テ之ヲ整然
タラシムルヲ得ルヤニ歸スヘシ
消費税(殊ニ内國及間接ノ消費税)ハ前述ノ如ク特殊ノ性質アルニ由リ
殊更下等人民ヨリ徵税スルニ適當ナルコト疑ヲ容ルヘカラス下等ノ

人民ト雖全ク義務ヲ免レムシムヘカラサルモノナレトモ其ノ擔担ハ可及的寛裕ナラシムルヲ要ス而シテ消費稅ハ最寛裕ナル方法ヲ以テ下等人民ニ國費ヲ負擔セシムルヲ得ヘク且國民ノ多數ヲ占ムル下等ノ人民ハ知識ニ乏シク、人民トシテ國費ヲ分擔スルノ義務アルヲ知ラス或ハ之ヲ是認セス故ニ往々之ヲ強制スルニアラサレハ納稅セサルヲ以テ能ク其ノ教化ノ度ニ適スルモノナリ然レトモ消費稅ハ下等人民ノ負擔ヲ重クスルノ多キハ爭フヘカラサルコトナルカ故ニ下等人民ニ對シテハ之ニ代フルニ收獲稅殊ニ雇賃稅ノ免除ヲ以テスヘシ失業賃稅ハ稅率輕キカ故ニ其ノ收入ヲ生スルコト多カラス納稅義務者ニ對シテハ訴訟ヲ生スル類々ニシテ加之數多ノ少額ヲ徵收スルニ巨多ノ費用ト勞力ヲ要スルノ弊アルハ前キニモ既ニ一言セル所ナリ土地、家屋、資金、營業及一身上ノ所得ニ由リ一定ノ額以上ノ收獲アル其

ノ他ハ人民ハ普通ノ消費稅ノ外特ニ收獲稅ヲ課シテ可ナリ其ノ收獲稅ノ各個人ノ納稅力ニ適スルコト多キニ從ヒ所謂奢侈物ノ消費稅ノ外ニ必需ノ食用品例ヘハ食鹽ニ輕量ノ稅ヲ課シテ愈々害ナキナリ前述ノ如ク此ノ二稅ヲ次序整然併用セントスルハ固ヨリ收獲稅ニ於テ或ハ之ヲ増加シ且其ノ累進比例ヲ自由ナラシムルヲ得ヘキ方法ヲ設クルヲ要ス然レトモ收獲稅ノ前述ノ如ク未タ完全ナラサル間ハ之ヲ併用シテ其ノ利ヲ収ムルコト難シ故ニ之ヲ併用スルニ代ヘテ本來ノ所得稅主義ヲ次第ニ採用スルコトヲ勸奨セサルヲ得サルナリ

第四節 人稅、所得稅及財產所有稅

一 人稅

第一百五十六章

人稅トハ人ヲ以テ納稅主トシ同時ニ課稅物トナス稅ニシテ其ノ最簡

單ナルモノハ純粹ノ人頭税ナリ此ノ税ハ其ノ意義ヨリスルモ亦通常ノ例ニ由ルモ納税ノ義務アル人ニ課スルモノニシテ或ハ各個人ヨリ之ヲ徵収シ或ハ一家ノ首長ヨリ之ヲ徵収ス又老若男女ノ別ヲ問ハス悉ク之ヲ課シ或ハ成長シテ營利ノ業ニ從事スルヲ得ヘキ男子ノミコ之ヲ課スルモノアリ其ノ税額ハ何レノ場合ニテモ各人皆同一ナリトス抑此ノ税ハ昔日種々ナル方法ヲ以テ行ハレタルモノナレトモ毫モ所得及財産ノ如何ヲ斟酌セサルヲ以テ元來頗ル不公平ニシテ國民財産ノ比例餘リ大ナラサル國即開化ノ度未タ進マサル國ニアラサレハ之ヲ實行シテ収入ヲ生スルコトナシ且ヤ老若男女及其ノ身分ノ差別ヲ問ハス各個人ヲ通シテ課シ又之ヲ徵收スルトキハ最不公平ナルコト言フ俟タサルナリ

之ニ反シテ營利ノ業ニ従ユルヲ得ヘキ人ニ限り所得又ハ財産ニ據リ

評定シタル他ノ税ノ外ニ於テ人税ヲ徵收スルトキハ則大ヒニ其ノ利害ヲ異ニス斯クノ如クスルトキハ下等ノ人民ヨリ徵スヘキ單獨ノ税トシテ其ノ道理アルコト例ヘハ食鹽麵包及其ノ他ノ必需品ニ課スル税ニ等シ何トナレハ是等ノ間税ハ人税ト同一ノ性質ヲ有シ其ノ結果モ之レニ亦異ナラス唯其ノ徵収ノ方法稍寛裕ニシテ其ノ費用稍不廉ナルノ差アルノミナレハナリ

人頭税ノ名アリト雖其ノ實人頭税ニアラサルモノアリ例ヘハ其ノ税ヲ課スルニ町村又ハ納税區ノ人口ニ基キ其ノ年ノ總額ヲ定メ町村又ハ其ノ他ノ政治上若ハ職業上ノ團體ニ放任シ而シテ其ノ團體カ之ヲ各義務者ニ賦課スルニ其ノ納税力ヲ標準トスルカ如キ是ナリ

二 分等税

第百五十七章

分等税ハ人税ト本來ノ所得税トノ中間ニ在ルモノニシテ稍所得税ニ近キカ如シ蓋分等税ノ本性ハ或ハ一定ノ年齢以上ノ營利業ニ堪ヘ得ヘキ者ニ對シ悉ク之ヲ課税シ或ハ一定ノ所得例ヘハ精神上又ハ身體上ノ働キニ生スル所得アル者ノミニ課税スルニ在リ而シテ義務者ハ其ノ所得ニ應ジテ等級ヲ分チ之ニ依リテ税額ヲ定ムルモノトス此ノ分等税ハ臺帳ニ據リテ之ヲ評定徴收シ且納税義務者ノ一定ノ階級ニノミ之ヲ課スルヲ以テ其ノ外面上ヨリ之ヲ考フルトキハ則大ヒニ収獲税ニ類スル所アリ

然レトモ分等税ニ於テハ負債ノ利子公共ノ義務及營業費ノ如キ人ノ所得ヲ減少スルモノハ皆之ヲ斟酌スルノ差異アリ是大ニ本來ノ所得ニ近キ所ナリ其ノ所得税ト異別ナル所ハ分等税ニ在リテハ概テ所得ノ概略ヲトスルヲ得ヘキ外部ノ徵候例ヘハ生計ノ分度ニ據リ又ハ其

ノ所得ヲ概査シテ之ニ據リ以テ其ノ税額ヲ評定ス而シテ所得税ニ在リテハ其ノ所得額ヲ細査シ以テ其ノ數ヲ明カニシ且其ノ種類ヲモ斟酌スルニアルナリ

今分等税ノ得失ヲ考フルニ適當ナル人物ヲ以テ調査委員ヲ組織シ分等ノ數過大ナラス而シテ税率殊ニ下等ノ率餘リ重カラサルトキハ則稍満足スルヲ得ヘキ結果ヲ生スルコト疑ヒナシ且其ノ外面ヨリ探知スルヲ得ヘキ徵候ニ據リ其ノ等級ヲ概定スルカ故ニ實際故障ヲ生スルコト少ナシ然レトモ此ノ分等税タル彼ノ所得税ニ類スルコト既ニ斯ノ如クナル以上ハ向來漸次ニ之ヲ所得税ニ變スルヲ以テ正當ナリト云ハサルヲ得サルナリ

又分等税ノ得失ヲ論セントセハ先ツ他ノ税ニ對スル其ノ關係如何ヲ知ルヲ要ス何トナレハ此ノ分等税ハ普ク資本財産ノ税若クハ其ノ二

三ノモノト最親密ノ關係ヲナスモノニシテ之ヲ不問ニ附スヘカラサレハナリ

三、普通所得稅

第一百五十八章

本來ノ所得稅(即普通所得稅)ハ所得ノ動産ヨリ生スルト不動産ヨリ生スルトニ論ナク又其ノ經常確實一定ナルト臨時、不確實、不定ナルトヲ問ハス納稅義務者即特立ナル營利者ノ總テノ所得ニ課稅スルヲ原則トス

所得稅ヲ稱揚スル理由ノ要領ヲ舉クレハ左ノ如シ

第一 公○平○ノ主義ヨリ之ヲ論スルトキハ則此ノ稅ハ普及ニシテ等級ヲ分ツコト容易ク其ノ負債ニ係ルモノヲ減除スルヲ得ヘク、又其ノ些少ノ所得ヲ全免スルヲ得ヘク、而シテ人民ヨリ其ノ國家

ニ對スルノ義務ヲ果スルコトヲ要ムルニハ最自然ニ適シ最直接且簡單ニシテ又最高尙ナル方法ナリ

第二 經濟ノ主義ヨリ之ヲ論スルトキハ則此ノ稅ハ他ノ稅ニ比スレハ所得ノ變動ニ順應スルヲ得ヘキ分度ニ富ミ而シテ工業ヲ妨シルコトナク又消費稅ニ於ケルカ如ク納稅移轉ヲ必要トセス又収獲稅ニ於ケルカ如ク之ヲナスノ道アラシムルコトナシ

第三 財政ノ主義ヨリ之ヲ論スルトキハ則此ノ稅ハ徵收費ヲ要スル極テ少ナク且國家ノ需用額カニ増加シタル場合ニ於テハ總テ他ノ稅ヨリモ之ヲ増加スルコト容易ナリトス

所得稅ヲ非トスル論者ハ概テ其ノ當否ヲ理論ニ徵シテ研究スルニ至ラス單ニ此ノ稅ハ公平ニ之ヲ賦課徵收スルノ道ナシト云フヲ以テ之ヲ拒斥スルノ理由トス

夫本來ノ所得税ハ綿密且数字的ニ確定スル所得額ニ課スルノ税ナリト雖其ノ大體ニ於テ納税義務者ノ届出ニ依據スルノ外復他ニ良法ナキコト及本人ノ届出ハ現時實行ノ狀況ニ於テ未タ充分ノ効果ヲ見ラルハ争フヘカラサルノ事實ニシテ其ノ理由タル一ハ人民ノ多數ニ在リテ殊ニ己レノ資産及勢力ヨリ生スル利益ヲ金錢ニ換フルコトナシ其ノ現物品ヲ以テ直ニ之ヲ消費スルモノアリ且整然タル簿記ヲナスノ法ヲ知ラサル者ニ在リテハ如何ニ其ノ良心ニ當ルト雖自己ノ所得額ヲ精確ニ知り得サルニアリ又一ハ普通ニ之ヲ論スルトキハ今日ハ租税ニ關シテ猶未タ必需ノ良心ヲ存セサルニアリ然リト雖其ノ第一ノ理由トスル缺典ハ格別ニ重大ナリト云フヘキモノニ非ス此ノ缺典トシテ下等ノ國民ニ關シ且所得税ハ下文ニ詳論スルカ如ク其ノ所得額一定ノ程度ニ違スルマテハ極メテ輕ク秤量スルヲ要スルヲ以テナ

リ尙其ノ第二ノ理由トスル缺典ト雖未タ全ク之ヲ補足スルノ術ナキニアラス夫既ニ自己ノ届出法ヲ以テ不完全ナリトスルトキハ則他ニ其ノ完全ヲ期スルヲ目的トスル所ノ保全法及刺撃法ヲ施スコトナクシテ實際ニ行フヘカラサルハ理ノ最親易キモノナリ而シテ其ノ所謂刺撃法トハ届出者ヲシテ其ノ届出ノ確實ナルコトヲ誓宜スルノ義務ヲ負ハムルノ法ニアラス所得税ノ額ニ據リテ選舉權ヲ制限スルノ法ニモアラス即納税者ヲシテ先ツ自己ノ所得額ヲ届出テ而シテ該所得額ヲ以テ其ノ泉源ニ区分シ以テ整然之ヲ明示スルノ義務ヲ負ハシメ且特ニ其ノ調査委員ヲ置キ綿密ニ該届出ヲ調査セシメ若其ノ事實ヲ隱蔽シタルモノアレハ之ヲ處スルニ嚴罰ヲ以テシ又若其ノ届出ヲナサハルモノアレハ委員ヲシテ法律上許ス限リノ方法ヲ用ヒ可及的綿密ニ所得ヲ秤量セシムルノ法ヲ設クルヲ云フモノナリ果シテ此ノ法

ヲ施サハ稍満足スヘキ結果ヲ生スルヲ得ヘク加フルニ此ノ方法ニ依
 リ自然租税ニ關スル良心ヲシテ漸次養成セシムルヲ得ヘシ蓋國家ハ
 活動止マサルモノニシテ租税ニ於テモ亦他ノ部分ノ如ク常ニ發達進
 歩スヘキコト則其ノ本分アルヲ忘ル、コトナク國民中精神上及道徳
 上ニ於テ其ノ劣等ナルモノハ適宜ニ之ヲ強制シ以テ彼等ヲシテ優等
 ノ域ニ進マシムヘシ夫ノ徒ラニ其ノ時機ノ至ルヲ以テ自然ニ任スル
 カ如キハ策ノ最得タルモノニアラサルナリ但此ノ方法タル亦他ノ事
 體ト同シク最初ヨリ一躍シテ其ノ希望ノ如キ満足ノ成績ヲ見ルノ境
 域ニ達スル能ハサルヘシト雖然レトモ今日ノ收獲税ナルモノモ亦其
 ノ缺漏少ナカラスシテ未タ各個人ノ納税力ニ比シ公平ノ課税ヲナス
 ノ限度ニ至ラス猶其ノ前途ノ遠キコトハ必ス之ヲ忘ルヘカラサルナ
 リ獨座今日ノ債權債務ノ關係ニ基キタル經濟上ノ生活ヲシテ發達

セシムルトキハ則此ノ所得税ノ向來漸ク他ノ諸税ヲ壓倒スルニ至ル
 ハ復疑ヲ容ルヘカラス

第一百五十九章

所得税ヲ觀察スルニ二種ノ緊要ナル問題アリテ之ニ伴フコト常ナリ
 即此ノ税ハ累進スルヲ要スルヤ及此ノ税ヲ評定スルニ資本アル所得
 ト資本ナキ所得トヲ區別スルヲ要スルヤ否ノ問題はナリ然レトモ余
 ヲ以テ之ヲ見レハ則此ノ問題ハ所得税ニ固有スルモノニアラスシテ
 却リテ租税一般ニ對スル原則上ノ性質アリテ唯所得税ニ於テ殊更ニ
 之ニ注目スルヲ要スルノミ而シテ其ノ一般ノ原則ニ就キテハ既ニ前
 文隨處ニ之ヲ論述セリ
 累進ニ關スル問題ニ就キテハ前ニ其ノ累進ノ可否ヲ論シタル條項ニ
 從フヘシトノ一言ヲ以テ足レリトス又資本ノ有無ニ因リ所得ヲ區別

スルノ問題ニ就キテ其ノ要ヲ述フレハ則其ノ資本アリテ生スル所得ハ之ヲ努力ノミヨリ生スル所得ニ比シ其ノ納税ノ力ニ富ムコト疑ヒナシ面シテ苟其ノ基源安全及期限ノ異ナル所得ヲ種別セス湧然之ニ同一ノ税ヲ課スルハ固ヨリ公平ノ主義ニ背馳スルヲ免レサルナリ

第一百六十章

抑前章ノ二問題ハ理論ニ於テ極テ緊要ナリト雖今日ノ状態ニ在リテハ實際格別ニ其ノ功效アルヘカラス然レトモ若他ノ諸税ヲ廢シテ之ニ代ルニ單獨ナル普通所得税ヲ以テシ是ニ據リテ租税上ノ總テノ主義要件ヲ完クセント欲セハ右ノ二問題ヲ研究スルノ必要自ラ生スヘシト雖其ノ單獨ナル普通所得税ヲ實行スルコトハ未タ之ヲナシ得ヘカラス則必ス他種ノ税ト共ニ之ヲ並用セサルヲ得サルヘキカ故ニ今日ノ實際ニ於テハ單口此ノ所得税カ他種ノ税ニ對スル關係ノ如何ナ

ルヲ研究スルヲ以テ第一ノ問題トナスヲ要ス蓋土地、家屋、營業、金利等ニ課スル所ノ收穫税ヲ存シテ更ニ所得税ヲ課スルトキハ則是二重税ヲ課スルモノニシテ爲ニ其ノ資本ニ偏頗シ以テ負擔ヲ重カラシムルノ結果ヲ致スヘキナリ

所得税ニ於ケル累進比例ノ分度モ亦他種ノ税如何ニ據ラサルヲ得ス今日ノ慣用ニシテ且下等人民ノ爲又財政上ノ爲大ニ好果アル間税ノ存スルトキハ則所得税義務者ノ最下等ナルモノハ極メテ其人税ノ輕キヲ要シ且一定ノ額以上ノ所得アル者ヨリ課税ヲ始メ累進ノ分度ヲ輕クシテ漸ク所得ノ大ナルニ隨ヒ以テ其ノ重キヲ加フルコトヲ嚮奨スルナリ

所得税、收穫税及消費税ノ三税ヲ連合スル斯ノ如クナルトキハ以テ大ヒニ收穫税主義ヨリ所得税主義ニ移轉スルノ困難ヲ輕減シ就中其ノ

移轉ニ關スル財政上ノ危険ヲ免カル、コト著シ蓋此ノ連合ヲ以テ固ヨリ租税全體上ノ改進既ニ完了シタルモノト看做スヘカラスト雖然レトモ是實ニ其ノ一大進歩ト云フヘキモノニシテ暫クハ此ヲ以テ足レリトスルヲ得ヘク又經濟上各般ノ事項ニ於テ現諸制ト未來ニ企望スル所ノ諸制トヲシテ相鍵關セシムルモノト云フヘキナリ

第六十一章

凡國家カー私人タルノ資格ヲ以テ所有スル所ノ財産ヨリ生スル收入ト手数料トヲ以テ國家ノ需用ニ充テ其ノ不足ハ獨單ナル普通所得稅ノ徵收ヲ以テ之ヲ給足スヘシトノ說ヲ贊成スル者ノ比例的ニ多カラサル所以ハ則輕徭ニシテ實行ノ手段ニ乏シキ新法ノ危険ナルト又今日現行ノ普通所得稅ノ缺典ノ顯然ニシテ未タ完全ヲ得サルトニ外ナラス今姑ク單獨ノ稅ヲ課スル法ヲ實行スルヲ得ルモノトセハ此ノ所

得稅ノ理論上ニ必要トスル條項ヲ完クスルハ他稅ノ企テ及フ所ニアラサルナラン然レトモ充分其ノ各個人ノ所得ヲ知悉スルニアラサレハ所得稅ハ完全ナルヲ得ス何トナレハ若之ヲ知悉スヘカラサレハ則稅額評定ノ差誤ハ此ノ單獨稅ニ於テ甚シキ不公平ヲ生セシムルノ原因トナルヲ免レサレハナリ

乃今日ノ狀態ヨリ之ヲ論スルトキハ普通一般ノ贊成ヲ得ルハ左ノ三項ニ過キサルナルヘシ

第一 單獨稅ハ租稅ノ理論ニ適スルコト最多シ而シテ之ヲ實行シ得ルノ望ミアルニ最近キ場合ハ一方ニハ支出ノ額多カラス他ノ一方ニハ公民ノ所得大概明瞭ナル國ニ在リ尙之ヲ別言セハ即小國ナリトス

第二 今日ノ政治上及社會上ノ狀態ニ在リテハ單獨稅ヲ實行スヘカ

ラス蓋國家行政部局ノ最大部ニ於テ歲出殊ニ軍事費及公債費ハ逐日益増加ノ狀ヲ呈セリ且此ノ稅ハ人民カ良心名譽心及愛國心ニ富ミ且經濟ノ事項ヲ知悉スルニアラサレハ實行ヲ難シ然ルニ各國人民ハ未タ其ノ域ニ達セサルヲ如何セン而シテ此ノ稅ハ縝密ニ各個人ノ收入ニ正比例スヘク加之單獨ニシテ巨額ノ收入ヲ生スヘキモノナレハ右ニ列舉セル諸德ハ實ニ此ノ稅ノ癩吏モ缺クヘカラサル基礎ナリトス故ニ今日ニ在リテハ數種ノ租稅ヲ缺クヘシラサルハ勿論尙宜シク之ヲ整然連合シテ益々簡單且公平ナラシムルニ着眼スヘキナリ

第三

單獨ナル所得稅ノ說ハ今日ニ在リテハ未タ實際之ヲ施シ得ヘカラスト雖理論上及實際上ニ於テモ其ニ價值アルモノナリ抑此ノ說タル處ハ決シテ實際ニ行フヘカラサルノ想像ヲナスコ

トナキニシモアラサレトモ然レトモ租稅ノ改良ヲ試ムルニ於テ當サニ其ノ取ルヘキ所ノ方針ヲ示スハ灼トシテ疑ヲ容ルヘカラス

四 財產所有稅

第六十二章

財產所有稅(簡單ニ財產稅トモ云フ)ハ凡財產(收益財產及實用財產ノ別ヲ論セス)ヲ所有スル總テノ人(自然人及法人ノ別ヲ論セス)ニ課シテ之ヲ徵ス是財產所有稅ノ移轉ニ屬スル一定ノ財產ニ課スル財產移轉稅ト相異ナル所ナリ

財產稅ハ普通所得稅ニ類スル所頗ル多シ而シテ之ヲ極論スレハ則其ノ名ハ財產稅ナリト雖元來財產稅タルニアラス即之ヲ別言セハ基本財產ニ課稅シテ之ヲ減少セシムルニアラス唯財產ヲ所得ノ標準トナ

シ之ニ據リテ所得ニ課税スルノミ其ノ所得税ト相異ナル点ヲ舉クレ
ハ左ノ如シ

第一 財産税ハ庭園家具書籍額面等ノ如キ毫モ利益ヲ生セサル實用
財産ニモ亦之ヲ課ス

第二 財産税ハ財産ヨリ生スル收穫ニ比例セス其ノ代價又ハ評定價
格ニ據リテ之ヲ課ス

第三 財産税ハ勞力ヨリ生スル所得ニ之ヲ課セス
財産税ノ此ノ特殊ナル性質ハ利モアリ亦不利モアリ先ツ其ノ利ヲ舉
クレハ夫ノ特ニ富裕ニシテ且稍多額ノ所得アルヲ証スルコト常ナル
モ他ノ税ヲ以テスレハ課税スルヲ得ルコト稀ナルカ或ハ全ク課税ス
ヘカラサル所ノ實用財産ニ課税スルヲ得セシムル事ニシテ自己ノ能
力ノミヲ有スル下等階級ヲ免税スルカ如キモ亦其ノ利ノ一タリ之ニ

反シテ收穫アル財産モ休止ノ財産モ共ニ同一ノ税ヲ負擔セシムルカ
如キ又勞力ヨリ生スル收入例ヘハ藝術家ノ收入ノ如ク精神的技術的
及肉體的ノ別ヲ論セスシテ隨分巨額ニシテ納税力アルコト疑ヒナ
モ皆之ヲ遺漏スルカ如キ是其ノ不利ナル所ナリ

此ノ不利アルヲ以テ若財産税ハ單獨永久ノ税トシテ之ヲ課スル時ハ
所得税ヨリモ數等下位スヘシト雖其ノ特殊ノ性質ハ普通所得税
ノ傍ラ又ハ特ニ國家ノ需用ヲ加ヘタル場合ニ於テハ之ヲ用ユル最適
當ナルコトアリ

蓋普通所得税ノ傍ラニ此ノ財産税ヲ興ストキハ凡收穫税ニ於ケルカ
如ク實用財産ニモ亦課税スルノ効力アリ故ニ收穫税ノ未タ行ハレリ
ル國ニ在リテハ此ノ税ヲ興スヲ良シトス若之ニ反シテ收穫税既ニ行
ハル、時ニ於テ此ノ財産税ハ即不法ノ二重税ヲ課スルノ結果ヲ致ス

へシ故ニ最注意セザルヘカラス
 又一時國家ノ需用ヲ増加スルコトアルモ事情アリテ彼ノ國債ノ如キ
 他ノ方法ヲ以テ之ヲ辨スヘカラサルカ或ハ之カ爲ニ法外ノ費用ヲ要
 スル等ノ時ニ在リテハ財産ニ應シテ一時ノ税ヲ課シ以テ其ノ需用ヲ
 給足スルハ最勸獎スヘキ良策ナリトス
 此ノ税ノ評定ニ就キテハ大體所得税ノ評定ニ關シ説述シタル所ニ據
 リテ可ナリ唯此ノ税ニ在リテハ各個人ハ何程ノ良心ヲ以テスルモ己
 レノ財産ニ属スル各物ノ價格ヲ確知スルヲ得サルカ故ニ調査委員ノ
 行爲ヲ稍擴張セシメ以テ其ノ注意ヲ充分ニスヘキノミ

第三編 歳入歳出關係論(國債論)

一 財政ノ秩序

第一百六十三章

苟モ財政ノ秩序ヲシテ整然ナラシメ又其ノ運動ヲシテ敏活ナラシメ
 ント欲セハ則歳入ハ其ノ必需ナル歳出ノ額ニ對シ最過不及ナキヲ要
 ス其ノ所謂財政ノ秩序ナルモノハ則歳入歳出ノ間ニ於テ能ク平均ヲ
 得セシムルニ在ルナリ

然リ面シテ其ノ出入ノ平均ヲ得ルノ目的ハ重モナル諸官衙ニ於テ各
 一定ノ期限即所謂會計年度(一ケ年ニケ年若ハ三ケ年)ノ爲ニ豫算ヲ調
 製スルノ法ニ據リテ之ヲ達スルヲ得ヘシ若此ノ豫算即歳計見積書ヲ
 調製セザルトキハ何ヲ以テ其ノ將來ニ要スル所ノ歳入歳出ノ全般ヲ
 通覽スルヲ得ンヤ歳出ハ其ノ必要ノ程度ヲ標準トセス既ニ其ノ通覽

ヲ得サレハ則其ノ用生スルノ時ニ隨ヒ卒然之ヲ辨給シ以テ其ノ檢束ナキカ故ニ到底現在ノ資金ヲ超過シ歲計不足ノ危險ヲ生スルニ至ラシ豫算ノ調製豈忽諸ニ付スヘケンヤ

夫豫算確定ノ順序タルヤ先ツ一會計年度間ニ要スル所ノ歲出ヲ確定シ而シテ後其ノ豫期スルヲ得ヘキ歲入ヲ査定ス是蓋財政ノ自然ニ出ツルモノナリ何トナレハ一私人ノ經濟ニ在リテハ先ツ收入ヲ計リ而シテ後之ニ準シテ其ノ支出ヲ計ルヘシト雖財政ニ於テハ然ラス乃歲入ハ一定ノ範圍ニ在リテ歲出ト相須ツヲ要スルカ故ニ其ノ出入ノ見積ヲナスニ當タリ先ツ需用ヲ確定セサルヲ得サレハナリ凡需用ヲ確定シテ之ヲ見積書ニ記載スルニハ豫メ種々ナル手續ヲ要ス今其ノ順序ヲ畧言セハ第一行政郵局ノ各其ノ需用ヲ確定スルヨリ始ムルモノニシテ即會計年度ノ初期尙ニ於テ下等中等ノ官衙ハ各其ノ必要ト認

ムヘキ歲出ヲ調査シテ歲出見積書ヲ作り之ヲ其ノ上司タル最高等官衙ノ審査ニ付シ最高等官衙ニ於テハ各其ノ所管部内全體ニ渉ル所ノ見積書ヲ作りテ終ニ之ヲ財政ノ最高等廳大藏省ニ廻送スルモノトス一前述ノ順序ニヨリテ需用ノ總計既ニ分明ナルトキハ次キマ之ニ適スル所ノ歲入ヲ査定シ以テ其ノ出入ノ平均ヲ得セシメサルヘカラス最高等財政廳ニ於テ右ノ需用ノ金額ト豫定ノ收入金額トノ二部ヲ合併シ於是乎始メテ財政豫算案ヲナス此ノ豫算案ハ專制君主國ニ於テハ其ノ君主ノ裁可ニ依リ又立憲國ニ於テハ其ノ代議院ノ議決ト君主ノ裁可トニ依リ翌會計年度ノ財政法律ト成ルモノナリ

第百六十四章

凡豫算ヲ調製スルニ當タリ歲出ヲ確定スルハ比例的ニ容易ナリト雖歲入ヲ確定シ其ノ歲出ニ對スル平均ヲ求ムルハ極テ困難ナリ

其ノ之ヲ困難ナラシムル事由三アリ即左ノ如シ

第一 國家歳出中如何ナル事情アリト雖苟モ國家ヲ存立セシメントスル限リハ必ス支給セサルヲ得サルモノ尠ナカラス例ヘハ官吏ノ俸給國債王室費等ニ關スル支出ノ如シ

第二 歳入ノ多寡ハ之ヲ豫定スルノ標準トスヘキ事實ノ鞏固ナラサルカ爲ニ之ヲ確定スルヲ得ス蓋此ノ豫算ヲナスニ當タリテハ必ス最近數年間ノ成績ヲ見其ノ平均額ヲ基礎トナスト雖偶意外ノ事情ヲ生シ其ノ平均算ノ標準ヲシテ全ク無効ニ歸セシムルノ恐レアリ就中營利ノ事業ヨリ生スル歳入及間税ニ於テ殊ニ其ノ恐レ多シトス

第三 歳規ノ歳入ハ豫算ニ及ハサルコトアルニ及殊ニ需用ヲ増加スルモ隨意ニ歳入ヲ増減スルコトヲ得ズ歳入ノ増減ハ

ハ人民ノ經濟上ニ於テ許ス所ヲ以テ程度トナシ尙其ノ需用ノ不足ヲ感セハ特ニ他ノ方法ヲ要メサルヲ得サルナリ

一 過剰及不足

第百六十五章

既ニ歳入歳出ノ額及之ヲ出納スルノ期限ヲ確定スルノ殊更困難ナルヲ知ラハ概テ財政ノ秩序最其ノ宜キヲ得タル國ト雖時アリテ歳入ノ歳出ニ對シテ過剰ヲ見又時アリテ其ノ不足アルヲ免レサルノ理ヲ知ルヲ得ヘシ

歳入ノ歳出ニ對スル過剰ニシテ偶然ノ事由ニ因リテ生シ且其ノ一時ニ止マル時ハ之ヲ貯蓄シテ其ノ豫知スヘカラサル稍小額ノ費用ニ充ツヘキ準備金トナシ又ハ之ヲ營利ノ事業ヲ起スノ資本ニ用ユルヲ得ヘシ之ニ反シテ其ノ過剰永續ノ性質アルコトヲ豫知スヘキトキハ則

租税ヲ減シ人民ノ負擔ヲ輕クスルヲ以テ最良トス何トナレハ其ノ需用ヲ超へタル歳入ヲナスハ財政ノ本性及職分ニ背馳スルモノナレハナリ

第百六十六章

若歳入歳出ニ對シテ不足ヲ生スルトキハ之ヲ救治スルノ困難ナルコト固ヨリ其ノ過剩ヲ處理スルノ比ニアラス
不足ニ二種アリ一定ノ歳入ニシテ一時其ノ納期ヲ遲延セシカ又ハ豫定期限前ニ於テ某ノ仕拂ヲナシタルカ爲不足ヲ生シタルトキハ之ヲ出納上ノ不足ト云ヒ成規ノ歳入歳出額ニ及ハサルカ爲ニ生シタルトキハ之ヲ本來ノ不足ト云フ

第一種ノ不足ハ多少困難ヲ起因スルコトナキニアラサレトモ而カモ其ノ多クハ尋常ノ方策ヲ以テ之ヲ處理スルヲ得ヘシ之ニ反シテ第二種ノ不足ニ至リテハ之ヲ補填スルニ就キ非常ノ方策ヲ以テセサルヲ得サルナリ

凡本來ノ不足及之ヲ補填スル方策ヲ論究スルニ當タリ其ノ不足ハ經常ノ需用ニ生シタルヤ或ハ臨時ノ需用カ之ヲ生セシメタルヤヲ知了スルコト最緊要ナリ

第一 經常ノ需用ニ於テ生シタル不足

夫一會計年度ニ在リテ經常ノ歳出ハ經常ノ歳入ヲ以テ之ヲ給足セサルヲ得サルコト常ナリ若不幸ニモ從來ノ經常歳入ニシテ已ニ需用ヲ満足スヘカラサルニ至ラハ其ノ歳入ヲ減少シタルニ由ルト歳出ノ増加シタルニ因ルトニ論ナク更ニ歳出ヲ節約スヘカラサル以上ハ尙成規ノ歳入ヲ増加シ之ヲ救治ヲナスノ外他ニ其ノ策アラサルナリ然レトモ營利事業ノ歳入及手数料ハ之ヲ増加スルコト極メテ容易ナラサ

ルカ故ニ唯其ノ舊來ノ租稅ヲ加重シ又ハ新稅ヲ興スノ一術ヲ餘スノ
ミ其ノ實行方法ノ如キハ前篇租稅論中ニ其ノ要ヲ詳述セルヲ以テ今
斯ニ再ヒセス

第二 臨時ノ需用ニ因リテ生シタル不足。

臨時需用即費額ヲ一定セス且不規則ニ生スル需用ハ特殊ノ資金ヲ要
ス吾人カ此ニ所謂臨時ノ需用トハ其ノ豫知スヘカラサルカ又ハ其ノ
額巨大ニシテ各行政部局ニ於テ偶々分ノ剩餘ヲ存スルモ之ヲ以テ給
足スヘカラサル臨時ノ需用ヲ謂フ每會計年度ニ於テ建築費家屋修繕
費道路修復費等ノ如キ一時ヲ限リテ其ノ必要ヲ生スル所ノ臨時費出
ヲ要スルコトアリト雖此等ノ臨時費出ノ如キハ時アリテ此ノ行政部
局ニ於テ時アリテ彼ノ行政部局ニ於テ數年ノ内ニハ大體規則正シク
其ノ必要ヲ生シ随分確實ニ之ヲ豫知スルヲ得ヘク又其ノ額モ餘リ莫

欠

MISSING

ナレハ縦令準備金を置クモ全般又ハ少クモ其ノ多部分ノ需用ヲ給足
スルヲ得ヘキ程ニアラサレハ到底其ノ準備ノ効ナカルヘシ若又其ノ
効ヲ奏スルヲ得ヘキ程ノ鉅額ナル準備金を置クトキハ民間工業ヲシ
テ爲ニ莫大ノ資本ヲ失ハシメ而シテ國家ノ爲ニハ許多ノ利子ヲ失ハ
シムルノミナラス尙世間一般ヲシテ其ノ利子ヲ高貴ナラシムルノ結
果アルヲ免レサレハナリ蓋準備金ハ此ノ如ク其ノ効用全カラサルモ
ノナリト雖他ノ理由ノ爲ニ今日ニ於テ之ヲ全廢スヘカラサルモノア
リ即不常敵國ト兵ヲ交ユルニ至リ其ノ宣戰ノ時ニ臨ミ奴卒ノ際軍資
未タ其ノ供給ニ足ラサルカ如キ場合ニ於テ一時之ヲ補闕シ以テ其ノ
充實ニ接續セシムル爲備分ノ準備金を置カサルヲ得サルナリ

第三及第四 租。税。ノ。加。重。及。其。ノ。新。興。又。ハ。國。債。ノ。募。集。

臨時ノ需用ヲ給足スルニハ租税ヲ増加スヘキヤ又ハ國債ヲ募集スヘ

キヤノ問題ハ極メテ人ノ爭論スル所ナリ

租税ヲ利用スルノ法ヲ稱揚スル者ノ説ク所其ノ要領左ノ如シ

第一 國家ニ於テ債券ヲ發行シテ其ノ利子ヲ仕拂ヒ其ノ利子及償還ヲ保スルヨリモ寧ロ國家ハ其ノ需用ニ要スル金額ヲ租税トシテ各個人ヨリ徵收シ而シテ各個人ハ其ノ徵收セラレタル金額ヲ補充センカ爲自然已レノ勞力ヲ増シ且生活上節儉ヲ加フルニ至ラシムルハ民間ニ在リテ經濟ヲ爲ス者ノ遙カニ好ム所ナラン

第二 租税ヲ加重シ又ハ其ノ種類ヲ増スハ公民ノ最好マサル所ナルヲ以テ之カ爲節儉ヲ加ヘ其ノ歳出ノ審査ヲシテ一層綿密ナラシムルノ結果ヲ觀サン

租税増進ニ反對スル者ノ説ク所其ノ要領左ノ如シ

第一 最重要ナル臨時需用ノアル場合殊ニ内寇外患ニ臨ミテハ速カニ租税ヲ加重シ或ハ之ヲ新興センコト多クハ爲シ得ヘカラサルナリ

第二 今日ノ租税法ハ未タ以テ租税ノ賦課ヲシテ悉ク公平ナラシメタルモノニアラス然ルニ更ニ其ノ税率重キヲ加フルトキハ一層ノ不公平ヲ致スノ嫌アルノ一点ヨリスルモ既ニ多クノ國ニ於テハ現制ノ租税ヲ加重スルヲ勸奨スヘカラサルヘシ

第三 支出ヲ辨給スルノ料ヲ租税ヨリ資ルコト、セハ或ハ節約シ得ヘキ支出モアルヘシト雖臨時歳出中時勢ノ強制スル所ニヨリ政府及人民代議院ノ自由ニスヘカラサルモノモナキニアラス而シテ斯ノ如キモノハ却リテ最緊要ノ臨時歳出ト云ハサルヲ得ス例ヘハ彼ノ外患若ハ革命ノ時ニ於ケルカ如シ

是ニ由リテ之ヲ觀レハ巨多ノ臨時需用ヲ生シタル場合ニ於テハ國債ヲ募集シテ之ヲ給スルヲ以テ最適當ノ方策トナスヘキコト常ナリ去リナカラ各其ノ場合ニ臨ミ國債ハ國民ノ資金ヲ吸集スルモノナレハ其ノ國民ノ經濟ニ及ホス所ノ影響如何ナルヘキヤヲ察シ又之ヲ募集スルニハ如何ナル方法ヲ以テスヘキヤヲ研究スヘキハ亦論ヲ俟タサルナリ

是等ノ事項ニ就キテハ尙之ヲ下條ニ評論スヘシ

三 國債

第三百六十八章

夫國家ノ比例的ニ有益ナル規約ヲ以テ負債ヲナスヲ得ルト否トハ國家ノ仕。拂。能。力。及。其。ノ。負。担。ノ。義。務。ヲ。果。サ。ン。ト。ス。ル。ノ。良。心。ニ。關。ス。ル。コ。ト。彼ノ一私人ノ負債ニ異ナルコトナシ而シテ其ノ國家ノ仕拂能力ハ固

欠

MISSING

第六百六十九章

凡國債ノ種類ヲ別ツニ其ノ依據スヘキ点種々アリ

(第一) 國債ヲ募集スル地ニ依據シテ之ヲ別ツトキハ則內國債及外國債ノ二種トスルヲ得ヘシ

抑此ノ類別タル其ノ外面ニ顯ハル、所ヲ以テ標準トシタルモノナレトモ國民ノ經濟上ニ於テハ極テ緊要ナリトス何トナレハ國債ハ之ヲ內國ニ於テ募集スルト外國ニ於テスルトニ隨ヒ其ノ國民ノ經濟上ニ生スル所ノ結果ハ自ラ異ナルヲ以テナリ

外國債トハ其ノ債權悉皆若ハ重モニ外國人ノ手ニ在ルモノヲ謂ヒ其ノ實際外國ノ相場會所ニ於テ發行セタルト內國ニ於テ外國人ノ所得ニ歸シタルトハ其ノ得失ヲ論スルノ上ニ取リテ毫モ殊別アルコトナシ又內國債トハ其ノ債權重モニ內國人ノ手ニ在ルモノヲ謂フ

請フ先ツ其ノ内國債ヲ論セン夫必要ノ資本ヲ内國債ニ資ルトキハ從來生産的事業ニ用ヒタル資本ヲ奪ヒ去ルト且從來ノ資本内國ノ爲ニ運用シ居ラサルトニ隨ヒ其ノ國民ノ經濟上ニ生スル所ノ結果ヲ異ス但其ノ資本ノ運用益類々ニ趣クノ今日ニ際シ且經濟ノ發達充分ニシテ生産的ノ力アルモノハ悉ク之ヲ利用スル國々ニ於テハ其ノ運用セサル資本アルコト極テ稀ニシテ唯内國債ノ爲從來外國ニ於テ下タル資本ヲ内國ニ引上ケタル場合又ハ二三ノ流動國債ニ於ケルカ如ク短縮ノ期限ヲ以テ之ヲ募集シタル場合ノ如キモノハ即此ノ類ナルヘキカ而シテ此ノ場合ニ於テハ國債ハ敢テ有害ナル結果ヲ生スルトナシト雖内國債ノ爲ニ他ノ生産的事業ニ用ヒタル所ノ資本ヲ奪ヒ去ルカ如キ場合ニ在リテハ決シテ然リトセス夫國債ハ安全ニシテ資本ヲ下シ之ヲ活用スルノ期限長キヲ以テ資本家ハ皆之ヲ好ムコト常

ナルカ故ニ新タニ國債ヲ募集スルトキハ爲ニ工業上資本ノ供給ヲ減少シ利子ヲ騰貴シ殊ニ最初ノ間ハ内國ノ工業ヲ害スルノ事實アルハ爭フヘカラス蓋資本家自己ニ於テハ之カ爲其ノ不利ヲ蒙ムルコトナシト雖中等下等ノ人民ニ至リテハ一方ニハ國債ノ利子及其ノ償還ノ資本ヲ得ルカ爲ニ租稅ヲ増スニ因リテ其ノ負擔ヲ重モクシ一方ニハ營業上ノ収益又ハ雇錢ヲ減スルニ因リテ其ノ不利ヲ蒙ムルコト愈甚シカルヘシ

然リ而シテ其ノ外國ノ資本家ヨリ國債ヲ募集スルトキハ前段述フルカ如キ結果ヲ生スルコトナク生産事業ハ其ノ範圍ヲ消縮セス依然トシテ相存スルハ勿論其ノ鐵道敷設溝渠開通等ノ如キ商工業ノ隆盛ヲ企ルノ目的ヲ以テ國債ヲ募集スルトキハ外國ノ資本ハ直接ニ國民ノ經濟ヲ充實ナラシムルノ効ヲ奏スヘシ蓋此ノ際ニ當タリ其ノ利子ノ

外國ニ流出スルカ如キ嫌ナキニアラス然レトモ是實ニ經濟上ノ目的
ノ爲ニ資本ヲ卸シタル場合ニ在リテハ其ノ内國ノ經濟ヲ充實ナラシ
ムルノ効果若ハ又内國ノ經濟ノ爲彼ノ租稅ヲ加重シ又ハ内國債ヲ募
集スルノ起因トナリ得ヘカリシ所ノ總テノ弊害ヲ除キタル所ノ効果
ニ對スル報酬タルニ過キサルノミ乃復深ク之ヲ恐ル、ニ足ラサル
シ

然レトモ外國債ト雖亦全ク危險ナキニアラス例ヘハ此ノ外國債タル
時トシテ内國ヲシテ政略上外國ノ干涉ヲ蒙ラシムルノ起原トナル
トアリ且内外國家ノ關係不穩ノ時又ハ開戦ノ恐レアル時ニ方リテ外
國ニ於テ該所有國債券ヲ一時ニ賣却セントシ爲ニ其ノ相場ヲ下落セシ
ムルカ如キコトアリ但他ノ一方ヨリ立言スレハ斯ル財政上ノ關係ハ又
平和ヲ維持スルニ莫ク有方ノ轉變ヲ與フルコトヲ先ヲ慮ルヘカラスニ

又國債ヲ募集スルニ際シ其ノ債權者ヲ内國又ハ外國ニ擇ムハ全ク國
家ノ意ニ任スヘカラサルモノアリ故ニ國家ノ之ヲ自由ニスルヲ得ヘ
キ程度ニ一定ノ制限ヲ立ツヘキハ殆ト言フ埃タサル所ナリ

第一百七十章

(第二) 債權者ニ與ヘタル保證ニ依據シテ別ツトキハ則之ヲ左ノ二種
トナスヘシ

(甲) 國債元利仕拂ニ充ツヘキ一定ノ歳入ヲ以テ保證トナシタル國債
即特約質入保證國債ハ其ノ第一種ナリ抑此ノ特約質入保證國債ハ官
債地質入法又ハ公共ナル一定ノ歳入ヲ一時債權者ニ賣渡スノ方法ヲ
(以テ) 毎日最屬實行セル所ナリト雖是實ニ方今ノ政體及財政ノ組織ニ
適セス然レトモ今日尙全ク之レナシトモ言ヒ難キモノモノアリ例ヘ
ハ鐵道敷設ノ如ク直接ナル生産事業ヲ興スノ資本ニ充ツヘキ國債ニ

在リテハ該事業ノ収獲ヲ以テ第一ニ其ノ元利償還ニ充ツルカ如キ類ナリ

(乙) 特約買入保証ヲ附セスシテ國家經濟上ノ能力ヲ基礎トスル國債ハ其ノ第二種ナリ而シテ方今國債ヲ募集スルトキハ專ラ此ノ種ヲ選フヲ常規トス

第一百七十一章

又國債ヲ法律上ノ性質ニ依據シテ別ツトキハ則任意國債及強制國債ノ二種トナスヘシ
強制國債ハ其ノ純然タル性狀ヲ以テ之ヲ論スレハ則國家力之ニ對シテ報酬ヲ與フルト否ト別タヌ又人民ノ貴賤貧富ヲ論セス一般徵募スル所ノ國債ナリ此ノ本來ナル強制國債ハ亦之ヲ租稅國債トモ稱ヘキモノニシテ恰モ財產稅ノ如ク之ヲ徵收スルカ故ニ其ノ徵募ニ當

タリ各個人ノ財產ヲ綿密ニ評定スルヲ要ス斯ノ如キ強制國債ハ斷然之ヲ排斥セサルヘカラス請フ其ノ理由ヲ述ヘン夫各個人ヲ強制シ其ノ各個人カ或ハ他ノ目的ニ使用セント計畫シタル所ノ資金ヲ以テ之ヲ國家ニ貸付セシムルハ既ニ不可ナリ況ヤ其ノ人民ヲシテ負擔ヲ感セシムルコト極テ不公平ナルニ於テヤ何トナレハ其ノ賦課額ノ評定ハ到底不充分ナルヲ免レス良シヤ其ノ評定均一ナルモ其ノ各個人ニ於テ一定ノ資金ヲ蓄積シ又之ヲ放入スルハ其ノ貴賤貧富ニヨリ白ラ難易ノ別アレハナリ且ヤ民間ノ資本ヲ減殺シテ其ノ利子ヲ騰貴スル爲ニ內國ノ工業ヲ枉害シ國家ハ之ニ依リテ自己ノ信用ヲ毀損スルノ嫌アリ是ヲ以テ此ノ國債ハ非常緊急ノ場合アルニ非ルヨリハ決シテ之ヲ募集スルノ理アルヲ認ムヘカラサルモノナリ但仕拂ノ延滞金、租稅ノ前納官吏ノ身元保證金及紙幣ノ如キハ皆此ノ強制國債ニ屬ス